

平成23年7月号～平成24年3月号掲載分

# 厳しい避難生活のはじまり

.....  
一日一日を懸命に、  
さまざまな別れと出会い

## この時期の復興に向けた主なうごき

- H23. 7月 復興ビジョン策定の準備開始
- 10月 浪江町復興検討委員会・町民懇談会を開催（～11月）
- 11月 「復興に関する町民アンケート」を実施（第1回）
- H24. 1月 浪江町復興ビジョン中間報告
- 1月 「復興に関する子ども向けアンケート」を実施
- 3月 なみえ 3.11 復興の集いを開催



3か月のブランクを経て復活した「広報なみえ」7月号。『浪江のこころ通信』の連載開始。

二本松の会場で行われた「浪江町の盆踊り」と「相馬流れ山踊り」（8月11日）



久しぶりの再会を喜ぶ多くの来場者でにぎわった「十日市」（二本松駅周辺にて11月5～6日）



400名以上が出席し、犠牲者の冥福を祈った第1回合同慰霊祭（10月16日）



## 吉田 康正さん(権現堂)

取材：元気玉プロジェクト実行委員会 松原  
〔平成23年7月 広報なみえ掲載〕

猪苗代町の中心部から車で30分ほど離れたところにある沼尻温泉には80人ほどの浪江町民が避難している。そのうちのひとりが、元カラオケ店勤務の吉田康正さんだ。



▲「みんなで戻って、浪江町を元気づけよう！ななし（ロッククライミングの仲間）のみんな、がんばれ！」

### ■避難するまで

吉田さんは趣味のロッククライミングの関係で、地震が起こったときには福島市内のジムにいた。あわてて帰った自宅は地震によって大きな被害を受けていたものの、家を片づける余裕もなく車2台で避難することになったという。

吉田さんは、まず横浜の親戚の家に2週間いたが、近くのアパートを借りようとすると「福島の方には貸せない」と言われ、また横浜では浪江町の情報がまったく入らないこともあり、3月末には同じ行政区の住民が避難する猪苗代町の方へ移ることにした。

はじめは体育館での一次避難だったが、4月15日からは沼尻温泉の田村屋旅館で二次避難をしている。

### ■避難所での生活

避難所では朝昼晩とご飯が出るため、どうしても何もせずに部屋に閉じこもってしまいがちになる。そこで吉田さんが大切にしているのは、とにかく外に出て気分転換をすることだ。

スキー場でワラビなど山菜を採ったり、山で趣味のロッククライミングをしたり、車で買い物に出かけたりと活発に動かれています。吉田さんは、「じつと部屋に閉じこもっていてもしょうがないし、考えてもなるようにしかならないから、割り切ってここでの生活を楽しむ気である。」という。

吉田さんは、旅館の自治会の副会長もされており、自治会で声かけやカラオケ大会をするなどして、ひとりになる人が出ないように心がけをしている。

### ■地域のつながり

沼尻温泉では同じ行政区の人が集まって避難しているので、知り合いがいらないわけではなく、かえって浪江町にいたときよりも会う機会が増えたほどだという。そこで吉田さんが心配するのは、せっかく一緒になった町が仮設住宅に入ることでばらばらになってしまうことだ。吉田さんはスーパールの近さから福島市内の入居を希望しているが、人によって希望すると

ころは違ってくる。また、一度仕事を始めるとその場所での新しい生活が始まるので、浪江町には戻りにくくなる。そのため、いつそ避難所の生活の方がいいのかもしれないとも言われていた。

吉田さんは、浪江町に帰ることを半ばあきらめかけている。浪江は生まれ育った町であり、先祖代々の墓もあるので、死ぬまでには浪江町に帰りたいという思いも強い。だから、もし帰れたときには、近所の人とあいさつを交わし、浪江で仕事をするという地震前の生活を取り戻したいとも思っている。ただ、すぐに帰れるわけではないので、今は与えられた環境を楽しむことぐらいしかできないとあきらめがちに話していた。



▲避難している田村屋旅館

# 浪江町民として、100まで生きたい！



福島県

## 鈴木 静子さん(権現堂)

取材：元気玉プロジェクト実行委員会 鈴木

「平成23年7月 広報なみえ掲載」



### ■ 人生のつらさを乗り越える

「生きていてよかった」

3月11日は、夫の四十九日で納骨をすませ、その後に震災が来まらず看護師という職業柄、何かあったら看に行くこともしていました。

3回目の避難先に移り、医療面も安心できる状況になってきて逆にやることなくなり、生きがいを感じられなくなっていました。

若いころに結核を患い生きる目的を感じられなくなり、自殺を図

ったこともありました。その闘病経験と、後に看護師になりたくさんの方々とお会いでき、いろいろな経験をさせていただいたことを「生きていてよかった」という題で、老人会や看護学生などに向けて話をしてきました。

震災があり、避難生活の中で、夢も希望もなくなっていたけれど、ふり返ってみるとつらいことは、そのままずっと続くわけではない、必ず乗り越える時期がある。死ぬのはいつでもできるけれど、生きていかなかったら…。

みんなと一緒に、浪江町民として、100まで生き、浪江で楽しく一生を全うしたいと考えています。

### ■ 避難生活で感じる、

寄り添う看護の大切さ

以前、県立病院の総看護師長をしていた折には、神戸の震災時に看護師派遣をしましたが、実際に被災者側になり、被災地での看護の難しさを改めて感じています。

他県などから派遣されて避難所を訪問してくださる看護師さんもうるさがる様子が見られ、時にはうらさがる場面もありました。

浪江では、訪問看護を行っていたので、リハビリの支援指導の経験を活かして気付いたときに声をかけ、アドバイスしたりもしています。

寝たきりにならず、健康第一で、みんな浪江に帰りたいと願っています。

### ■ 地場産業の夢 豊かな浪江

自然や虫が子どもころから好きで、趣味が高じて天蚕（てんさん）の飼育をしていました。天蚕を使った化粧品は福島県の特許にもなり、「浪江で天蚕を地場産業にしたら」と提案したこともありました。毎年、天蚕の卵を霊山の天蚕の会に届けていましたが、今年はできませんでした。

浪江のきれいな川ときれいな海、資源豊かな山がそのままであってほしいと思います。

最後になりましたが、津波でご家族や家のすべてを失われた方々には、心より哀悼の意を表し、お見舞いを申し上げながら、叶うならば以前の浪江のようにきれいな川と海、そして資源豊かな山が戻ってくることを願っています。



福島県

## 八島 貞之さん(酒田)

取材：元気玉プロジェクト実行委員会 鈴木  
「平成23年7月 広報なみえ掲載」

### ■子どもたちの生活

現在は、義務教育中の子どものいる世帯専用の二次避難所で生活しています。それまでは、私の両親も一緒に生活していたのですが、子どもの祖父母は入居対象ではないとのことから、両親とは別のところで暮らしています。本当は孫の成長を身近に感じてもらいたくないのが忍びないです。

二次避難生活は、一世帯一部屋で生活しているので、子どもが午後9時に寝た後など部屋で仕事ができないのが不便です。

### ■浪江町民をつなげる

#### 浪江の焼きそば

商工会の青年部長時代から、なみえ焼きそばで町おこしをする取り組みを行っていました。もともとこの焼きそばは50数年前に、その当時、地域が貧しくて漁業も農業も重労働で大変だった時代、安く食べ応えがあるものでみんなを元気にしたいという気持ちで、ある食堂が考案したそうです。

今、町が大変な状況ですが、当時の思いと同じくなみえ焼きそばで復興を手助けできたらと思っています。本来私たち青年部は、先頭に立って復興のお手伝いをしたい

のですが、町が立ち入り禁止のため、何もできないのが悔しいです。唯一できることは、浪江町の町おこしを続けていくことだと思っています。それをやっていけば、心の復興につながっていくのではないかと。だからやろうと決めました。

4月29日～5月8日、安達ヶ原ふるさと村でなみえ焼きそばを5000食ぐらい出しました。浪江の人たちが集まって長い時間並んで待ってくれて、暖かい言葉もかけていただきました。

「みんな頑張ってるから、懐かしい焼きそばを食べに来たよ。」

「頑張れよう！」などみんなに元気を届けるつもりが、逆に元気をいただいたと思います。

今後、まだまだ食べられない人も多いので、焼きそばを出す機会ができたらと考えています。売上は義援金などにしたいし、町民が集まれる場を作っていききたいです。

### ■町に帰ったら

自分の仕事である建築業で町の復興を手助けしたい。そのために、浪江の中小企業の今後の補償をいち早くしてほしい。浪江には中小企業が多いので、そのことが無いと、町に戻ったときに事業が

再開できなくなることが心配です。

### ■青年部の仲間たちと

今会いたいのは、ともに町おこしのために汗を流した商工会の青年部の仲間です。町おこしをしながら友情や信頼関係を深めていきました。それはお金には変えられないものです。

町民の皆さんや仲間と1人も欠けることなく、みんな町に戻って力を合わせて復興に取り組みたいの思いです。



## 芹川 輝男さん(権現堂)

取材：元気玉プロジェクト実行委員会 北松  
「平成23年7月 広報なみえ掲載」



福島県



▲芹川輝男さん。7月から「杉乃家」を再開させる。

避難生活が始まってから3カ月経つけど、最初のうちは家族もばらばらで、車中泊をしたり、移動も多くなって大変だった。

今は二次避難所で少し生活が落ち着いたけど、個室で分かれてる分、部屋にこもりつきりにならないように気をつけてる。特に今、力を入れているのが体力づくり。朝9時半から4時間かけて、避難所の裏にある磐梯山に登ってるよ。頂上目指してひとり登るんだけど、てっぺんに着いたときは気持ちいい。ほかにも、避難所の周りに史跡がたくさんあるからちよちよく見に行ったり、お風呂にゆつくり漬かったりしてる。こうやって毎日外に出て運動したり、周りの人としゃべると気分転換になっていいんだ。

浪江町では食べ物屋をやっていたけど、地震の後はずっと休業。

それが縁あって、二本松の駅近くに7月1日からお店を開けることになった。お店の名前は前と同じ「杉乃家」。メニューは、やっぱりなみえ焼そばと、得意の特大エビの天井や、若い人向けのラーメンだな。自分は幸運にも仕事を始める機会をもらえたけど、今はまだ仕事が見つからない人もたくさんいる。自分は今もう年だけど、自分がお店を開いているのを見て、若い人たちが「負けらんねえ！」って元気を出してくれるとうれしい。

浪江町は本当にいいところ。何がいつて、季節の行事がたくさんあったり、漁港があるから、魚がいつも新鮮でうまい。町おこしにも力をいれていて、大堀相馬焼の器でなみえ焼きそばを売り出して、これが最近ちょうど波に乗ってきたところ。でもなにより自慢できるのは、人の良さや、人情の厚さ。これはどこにも負けないと思う。

地震で元の生活が一変したことショックは本当に大きいよ。浪江はみんながばらばらになつているし、この状況ですぐに顔をあげて、前を向いて、なんて難しい。今は一日一日、本当に大変な時をみんなが精一杯過してる。でも、いつかはきつと、みんなで浪江に戻る日がくるって信じてるよ。「がんばっぺ、浪江！」今はこの言葉で力を合わせていきたい。

今はいろいろ大変だけど、悪い部分だけでなくいい部分も見ないと。よく考えると今は毎日温泉に入れるっていう夢みたいな環境にいる。旅館では知らない人ばかりだけど、毎朝散歩していると自然と知り合いもできてきた。この間は花見、今度は温泉まつりがあつたりして、旅館もいろいろしてくれる。

浪江にいたころも津島で毎年お祭りをやっていた。自分で焼き肉を出店したり、歌手を呼んできたりして、町に頼らずに自分たちでやっていたのが自慢だった。

床屋をやっていたから、帰ったらまずはお客さんの顔を見たい。でも津島は放射線量が高くて子どものいるところは帰りづらいから、昔の津島には戻れないかもしれない。でも、20キロ圏外なのでたまに家に帰ると、今までは何とも思ってたなかった風景がどこか安心して見えてくる。

とりあえずの目標は、仮設住宅に入って床屋をやること。店名は「ヘアーサロンさんべい」だったけど「ヘアーサロン浪江」とかにして、みんなが集まって浪江の話ができる場所にしていきたい。二本松市の仮設住宅に入居予定だから、常連の人に開店したら知らせたい。



福島県

## 三瓶 友一さん(南津島)

取材：元気玉プロジェクト実行委員会 松原  
「平成23年7月 広報なみえ掲載」



町の臨時職員で少しだけですが、震災の手伝いをしてから次の朝、帰宅するとすぐ避難命令。すぐ帰ってくると思い、家の中を片付けられないまま、慌てて避難しましたが、もう3カ月近く家に帰っていません。川俣道の駅で車中に2泊して、それから親戚や避難所の体育館に避難。4月17日から今のホテルで避難生活をしています。

子どもたちも学校に入り、放射能も気にせず、学校活動に励んでいます。が、今度、仮設に移動すると一学期で3回も転校するので、子どもたちがかわいそうに思います。

今は、原発事故で浪江にいつ帰れるのか、先のことから分からないため、いつまで二重生活をしなければ

ればならないのか心配です。浪江の自宅にあった物をまた買うとき「これ、あるのになあ」と思いながら買うのがときどきあります。

十日市や大堀相馬焼など浪江のお祭りや名物が消えていくのはとてもつらいし寂しいです。ときどき帰宅して生活をしている夢をみたり、3歳の娘に「お家に帰ろう」と言われることもあります。

浪江に帰ったら家の片付けとお墓参りをしたい。県外に避難した友だちに会いたいし、子どもたちも友だちに会わせてあげたい。

帰るときは、みんなと一緒に浪江に帰りたい。そのためのために、今は大変だけど力を合わせて乗り切りましょう！

地震直後は津波を警戒してお墓のある高台へ逃れ、その夜は近くの北棚塩集会所で夜を明かしました。翌日の朝に原発事故の情報を聞き津島中に退避。その後、避難所を転々として4月7日から磐梯町七ツ森のペンションに世話になっています。

一番つらいのは、部落の中で津波により11名が死亡し、まだ2名の行方不明者がいることです。原発事故により捜索が遅れているため、一日も早く安否が判明してほしい。

亡くなられた方の中には、湛水防除管理者の鈴木謙太郎さんのように、部落を救うためみんなが避難する中を海岸の排水機場へ向い、津波にのまれ亡くなられた方もいらっしゃいます。本当にお悔みの言葉も見つかりませんでした。

6月4日に一時立入りで部落に行きましたが、ほとんどの家屋が流され、囲いの木さえもなく、ただただ荒涼と遮るものもなく、広々とした故郷の姿に呆然としてしまいました。

それでも部落に帰れば復興のことも



福島県

## 森野 珠美さん(川添)

取材：元気玉プロジェクト実行委員会 大木  
「平成23年7月 広報なみえ掲載」



▲森野さんと娘の真奈ちゃん(3歳)



福島県

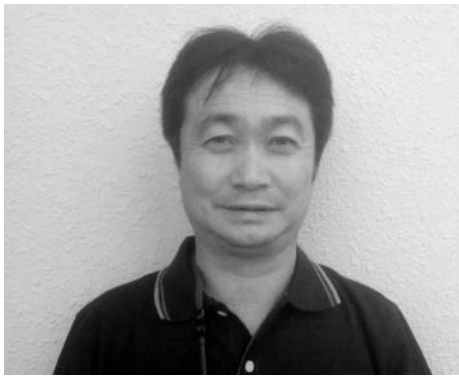
## 舛倉

## 勲さん(棚塩)

取材：元気玉プロジェクト実行委員会 中山  
「平成23年7月 広報なみえ掲載」

また会う日を楽しみに、それぞれの場所ですに進んでいくしかない





## 小野田浩宗さん(小野田)

(ヤングプラザスポーツ少年団団長)

取材：元気玉プロジェクト実行委員会 大林  
「平成23年7月 広報なみえ掲載」



福島県

「やっぱり、全国大会に出よう。」4月30日、綱引きで全国制覇を目指すヤングプラザスポーツ少年団(以下、「スポ少」)の子ども・父兄・指導者で話し合いを持ち、8月7日に東京で開催される全日本ジュニア綱引選手権大会への出場を決めました。最初は、12人のメンバーが県内(福島、飯坂、二本松、いわき、裏磐梯、猪苗代)と県外(埼玉、千葉)にばらばらに避難しているので、「出場を断念せざるを得ないかもしれない」という思いもありました。しかし、話し合いに参加した誰もが、スポ少が全国の舞台に立つことを望んでいることがわかり、練習量の不足や金銭面の負担などの制約を承知の上で、みんなで出場を決意したのです。

ありがたかったのは、各地からの支援でした。大会参加をバックアップしてくださっている日本綱引連盟、県綱引連盟、そして県綱引連盟猪苗代支部の方々。関東に避難している子どもたちを練習に参加させてくれ

ている佐川急便(スポ少OB勤務)の綱引きチーム。ここには書ききれませんが、その他たくさんの方々に支えられ、今では週に一度の地域別練習に加え、月に一度の全体練習ができています。

練習時間は以前の3分の1になってしまいましたが、子どもたちは、限られた時間を大切に、心をひとつにして頑張っています。チームには、練習不足を補う絆が生まれつつあるのです。

綱引きに限らず、避難生活の制約の中で子どもにも我慢を強いる状況が数多くあります。しかし、私たち大人の役割は、少しでもそうした状況を改善し、子どもたちの一度きりの“今”が輝くような環境をつくることだと思います。たしかに、先の見えない生活の中、不安を挙げればキリがありません。しかし、そんな時は「心～まずは一勝～」というメッセージが刻まれたスポ少の団旗を思い出して、一步一步前に進んでいくんだと自分に言い聞かせています。

8月7日、皆さんへの感謝を胸に、「まずは一勝」の精神で、全国大会に臨みたいと思います。離れていても、皆さん一人ひとりのご声援がスポ少の力になりますので、応援よろしくお願いいたします。

僕は、震災後3日目に親戚のいる群馬県伊勢崎市に避難してきました。それからは、おじいちゃん、おばあちゃんも一緒にずっとこのまちに住んでいます。今、通っている小学校に福島県から避難してきた人は僕ひとり。だけど、新しい友だちがたくさんできました。「マヒロ!」と友だちが僕の家までいつも誘いにきてくれます。休みの日は朝から夕方までずっと楽しく遊んでいます。6月5日から横浜や鎌倉への修学旅行も始まりです。



▲麻弘くんのおばあさんが取材者のために作ってくれた手芸品。

会いました。懐かしかったし、できたらもっとたくさん浪江の友だちと会いたいです。みんなはどこにいるのかな。担任の井戸川先生にも会いたいな。こっちの小学校の校歌を歌うたびに、なんだか浪江小の校歌を忘れてしまう気がして、一度お母さんと大きな声で浪江小の校歌を自分の家で歌ったりもしました。以前のように浪江の中央公園で野球をしたり、剣道や習字を習ったり、サンプラザに買い物に行ったり、浪江町に帰って普通の生活がしたいです。それまで家族と一緒に助け合っ



群馬県

## 長竹 麻弘くん(小6)(川添)

取材：高崎経済大学 櫻井常矢研究室  
櫻井・山下 「平成23年7月 広報なみえ掲載」

### 浪江小の校歌を忘れたくない



私は、群馬県東吾妻町で南相馬市の皆さんと一緒に避難生活を続けています。以前は120名ほどの避難者がいましたが、現在は20名ほどになり少し寂しくなりました。避難先の皆さんの食事は、調理師免許を持つ私を含む3人を中心として自炊していましたが、それも私一人になりました。娘と弟とは一緒に暮らしていますが、家族はバラバラのままです。この避難所に常駐する浪江町出身で看護師の大和田純子さんはじめ、皆さんと助け合って頑張っています。大和田さんは、環境の変化に



▲本田さん(左)と看護師の大和田さん(右)



群馬県

## 本田 由美さん(幾世橋)

取材：高崎経済大学 櫻井常矢研究室  
櫻井・斉藤・内山 「平成23年7月広報なみえ掲載」

### 避難先の地域の皆さんとの交流から元気をいただいています

ともなう避難者の皆さんの体調不良を心配されています。

先日、地元の方々の企画で南相馬の郷土料理を作る機会をいただきました。その中でも「晴れの日食堂」というイベントでは、食を通して地元の方と避難者との交流ができました。それがきっかけで、地元の皆さんと親しくさせてもらっています。生活用品を届けてくれたり、調理の手伝いをしていただいたり：感謝しています。ふるさとである浪江町のことを忘れたことはありません。いつか浪江に帰って、この苦しい時を乗り越えたことを皆でふり返って話せることができると願っています。



▲大和田さんは、避難所で避難者の健康体操を行っています。



新潟県

## 横山 俊勝さん(立野)

取材：くびき野NPOサポートセンター 植木  
「平成23年7月 広報なみえ掲載」

立野字坂下から震災後、津島、那須等を経て、義兄がいる柏崎市に避難。浪江町では10人の大家族。今は妹が栃木に嫁ぎ、両親は福島に戻り、祖父母と夫婦、3人の子どもたちとアパートで暮らす。パソコンが唯一の情報手段。浪江町や東京電力の情報確認は大事な日課。

妻の兄夫婦が柏崎市にいたので、親戚20人ぐらいで、車に分乗し自主避難してきました。

寒い時期だったのでまず購入したのが布団、その後、家具などは全て柏崎市の皆さんからの支援でそろえることができました。

そのとき、とても助かったのが「共に育ち合い(愛)サロン・むげん」というラーメン&雑貨屋さんの存在。個人で支援物資の取り次ぎをしてくれて、必要なものを2~3日で調達してくれました。福島からの避難だとわかって、「役立てて」と名前も明かさず1万円を差し出してくれた女性もいました。そのとき、みんなで食べたラーメンの味は忘れられません。おいしかった。

人情溢れる柏崎市の人たちに支えられて、日常生活は送れています。

親戚も徐々に福島の仮設住宅などに戻りつつありますが、小学生の息子たちは新しい学校に慣れてきたので、自分たちはしばらくここで暮らそうと考えています。3歳の詩乃は、「しーちゃんのおもちゃおきっぱ

なしだよ」「ここは、お家じゃない、地震で壊れたのがお家でしょ」とまだ言います。

何より子どもたちのことを最優先に、これからの暮らしを考えていきたいと思っています。



▲アパートの前で。ずっと一緒だったサクラは一足先に福島へ戻りました。  
翔琉くん(小6)、拓海くん(小5)、詩乃ちゃん(3才)、愛犬サクラ



# 伊集院律子さん(大堀)

取材：くびき野NPOサポートセンター 渡辺

「平成23年7月 広報なみえ掲載」

3か月の間に避難場所を9か所も移動。現在は新潟県上越市内のアパートで両親、嫁、孫の6人暮らし。長男は仕事のため相馬市内に。



乳幼児と80代の両親が一緒なので自主避難を選びました。高齢者には遠距離の移動は体力的に辛い、ある程度したら我が家に戻れると信じていたので、避難地域ぎりぎりのところで避難を繰り返してきました。その結果、この3か月で避難場所を9か所も変え、ようやく2か月前に親戚が住む上越市に落ち着きました。

以前に住んでいたところは自然がいっぱい、音といえば鳥の鳴き声でしたが、ここは車の音が多く、最初はびくついていました。慣れないアパート暮らしのストレスに頭を悩ませていましたが、リサイクルショップに出かけたり、孫も公園で遊ぶようになり、少しずつこの地域にも慣れてきました。毎朝近くを通る幼稚園バスを見て「来年から幼稚園に通うよ」と笑っています。

小さい子どもがいるので健診や予防接種などの情報が得にくかったり、アパートなので地域との接点がないことが、少しさみしく感じています。

浪江町ではピアノを教えていて混声合唱団にも関わっていました。先日、団長が取りまとめた団員名簿が送られてきて、仲間からの便りにとても励まされました。

先行きが見えない不安の中、2人の孫の笑顔に支えられながらの生活。上越でもぜひ合唱をやりたいし、それを通じていろいろな人と交流できたらいいなと思っています。



▲アパートの前で孫の花奈ちゃん(3才)と真大くん(10か月)の笑顔に支えられて



母が大切に  
つておいた20  
03年1月の「広  
報なみえ」には、  
息子が保育園の  
ときの集合写真  
が表紙になって

地震が起きたときは勤め先にいて自宅に戻っていないため、父母から話を聞いても家が流されたという実感がわかず、踏ん切りをつけるために6月4日に一時帰宅してきました。玄関の敷居と基礎だけ、あたり一面何も無く、学校がやたらと近く見えしました。自分の家に戻ってきたのに家を見る「目」が、まるで夢の中にいるような、「自分の目」で見ている感覚がなく、いまだに実感がないような感じでした。何でこんなことをしているのか、戻りたいのに何で逆に逃げなければならぬのか、という思いがかけめぐりました。

# 柴 恵美さん(請戸)

取材：くびき野NPOサポートセンター 秋山

「平成23年7月 広報なみえ掲載」

請戸から避難。サンシャインで一泊、翌朝のサイレンで逃げろと言われ津島へ。その後、夫と兄の仕事の関係で知っていた新潟県柏崎市へ。最初は声をかけてくれた海の家に身を寄せる。公営住宅に応募するも倍率が高く外れてしまい、自力で探したアパートへ。



▲先輩から譲り受けた制服を着て柏崎市の中学校へ  
亜華音さん(小5) (左) 駿斗くん(中1) (右)



▶駿斗くんが載っている「広報なみえ」

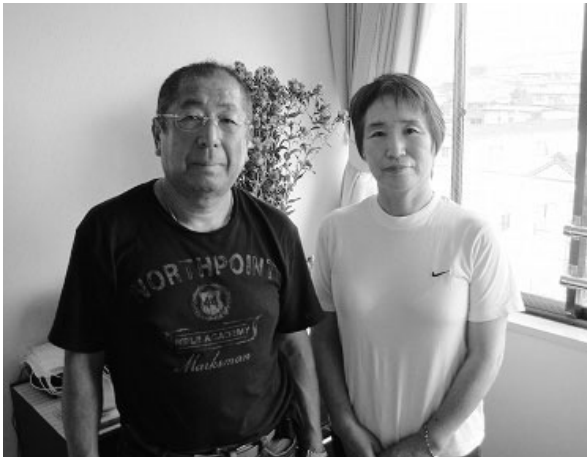
いて、焼き増しして同級生に送ったとしても喜ばれました。携帯電話で撮った2月20日の安波祭のときの写真も。今回の震災で写真が全部流されてしまったので、本当に喜んでくれて…。  
子どもたちには友だちができ、こちらの環境に順応し始めているので、子どもたちのためにはこのままの方が良いでしょうけど、最初は2、3日で戻れるものと思っていたので、ここに落ち着きたくない、やはり浪江に帰りたいという思いがあります。



## 佐藤 眞敏さん(請戸)

取材：(特活)山形の公益活動を応援する会・アミル 齋藤  
[平成23年7月 広報なみえ掲載]

### なみえの美しい海岸線を 是非また散歩したい！



私たちは3月13日に山形市へ避難してきました。元々娘夫婦が山形市に居住していたので、津波で家は流され、そして浪江町が原発10km圏内ということで、年に10回程は訪れていた山形市に息子夫婦、それに孫を連れて避難しました。現在はアパートに入居して近隣で仕事をしながら比較的平穏な生活を過ごしています。山形県の対応は比較的素早く、現在のアパート

の借り上げ手続きもスムーズに行なっていたいただきました。ご近所とは孫と同じぐらいのお子さん、そしてそのお母さんたち世代との交流もあります。

それでも、やはり故郷の浪江町、そして私たちの住んでいた請戸地区へは、一刻も早く帰りたいと思っています。山形市内で山を見ると住んでいた景色を思い出します。特に毎日散歩していた海岸線の美しさや、小さいながら楽しみだつた家庭菜園の野菜や花々は今も心に焼き付いて離れません。そして夏涼しく冬暖かい温暖な気候と、おいしい“ほつき”“めばる”そして“かれい”などの海産物は忘れることができません。また、毎年新年会を欠かさなかった組の12世代の方々とは、是非再会を果たして、恒例だった古峰神社へのお参りへも行ける日を望んでいます。毎年2月に行われていた「安波祭」が、心に強く思い出として残っているのです、何としても再開して欲しいと強く願っております。

残念ながら、津波でほとんどず

べてを失ってしまいました。一家の写真と卒業証書が後日見つかり、唯一生き残った物として、「お守り」替わりにと大切にしていることとみんなで話しています。現在、浪江町の情報は友人との携帯電話を使った情報交換などを通じて得ており、この山形にも請戸から避難されている方もいらっしゃいます。私たち夫婦は5月にイタリアへの海外旅行を予約していたのですが、残念ながらキャンセルせざるを得ない状況になりました。それでも、原発が収束して心にゆとりが生まれたら、是非またゆっくり旅行したいと思っています。地区のみなさんと早く再会できることを強く願っております。



山形県

## 三原 優蔵さん(権現堂)

取材：(特活)きらりよしま  
ネットワーク 高梨・井上・前山  
「平成23年7月 広報なみえ掲載」

### 吾唯足知 (われただたるをしる)

地震発生とともに車で避難し、そのまま避難所生活となった三原さんご一家。避難してきてからは毎朝、上杉神社にお参りしている。願いが一刻も早く通じて欲しい。祈ることしかできない毎日だが、浪江町へ戻ることは決して諦めないという。

現在は米沢市のアパートで、本人、妻、母親の3人で生活をしています。浪江町では、おもちゃ屋9割、自転車屋1割という商売をしていました。現在は、こちらで私と妻がアルバイトをし生計を立てていますが、大学生の息子がおり、経済面でとても心配しています。浪江町のお店のことを思うと、来てくださったお客さまにお会いしたいというのが一番に思うところです。

避難先として選んだ米沢市の避難所の方々や地域の皆さまは本当に良くしてくださって、改めて人の温かさを感じています。

浪江町は山がきれいで海が近く、サーフィンのできるリゾート地です。鉄腕ダッシュのダッシュ村があるところとしても有名です。また、日本一、海に近い酒造会社があるところで、「寿」「天王山」「樂實」といった縁起の良い地酒があります。このような浪江町に一刻も早く戻りたい気持ちがありますが、現実として仕事もない、人もいない、下水も使えなくなっているという状況を考えると戻るとはなかなか難しいと思います。

浪江町での友人や会社関係者、親戚などとは連絡が



取れています。ただ、近所の方々などは各自バラバラに避難したので友人が近くになくて寂しい思いをしています。特に母親はそう感じているようです。

東京在住の娘(三原由紀子)が『壇歌』6月号に『人のさまざま』という作品を書き掲載されています。その中で「今声を上げねばならん ふるさとを失う 我的生きがいとして」という一文に故郷を失うかもしれない不安な思い、そして、これ以上私たちと同じような思いをする人を増やしてはいけない、という思いが込められています。これは浪江町のみなさんの思いを表現していると思います。

現状はとても厳しいですが、友人、知人から支援物資を多くいただきました。生活用品や食料などどれも本当にありがたいものでした。妻は毎朝早く起き、上杉神社にお参りをしています。そこで知り合った方やご近所の方々に温かく接していただき、この震災で本当に人の縁が大切なのだと強く感じています。浪江町のみなさん、諦めないでいきましょう。



山形県

## 鈴木

## 卓さん(請戸)

取材：(特活)山形の公益活動を

応援する会・アミル 齋藤

「平成23年7月 広報なみえ掲載」

「安波祭」「出初式」  
請戸の伝統行事を  
是非守りましょう！

震災後、私たちは「いこいの村」へ避難しましたが、その後の原発事故を受け、南相馬市原町区の実家、飯館、そして友人のネットワークを通じて新潟や山形の情報を得て最終的には山形県に避難してきました。当初は山形市の総合スポーツセンターに避難、その後、天童市の旅館に二次避難しました。高齢者がいるので、やはり食事と風呂の心配が大きく、この天童温泉を避難先を選びました。私自身は、やはり就労が一番心配なので、ここ山形だけではなく、東京方面でも仕事を探しています。雇用形態を選ばなければ、いくつか仕事はみつかるのですが、きちんとした仕事となると難しいのが現状です。まずは自分たちの生活基盤を作ることが最優先だと考えています。

震災後心残りなのは、12日に原発事故が明



## 中西總一郎さん(田尻)

取材：(特活)きらりよしじま  
ネットワーク 小形・原田  
〔平成23年7月 広報なみえ掲載〕

### 前に進む決心



震災数日前に生まれた孫を連れて山形県南陽市に避難されている中西さんご一家。被災していながらも、一刻も早く仕事を通して、復興の手伝いしたいと願う。「阪神大震災は他人事」だったという中西さん。生まれたばかりの孫に浪江町の美しい風景を早く見せたいという。

震災翌日の3月12日に福島原発事故による避難指示により、山形市内の知人アパートに家族5人で避難してきました。その後、南陽市にあるアメリカンビレッジ(トレーラーハウス)を知り移動、長期間の避難に備えました。孫は、震災数日前に生まれたばかりで、病院から原発からすぐ離れるようにとの指導があり退院してすぐ山形に避難してきました。滞在中、南陽市で赤湯温泉 桜湯さんで大浴場を避難者に開放していることを聞き立ち寄った際、桜湯の女将さんが「赤ちゃんがいてトレーラーハウスは大変でしょう」とのことで南陽市役所に問い合わせしていただき、避難所として桜湯に滞在できることとなりました。女将さんのお父さんが浪江町出身であったこと、孫の名前が「桜子」という縁があったのかもしれない。深く感謝しています。

震災では、義理の母と兄が津波の犠牲となりました。兄の確認はまだ取れませんが、母はDNA鑑定で本人確認ができ、葬式をすることができました。母が見つかったことを区切りとして、前に進む決心をし、それまで経営してきた会社を福島県二本松に仮社屋を置き、

再建に向けて取り掛かっている状況です。

地震直後から近所の人や消防などみんなで不明者の搜索活動をしていましたが、12日に避難指示が出され、仕方なく搜索活動を止め避難してきました。もう少し搜索していたら、もしかしたら助かった命があったかもしれないということが心残りではありません。原子力被害がなければ搜索もできたし、避難する必要もなかった。これが原子力被害の恐ろしさであり、ひどいところです。二度とあってはならない事故だと思います。

今思えば阪神大震災は、もしかしたら「他人事」だったのかもしれないという思いがあります。今回の震災を経験して、人と人の助け合いの心の必要性を強く感じました。じっとしてはならない、動かなければダメ。一日も早く復興して、恩返しをしたいと思っています。

私にとって浪江町はかけがえのない故郷です。海、山があり、海産物もおいしいし、山菜もおいしいところです。B-1グルメでも有名になったなみえ焼きそばもおいしいのです。一刻も早く、元の浪江町の姿に戻しましょう。



らかになり、すぐにも救助に入れば助かったかも知れない津波被害の方々を救えなかったことで、消防団員でもあった自分としては、何とも言えない無力感を感じています。

せめて、相馬市の遺体安置所や居住していた地区にマイクロバスでも一時帰宅できる回数を増やして、お線香でもあげたいと強く願っています。

浪江は農業と漁業の町。今はちょうど作付けの時なので、家業で「こしひかり」や「ひとめぼれ」などを作付けしていたのを懐かしく思っています。懐かしいと言えば、2月第3週の「安波祭」や全国的にも珍しい1月2日の出初式もまた、是非参加してみたいものです。前年度の漁獲高で名誉をかけての出初式は強く思い出に残っています。もともと請戸は浜手なので、口は悪いが気は優しい地区。今はゼロからのスタートですが、いつかきつと同級生、消防団の仲間、子どもたちを通じた友人たち、そして隣組の人たちと会える機会を楽しみにしています。自分が旗振り役になっても1年に1回、2年に1回でも良いので、何とか実現したいものだと考えています。



## 金澤 良行さん(高瀬)

取材：(特活)きらりよしじまネットワーク 寒河江・井上  
「平成23年7月 広報なみえ掲載」

### 被害者となり、感じること



震災翌日に避難し、米沢市小野川温泉にて避難所生活を送っている金沢さん。米沢から仙台、南相馬を往復する毎日だが、7月には南相馬市のアパートに引っ越す予定だという。原子力発電所事故の正しい情報、浪江町の今後についての情報を求めている。

3月11日の地震当日、近くの避難所へ行きましたが、翌朝に避難指示があり、そのまま山形県米沢市へ避難して来ました。

避難当初は避難者受入れ準備もなく食料にも困りましたが、徐々に改善され、支援物資をいただきながら生活を送りました。

その後、米沢市役所の方から小野川温泉「河鹿荘(かじかそう)」を紹介していただきお世話になっています。現在は仙台に事務所を借りましたのでここから仙台まで通い、その帰りに妻がいる南相馬へ立ち寄り、河鹿荘へ戻るとい生活を送っています。

今は、浪江町へは戻れるのかどうか、はつきりした情報が欲しいです。地元へ帰りたいと思う方はお年寄りを中心に多くいると思いますが、新しく浪江町へ住みたいと思う人はいないと思っています。私も浪江町に戻り、再建したいという気持ちはありますが、戻れたとしてもお客さまがない、雇用もないことを考えると不安の方が大きいです。

子どもの学費や生活費など経済的にも不安定な日々で、避難生活にはいまだに慣れません。

原発事故に関しては、情報が錯綜しており、どの情報を信じたら良いのか分からなくなっています。

浪江町は「原発の町」のイメージがありますが実はそうではなく、実際は浪江町周辺の方々が多く原発に関わっていました。今回の原発事故により、私の人生が大きく変わってしまいました。原発事故による被害が予想以上に甚大であることをもつと多くの国民の方に知っていただきたいと思っています。聞くところによると、東京あたりでは原発事故の事をそれほど深刻に考えていないようだ、といった話もあります。浪江町長もメディアに出て現状を訴えています。まだまだ足りないと感じています。

現在、引っ越し先の申請を行っており、順調にいけば7月には南相馬市にあるアパートに引っ越す予定です。今までお世話になった避難所の方々や米沢市役所の方、河鹿荘の方々など、山形の方はみんな温かくて大変感謝しています。今後、みなさんへお礼をしていきたいと考えています。



## 地域のつながりが取り戻せる日が来ることを願う

### 森 美恵さん(棚塩)

取材者：高崎経済大学 櫻井研究室 櫻井・山本・亀井  
取材日：7月9日 「平成23年8月 広報なみえ掲載」



▲森美恵さん、優仁くん(小2)、母シゲ子さん

震災後、津島中学校から郡山市内の高校、そして父の会社を頼って千葉市に移ったあと、3月下旬から栃木県小山市内にある現在のアパートに個人契約で入居。母と息子と3人で暮らしている。

いつも気にかけているのは、やはり子どものことです。小学校2年生になる優仁<sup>ゆうじん</sup>は、最初こちらの小学校が全校生徒886名という大規模校のため慣れない様子でした。また親としては、小児科の病院が以前のようにならなくなったので落ち着いてきました。むしろ大震災から4カ月が経つ今、息子が少し大人になつたように思え心強くもあります。

現在のアパートの住まいは、近隣の方との付き合いもほとんどなく、住宅が密集しているせいか息苦しい感じがします。1年後にはどこか落ち着ける場所に移りたいと、家族では話し合っています。それがどこになるのかはまだ分かりません。浪江に戻りたいという気持ちはありますが、子どもの安全のことを考えると不安も多いです。

ふり返ると、浪江では近所の方とのつながりも強く、水田や自然に囲まれ暮らしていた生活が思い出されます。毎年1月に船で沖に出る出初式、かつて私の父も活躍した野馬追、そして十日市などが懐かしいですね。新鮮なワカメ、おいしいカツオのお刺身なども食べたいですね。

私たちの住んでいた北棚塩地区の隣組で支え合う関係も大切な思い出です。この『浪江のこころ通信』のように、浪江のこころのつながりを大切にしようとする取り組みがあることは、とてもありがたいことです。北棚塩行政区の佐々木区長さんは、区の住民同士が情報を共有できるようにと、皆さんの連絡先を発信しています。幾世橋小学校で息子の担任だった三瓶先生は、『学年だより『ねえ、きいて』』を自ら発行され、子どもたちの素直な言葉を届けられています。地域の皆さんや友だちのつながりを途絶えさせないようにとの努力には、私の母と一緒にとても感謝しています。お互いが今どうしているのかを確認できることで安心できます。知らない土地で暮らしているのでなおさらかもしれないですが、お互いのことを親身になつて助け合う地域の強い絆が、浪江にはあったことを改めて実感しています。そうしたつながりを取り戻せる日が来ることに希望をもってこれから頑張っていきます。



東京都

## 下河邊行高さん・由美子さん(権現堂)

取材者：高崎経済大学 櫻井研究室 櫻井・竹内・篠木

取材日：7月17日 「平成23年8月 広報なみえ掲載」

### 地域産業の再興による雇用創出こそが必要 まちの復興の役に立ちたい

震災後、親族12名と一緒に東京の親戚を頼って避難。7月から現在の西東京市に中学生の次女と3人で住む。大学院生の長男、専門学校生の長女とは離ればなれで暮らしている。行高さんは、福島県内で自社の再興に向けた準備のため東京と福島を往復する日々を送る。



▲(左から) 行高さん・姉の高木道子さん・由美子さん  
故郷から届いた地酒 壽・地縁復興純米酒を手に

いまは収入の無い中で、都内のアパートの家賃の支払い、二人の子どもへの送りなどが大変です。でも、今回の震災の経験から、親戚縁者から本当に支えていただき、人の恩の温かさを心の底から実感しています。浪江町の素朴な暮らしの中にあつた人のつながりの強さというものもいつか必ず取り戻したいです。

震災の前は、コンクリート二次製品の会社を運営し、エコリサイクル製品の開発などを進め、まさにこれからというときでした。ショックはありますが、後ろ向きになるのではなく、自分にできることをやっていきたいです。現在は、福島県内での事業再開をめざし、県の補助事業や中小企業庁との交渉を進め、ようやくその見通しが立ってきました。浪江町の地域産業の再生に向けては、商工会青年部など若い人を中心に復興への機運は強いと思います。こうした人材や熱意を活かし、地域に根ざした産業を再生して働く場所を確保することこそが町の復興に結びつくと考えています。地元の方々の再雇用を実現しながら浪江町の役に立ちたい。そんな思いです。

最初に避難していた高崎市城山地区の小学校は1カ月くらいで転校しました。今通っている小学校でも友だちがたたくさんできて、元気に楽しく過ごしています。いつも友だちと自転車に乗ったり、ゲームをしたりして遊ぶことが多いです。浪江にいたときは、お父さんも指導していたスポーツ少年団で柔道を頑張っていました。今は、羽生市の柔道会に入ってお父さんと一緒に続けています。

地震のあとは請戸小の友だちに会うことはほとんどありません。卒業式もまだしていません。7月30日に請戸小学校の「卒業生を励ます会」があるので、そこで友だちや担任の武内先生に会えることが楽しみです。

請戸の浜祭りのとき、砂浜の宝探しやホッキ貝拾いをしたことを思い出します。いつも砂浜で遊んでいたことも楽しかったです。けれど、ここには海がないのでそれはできません。「いつか必ず請戸に戻って元の場所で暮らしたい。」そう強く思っています。



かいと 海斗君はお父さんの実家に近い群馬県高崎市に避難し、そして現在は埼玉県羽生市にご両親と3人で暮らす。津波で体調を崩した祖父と祖母は高崎市に残り、中学生のお兄さんの寮にいて、家族は離ればなれとなっている。



埼玉県

## 泉田 海斗くん(小4)(中浜)

取材者：高崎経済大学 櫻井研究室

櫻井・山本・亀井

取材日：7月9日「平成23年8月 広報なみえ掲載」

### 海の見える請戸に 必ず戻りたい



## 岡本 博之さん・真由美さん(酒田)

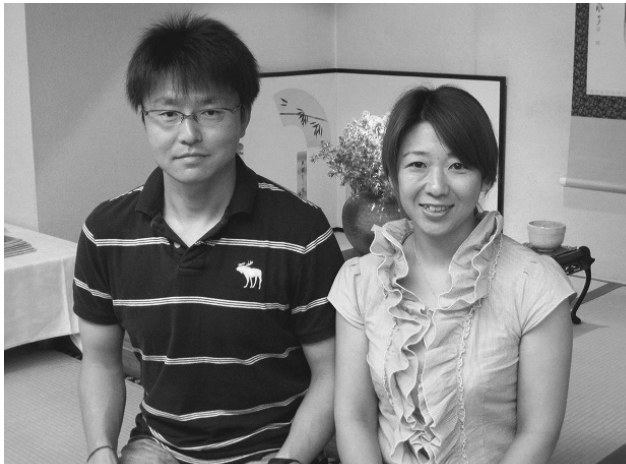
取材者：(特活) 山形の公益活動を応援する会・アミル  
齋藤・柴田

取材日：7月11日 「平成23年8月 広報なみえ掲載」



山形県

### 浪江町の皆さんとの心の絆を支えに



▲山形市内にて (左) 博之さん、(右) 真由美さん

原発事故による避難指示があり、3月17日に南相馬市の親戚14名と山形市へ避難。消防士の博之さんは、勤務地の榎葉町と山形市を行き来している。子どもたちが夏休みに入った8月にいわき市へ引っ越す予定。

震災翌日、原発事故による避難

指示があり3月17日から山形市内に避難しています。現在、3人の子どもたちは山形市内の小学校に通っていて、日常的なリズムに慣れてきたので少し安心しています。今は二次避難先のホテルにいます

が、3か月間過ごした避難所では、教育委員会の先生による学習サポートやスポーツ教室の時間があつたり、美容師の方が定期的に訪問してくれたり大きな不自由はなく、子どもたちものびのび過ごすことができましたと思います。

現在は、役場からは離れているので情報への不安も多少ありますが、二本松にいる知人などを通じて情報を入手しています。手続きなどが後手後手になってしまうと困るので、できるだけ直接二本松に行くようにしたいと思っています。

先日、長男が所属していた陸上クラブの大会があり参加してきました。陸上クラブの行事が家庭に溶け込んでいたこともあって、子どもたち同士の交流や父母の皆さんと懇親も無くなってしまったことは残念でした。しかし、子どもたちがこれまで努力して取り組ん

できたことは無駄にさせたくないで、8月に行われる合宿にはぜひ参加させてあげたいと思っています。

3月25日には、父と息子1対1の初めての「男旅」をする予定でしたが、行くことができなくなっていました。落ち着いたらそんな親子の触れ合いの時間もまたつくっていききたいと思っています。

また、私たちの住んでいた浪江町酒田の近くの河川敷で春に行われる「桜まつり」を今年も楽しみしていました。花火も打ち上げられ家族や地域のたくさんの方が集うまつりを懐かしく思っています。

場所によってはまだ放射線量が高い場所もあり、帰町後子どもたちの体への不安がまだ残ることも事実です。しかし、こういう状況でこれまで見えていなかった心や絆が見えてきて、そのつながりを支えにしています。浪江町に帰れる日を楽しみにみんなで頑張っていきたいと思っています。



# 佐藤 博美さん(北幾世橋)

取材者：(特活) 山形の公益活動を応援する会・アミル 柴田

取材日：7月12日 「平成23年8月 広報なみえ掲載」



山形県

## 今できることをちょっとずつ

「放射能の影響で子どもたちがストレスを抱えて過ごすのなら…」と福島県内から離れる決心をし、いくつかの避難所を経て3月17日に家族、親戚の皆さんと山形県中山町へ避難。幾世橋小学校PTA会長を務める博美さんは、震災後、さまざまな方の協力を得て、全校児童の無事を確認することができたそうです。

震災当日は自宅にいましたが、請戸の実家が心配で見に行った途中、逆流する川をみて大変なことが起きていると思いました。

5月26日に自宅へ一時帰宅をしてきました。海の見える浪江の景色は懐かしいのですが、望んでいた景色ではありませんでした。それでも私たちの町であり、91歳になる祖母にも生まれ育ったこの地をまた踏ませてあげたい、子どもたちにもこの風景を見せたい：受け入れなければ前に進んで行けないと思っています。

一番不安なのは子どもたちのことです。現在、長男は中学校へ長女は小学校に通っています。同じ環境を整えても、どうしても前と同じことはしてあげられません。今は友達もでき元気に通ってくれています。入学式の朝の長男の落ち込んだ背中は今でも忘れられません。卒業式もさせてあげられず、県外の中学校に入学することに戸惑い、させなくてもいい不安な思いをさせてしまったと思います。ですが4カ月たった今、小学校の先生や保護者の皆さんと協力して7月末に卒業式を行う準備をしています。少しでも多くの方が参加して、保護者の皆さんや子ども

たちと会えるのを楽しみにしています。震災後、同級生の半分が県外に避難して多くの方の連絡先もわからない状態でしたが、さまざまな方の協力を得て、全校児童の無事を確認することができました。改めて自分たちの住んでいた幾世橋の地域の皆さんが、いかに子どもたちのことを考えてくれていたかを再認識し、本当に皆さんと同じ地区で暮らしていて良かったと思います。今回、広報紙の発行が再開されたことも嬉しく、少しずつ前に進んでいることは間違いないと実感しました。

中山町の皆さんはあたたかく、行政の方や地域の方の協力で、生活環境も整い普通の生活ができるようになりました。ですが、望んでいる生活とはどこか違うと思うときもあります。私たちは浪江町民であり福島県民です。今は渡り鳥の休憩地点だと思っています。子どもたちの体に何らかの影響がある今は県内に戻れないと思っていますが、まずは福島県内に戻り浪江町に戻れるよう一歩ずつ前進していきたいと思っています。



◀中山町の避難所の前で長女りょう綾ちゃんと。

花壇に浪江町の花“コスモス”の種をまき、花が咲くのを楽しみにしています。



## 岡 裕美さん(苧宿)

取材者：特定非営利活動法人 市民公益活動パートナーズ 古山  
〔平成23年8月 広報なみえ掲載〕



### 友だちに会いたい

浪江町苧宿地区に父方の祖母、父母、姉と住んでいたが、3月14日、周りの人たちよりもやや遅れて福島市に避難。現在は父母、姉との4人で暮らす。当初はあづま運動公園に近い母方の祖母の家で10日間過ごし、その後、現在の上浜町の家に移居した。

浪江の友だちのみなさん福島に来てください。メールや電話も待っています。

上浜町の一軒家では、入居当時から近所の方々に食べ物や家電製品などの差し入れをいただいたり、母方の親戚からも野菜の差し入れがあり、本当に助かりました。

父は今、いわき市に単身赴任をしており、週末には福島に帰ってきます。母は霊山町で、また姉は介護福祉士として福島市内で仕事をしています。

私は、3月1日に高校を卒業し、すでに仙台市長町の専門学校で作業療法士の勉強を3年間することになっていましたので、今は福島からはJRで通学をしています。

仲の良い友だちは、就職の関係もあって茨城や栃木、東京に移ってしまい、震災後まったく会えないので、ときどき電話やメールをするけれど、やっぱり会いたいと思います。それと、小学生のころから飼っていた犬を避難するときに置いてきたのですが、母が一時帰宅をしたときにはすでに亡くなっていて、とても悲しかったです。

高校の陸上部ではマラソンをして、福島駅伝の代表を務めました。母もマラソンを始め、最近では夕方や夜、家の近くを走ったりしてい

ます。今度、あづま陸上競技場で行われる県総体に相双地域の後輩を応援に行くので、そのときに何人かの友だちに会えるかもしれませ

浪江町は、緑が豊かで地域の人の仲がとてもいいんです。町をあげてのお祭りも盛んです。11月下旬の十日市や2月の裸参りなど毎年楽しみにしていました。母たちが福島に避難している人たちと一緒に、もうすぐ四季の里でパークキューをやるらしく、楽しみにしています。

浪江の家は農家なので、周りも田んぼや畑で、隣のお家とはだいぶ離れていました。でも、福島は両隣が家ばかりですし、蒸し暑いのも結構大変です。そういえば、今年は家で作ったスイカが食べられないのが残念です。

でも、いいこともありました。いつもの年だったら5月は田植えでもとても忙しいのですが、今年は家族みんなであちこちへ遊びに行きました。花見山、裏磐梯、山形の山寺にも、考えられなかったことだったので嬉しかったです。

避難する前に、父と津波被害に遭った請戸の様子を見に行きました。いつも見ていた景色のあまりの変わり様に呆然としました。帰

ることができたなら、復興のお手伝いをしたいと思っています。  
「今はみんなに会えないからつらいけれど、いつか浪江に帰れるときが来るから、それまでお互い頑張りましょう」と、浪江町のみんなに言いたいです。



▲明るくいかなきゃ！



## 伊東 建策さん(請戸)

取材者：高崎経済大学 櫻井研究室  
櫻井・竹内・篠木

取材者：7月17日  
〔平成23年8月 広報なみえ掲載〕



▲(左から) 建策さん、真司くん(高2)、  
美緒さん(小4)、庄司くん(小6)、  
育子さん

### 地域の皆さんが集まる場、 交流の場が取り戻せたらいい

津波で築7年目の請戸の自宅が流される。地震の時、学校にいた高校生の長男とは3月16日にようやく再会。新地町にある妻・育子さんの実家も余震で不安な状況となり、親戚を頼って千葉県松戸市の現在のアパートに移る。建策さんは福島原発の関連企業に現在も務め、数週間に一度、松戸市の自宅に戻る生活が続ける。

私も妻も浪江町の出身ではないのですが、学校や地域のつながりなど、浪江町の人たちの助け合う密な人間関係が好きで、縁もあり海に見える請戸に居を構え生活を送っていました。

原発関連での今の仕事は、震災前よりも関係作業員が随分と減りました。一方で私のような地元の被災者の方々もたくさん作業に従事しています。少しでも復旧を進めるため不休で大変ではありますが、できる限り役割を果たさなければならないと思っています。

いまは子どもたちの学校のことが一番気がかりです。こちらの学校に子どもたちも慣れてきていますし、他方で受験を控えた息子を見てると元

の高校での友人のつながりを大切にして、福島県に戻るべきなのかと考えてしまいます。

震災前はなるべく子どもたちとの時間を作るようにと思い、浪江町柔道スポーツ少年団と一緒に汗を流していましたが、いまはそれも難しいです。

震災後も、変わらず同じ職場で働き、千葉県に移転はしても落ち着かない状況では、まだまだこれからの生活のことを描くことができません。ただ、浪江町から避難しているこの時間を無駄にはしたくない。このような環境にあっても積極的に生きていきたい。いつか地域の集まりや交流が取り戻せる日が来ることを願うばかりです。



## 佐々木保彦さん(昼曾根)

取材者：特定非営利活動法人

ピンズふくしま 豊田

取材日：7月13日 「平成23年8月 広報なみえ掲載」

### いまも震災は続いています



子どもも、年寄りも体の不自由な人も、ひと声かけてもらえるだけで気持ちが安らぎます。

私は浪江町の消防団に所属していましたが、地震がおきた当時、出動に向けて準備をしていましたが、12日の避難勧告により多くの町民が役場とともに津島へ行きまし。あまりにも避難者が多く、避難所では食料・毛布が十分になく、まだ雪がふっている季節で寒さをがまんす



## 五十嵐英明さん(請戸)

取材者：高崎経済大学 櫻井研究室  
櫻井・山本・亀井

取材日：7月9日  
〔平成23年8月 広報なみえ掲載〕



### 請戸の海の朝日が見たい

震災後、請戸の自宅で津波に流された五十嵐さんは、レスキュー隊に助けられた。避難先を転々としながら家族と合流し、茨城県古河市の病院に勤める娘さんを頼って現在のアパートで二人のお孫さんと家族6人で生活している。

地震のあと津波に流されたが、レスキュー隊に助けられ難を逃れた。寒い暗闇の中で助けを求めている人が大勢いたはずだ。仲間やその家族には亡くなった方が多く、思い出すたびに心が痛む。

私は15歳のときから漁業一筋だったので、やっ

ぱり船で漁に出るの仕事がしたい。運転手の仕事や農業などの誘いもあるが戸惑っている。でも、家の中にじっとしているだけでは自分もつらいし、家族にも心配をかけてしまう。これから先どうしたらいいのか。何か海の仕事を見つけたいと思い、新潟にでも行ってみるかと妻と話だけはしている。ただ、日本海の夕日もきれいだろうけど、やっぱり請戸の海の朝日が見てみたい。内陸で生活していると新鮮な魚料理が食べたくなるね。浪江ではあたり前の暮らしが、どんなに贅沢なものであったのかと思う。漁師仲間の家族と年に一度の旅行に行っていたことがなつかしい。またそんな普通の暮らしに戻りたい。

浪江町の多くの住民を集めて、今後についての話し合いの場をもつべきと思う。特に漁師は組合などが町単位ではないため、役場の役割が大きいと思っている。



▲取材の様子

ることがつらかったです。一番困ったことがトイレです。人数が多く、水洗トイレがつまり、仮設トイレをつくることで忙しく大変でした。食料は固くなったおにぎりでさえも不足していました。賞味期限が当日のパン、カップラーメンなどで水は届かない日もありました。15日に二本松の東和へ移動してからは、たくさん支援物資が運ばれるようになり物資配分の仕事で体を休める暇がなくなりました。いま思えば、体を動かしていたことで考え事をせずにいたことがよかったです。

いまは郡山市の一軒家を借上げ住宅してもらい、夫婦と4人で暮らしています。震災以降、家族がばらばらになり、それぞれ今まで住んだことのない集合住宅に転居しました。今まで開放的なところで育ってきて、急に周りに気を使うところに移ったためにストレスがたまっているように感じられます。この家に移ってからも浪江町の人や避難所で一緒だった人に会いにいらしています。顔を見て「どうですか？」と声をかけ、話し相手をすることでお互いに安心できます。家でゆっくりすることよりも、外出したり体を動かすことで気が紛れます。

やりたいことの一番は、みんなで一緒に帰りたいです。もし帰る日が来るとしたら「どこまで対応してくれるのか」、「生活の不安はどういうふうにかえてくれるか」というところが知りたいです。

今、ボランティアをしている方に避難しているお年寄りや、体が不自由な方に2日に1回でいいから顔を見て「どうですか？」と様子を見てほしいです。避難所で看護師さんに体調を聞いてもらったり、血圧を測定していただいたりするだけで気持ちが安らぎました。妻も同じことを思っています。

これから暑さで体調を崩す人がいると思いますので、声かけをしていただけたらと思います。子どもたちは、今でも少しの余震で怖がりです。大人が考えているより心の中はまだ癒されていません。早く自由に遊ぶことができるような日が来ることを願っています。



## 板倉 功さん(立野)

取材者：特定非営利活動法人  
ビーンズふくしま 豊田

取材日：7月13日  
「平成23年8月 広報なみえ掲載」



### 生まれ育った「ふるさと」へ

なれない土地で暮らしながら、なじみの深い「ふるさと」浪江を思う

いま、私の家族は郡山市の兄夫婦の家で暮らしています。震災当時、津島に避難しました。ここは、街中から外れたところにあり、静かなところ。孫たちは学校にも慣れはじめ、安心して居ます。しかし、この家は道路拡張のために、また転居します。

犬を飼っているの、新しい転居先を探すのに苦労しました。慣れない土地での生活は落ち着かないものがあります。震災から4ヶ月たち、落ち着いてきたところがあります。まだ腰を据えて生活できなく、精神的につらい部分もあります。浪江町にいたころは趣味で鮎釣りをしていました。いまは、釣りをしても楽しむことができない状況です。これから夏が過ぎて、冬がきたときに、経験したことのない土地での過ごし方に不安があります。ふるさと浪江に帰れる日を待ちながら、頑張りたいと思います。

一時帰宅では、帰らない方がよかったですと思いました。見たくない風景ばかりで…。草は伸び放題で、今まで見たことのない光景でした。野放しにされた家畜の今後が不安です。町の人とは電話で連絡をとっています。はじめて携帯電話をもってとまどった部分はありましたが、連絡が取れることで安心感があります。

浪江は、なにもない町です。あるのは自然と何代も続いてきた家業や歴史です。なにもなくても生まれてからずっと育ってきて、体も心もなじんでいる故郷で生活したいです。

いまは、明るいニュースを1つでも流してもらえると嬉しいです。震災以来、暗いことばかりです。原発事故の一日も早い収束で、震災からの復興と復旧が進むことを待っています。

一時帰宅のときに、少しですがやっと寺のものを持っていくことができました。浪江の方のことが気になっていて、警察発表などはいつも気にしています。最近、檀家さんの情報もずいぶん入ってくるようになって、浪江町の役場にも大聖寺の行き先について問合せがあった



▲浪江の方に向かって毎日のお務めをされています。

大聖寺ご住職の青田敦朗さんは、寺のこと、檀家さんのこと、そして津波で亡くなった方の供養のことが気になり、なるべく近くにいたいと思ったそうです。現在は奥さまと子ども2人の4人家族で生活しています。

また浪江で皆さんとお会いしたい

取材者：特定非営利活動法人 ビーンズふくしま 中鉢  
取材日：7月16日 「平成23年8月 広報なみえ掲載」

## 青田 敦郎さん(北幾世橋)





福島県

## 遠藤 健さん(両竹)

取材者：特定非営利活動法人  
市民公益活動パートナーズ 佐藤  
〔平成23年8月 広報なみえ掲載〕



▲まだ、カメラを向けられるのはちょっと…

### 今は何も考えられません

6月26日に、福島市飯坂町平野の北幹線第一仮設住宅に、夫婦で入居しました。震災前は、妻と息子夫婦・孫2人の6人家族で、両竹に住んでいました。

津波で、7代続いた思い出の写真や住所録など、とにかく何もかもなくなりました。家族6人は無事でした。息子はいわき、嫁と孫たちは福島市下鳥渡と家族がばらばらになってしまいました。つらい選択でした。震災前は北双方部のシルバー人材センターで、町のバスの運転手として、高齢者や子どもたちの送迎をしていました。

両竹地区は山有り、鮭がのぼる川有り、海有りの自然豊かな集落でしたが、一瞬にして津波で全戸が流され、10人の方が犠牲になりました。今も2人が不明になっており心が痛みます。

いつも散歩をしていた海岸に、こんな大きな津波が来るとは、思ってもみませんでした。がれきで動けなくなった方々数人を救出。厳しい状況だった女性を、救助に来てくれた自衛隊の方に託し、その後無事だったことを聞いたときは、本当に安堵しました。一時帰宅して見た集落は、何もかも

なくなっていました。命が助かったことに感謝しつつ、心は重く沈みました。

仮設住宅で、福島の暑さは身に堪えます。夏になり思うのは、毎年8月27日に開催されていた、両竹の諏訪神社のお祭りです。両竹集会所が津波で流され、そこに収納していた太鼓や笛も、代々受け継がれてきた神事の際の区長の大事な箱も、すべて流されてしまいました。

両竹地区の人々も全国に散らばってしまいましたが、6月に東京で9人が集まり、しばし心安らぐ時間を持つことができました。今は正直何も考えられませんが、両竹地区全民がまた顔を揃えられるのは難しいと思いつつも、会える機会ができたなら願っています。

原発が収束したなら「浪江町は今後どんな町にしていくのか。」気になるところです。

ら教えてくださいます。残念に思っているのが、本堂でのお務めや供養ができないことです。やはり、普段やっていたことができない。これはつらい。また、お骨になった方をいつまでもお墓に入れてあげることができない。ご家族が避難先ですと預かっている状態です。

まだ、いつになるかわかりませんが、浪江に戻ることができたら、まわりの人たちと一緒に普通の生活ができたらというのが願いです。死んでしまっただけから、生きて浪江でお会いしたい。

ご先祖が切り開いてきた地なのだから、そう簡単に浪江は捨てられないです。

浪江にいたとしたら、今の時期はお盆の準備をしているところです。塔婆を書いたり、新盆の檀家さんをまわる準備ですね。でも、6月・7月と、DNA判定で津波で亡くなった方の身元が判明して、お葬式はずっと続いています。二本松だったり、福島だったり、原町だったり、ご家族が避難されている先に出向いてご供養をさせていただきます。

地震によって、これまであたりまえにできた普段の生活のありがたを見直すきっかけにもなったのではないのでしょうか。価値観の変化というか、地域の共同体、きずなの大事さに改めて気付いた方が多いと思います。

今後、要望できるとすれば、お盆やお彼岸にご先祖さまに手を合わせられる状況を整えてほしいと思っています。例えば、お盆にお墓参りにいけるようなバスなどがあると、新盆にもちゃんとお墓参りできる。そうすることで安心される方も多いと思います。



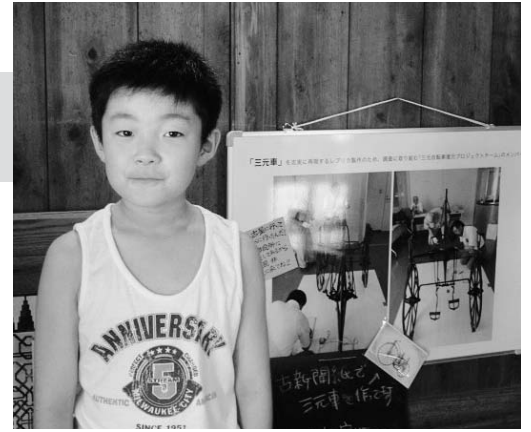
## 原田 勇真くん(小4)(幾世橋)

取材者：NPO法人  
市民公益活動パートナーズ 松田  
〔平成23年8月 広報なみえ掲載〕

### おもいきりサッカーが したい

浪江町幾世橋に住んでいて、震災当日は幾世橋小学校で下校の準備をしていた。

現在は、新潟県に単身赴任している父親と離れて、伊達郡桑折町の仮設住宅で母親と2人の妹と4人暮らし。同じ桑折町の仮設住宅の別棟に祖父と祖母も避難している。



▲日本で初めて誕生した自転車「三元車」を新聞紙で再現した模型の隣で。

福島や東京など6カ所の避難所を移って、5月23日に桑折町の仮設住宅に引っ越してきました。幾世橋小学校は1クラスだったけど、醸芳小学校の4年生は2クラスあって、1クラス29人です。桑折町の学校でも友達ができて、毎日学校に通うのが楽しい。好きな勉強は「体育」!

みなさん元気ですか?ぼくは、元気です。

幾世橋小学校で仲の良かった友だちとは、手紙のやりとりをしているし、3年生のときの担任だった先生からは「学級だより」も送ってきてもらっているから、さびしくないよ。

地震の時に、こわくて泣いていた女の子たちもいたけど、もう元気になったかな?

早く、みんなに会いたいな。

いまは、お母さんと妹2人の4人暮らし。お父さんは、一人で新潟県へ仕事に行っていてあまり帰ってこないで、ちょっとさびしい。でも、おじいちゃんとおばあちゃんは、別な建物だけど同じ桑折町の仮設住宅にいるから。

誕生日にはPSPのゲームがほしい。新しい自転車もほしいけど、外で遊べないから。

もし、外で遊べるなら、一番はサッカーボールがほしい。

浪江に帰ったら、ワンピースの全巻と集めていたフィギュアを持ってくること。置いてきちゃった自転車も取ってきたい。

それから、みんなとたくさんサッカーがしたい。

大熊町の大野病院に入院中の家内の看病を次男と長女に任せて、津島の自宅に戻った日、3月11日に地震はおきました。電話連絡も取れず、家族が再会できたのは、2つ目に転院した二本松市内の病院でした。震災が起きてから4日後のことでした。自衛官の長男が、5月に予定していた挙式も延期し、3月末、妻は他界しました。きちんと葬儀ができたことだけでも、ほっとしています。

のかたわら、県内外へ避難した役員をしている商工会の会員向けの情報提供なども行ってきました。土湯温泉の旅館に避難したのは、5月の声が聞こえる頃。この先どうしていくのか、計画の立てようがないのが現状です。約3カ月過ぎた避難先の土湯温泉ホテルに対して、本当によくしてもらって感謝しています。いつまでも過去を考えるとではなく、非常時のときこそ冷静にと心がけています。



▲まもなく二本松市内の仮設住宅へ入居する瀬賀さん

闘病中の妻、結婚式を控えた息子。ただでさえ心労が重なる中で震災が起きた。最愛の家族と連絡も取れない中での避難指示。津島で会社や商店を営む瀬賀範真さんは、現実にじっと向き合っている。



## 瀬賀 範真さん(津島)

取材者：特定非営利活動法人  
市民公益活動パートナーズ 古山  
〔平成23年8月 広報なみえ掲載〕

先の見通しが立たない現実にも、  
慌てないでと心がける



## 八幡喜美男さん・万里子さん(室原)

取材者：NPO法人まちなか研究所わくわく 宮道・下地  
取材日：8月9日 「平成23年9月 広報なみえ掲載」

### 地に足つけて、心をひとつに前へ進みましょう

権現堂字蛭子町では、地元で取れる魚をメイン料理とした居酒屋「北のだいどころ」を経営。お店の仕込み中に震災にあった。3月12日には、親戚を頼り埼玉県へ避難。その後、娘夫婦とともに沖縄へ渡り、現在は沖縄県糸満市で夫婦二人で生活をしている。



▲喜美男さんと琉球かすり織りに励む万里子さん

#### ■避難先沖縄での忘れられない朝ごはん

3月末に、娘夫婦と沖縄に避難した。だけど、沖縄に親戚や友人がいるわけでもなく、どこに行ったらいいのかわからなかった。情報を求めて県庁に行ったらとき、那覇市の赤嶺団地自治会長さんと出会い、すぐく親切にしてもらった。次の日から団地に入ることができ、孫の小学校の手続きから掃除や畳、布団、食べ物の準備まで、PTAや婦人会、同じ団地の方々によっていただき本当によくしてもらった。

た。お隣の方が「これ作ったから食べて」と、朝ごはんはたたくさんのおにぎりとおパムとお卵焼きを持ってきてくれたときは、本当にうれしくて涙が出たよ。一生忘れられない。

#### ■琉球かすりとのお会い

知らない土地で何もしなかったら気持ちも暗くなるけど、私(万里子さん)は「琉球かすり」という織り物と素晴らしい出会いをした。初めてかすりに触れたとき「すごいなー、いいなー。織ってみたい！」と思っていたら、縁あって織りをさせてもらえることになった。おもいつきり糸に触らせてもらって、教えてもらって、毎日がわくわくドキドキ。これから反物も織らせていただけるので、今は、織りをまっとうしたいという目標がある。

#### ■育ててもらった浪江町

浪江町は、山の物も海の物もおいしい食卓のまじり。魚は、ヒラメ、オコゼ、カワハギ、フグ、タイ、カレイなどが豊富にとれる。浪江町で居酒屋をやっていたときは、魚の料理がメインだった。オコゼやカワハギ、

生ダコの薄造りとかね。ビールと一緒に飲んでいたんだよ。うちのビールはおいしいってお客様にも言ってもらって、懐かしくて涙が出そう。浪江町は、一生懸命やる人をすごく応援してくれる情の厚いまちで、30年住んでいた私たちは本当に浪江町に育ててもらった。何度、浪江のみなさんに助けってもらったかわからない。浪江町に骨をうずめるつもりでいたのに、まさか沖縄に避難する日がくるなんて思いもしなかった。これから先、どうなるかわからないけど、地に足をつけないと何もできない。沖縄に渡った今は、沖縄の地に足つけて生きてくしかないよ。

#### ■心を強く、前へ

全国に避難している人みんな、さみしい気持ちでいると思う。自分が悪いわけでもない、目に見えない相手と自然災害にやられてる。心を折られないように、心を強くひとつにして前に進んでいきましょう。





## 渡辺 智子さん(田尻)

取材者：茨城NPOセンター・コモンズ 石川  
取材日：8月13日 「平成23年9月 広報なみえ掲載」

### 戻る日まで前を向いて

田尻の新築したばかりの自宅で地震にあった渡辺さんは、お子さん4人と会社員の旦那さまとの6人家族。8月に入ってから茨城県の日立市にある民間住宅に移って生活している。



▲渡辺智子さんとお子さんたち

自宅は新築したばかりで海沿いではなかったので損壊は免れましたが、地震の翌朝、町の防災無線で避難指示があり慌てて避難をしました。そこから福島市の体育館、ホテルなどを経て現在、3カ所目である日立市内の民間住宅に引っ越してきました。

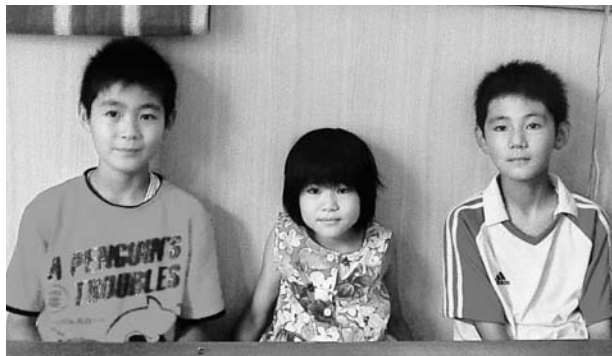
住宅はもちろん、次女の新しい中学の制服や自転車、学校に置きっぱなしのお気に入りの洋服、近所の方々との交流などすべて置き去りにしなければならなかったのは残念です。

しかし、無邪気で明るい4歳の末っ子がいることで、避難所でも家族内でも暗くならずにいられました。でも、そんな彼女も緊急地震速報のアラームが鳴るとかなり不安がるので、あまり表には出さないけれどダメージが大きいのかな、とも思います。

浪江に帰れるならずと暮らしていくつもりで建てた家なので片付けもしたい、近所の方々や友だちにも会いたいなあ。早く元の生活にも戻りたいし、大変なことも多いけれど、自分たちはまだ恵まれているほうだと思います。

戻って落ち着いたなら家を流されたりして困っている方を助けたいです。

今の学校は、前の学校と同じひとクラスだけど倍以上の人数がいます。友だちもたくさんできました。朝は7人の班で20分くらいかけて登校します。前の家のように広い庭で友だちと遊んだりすることはありません。夏休みは外で遊んだり、友だちの家にいったり、隣の部屋に



▲左から竜巳くん、妹・日向子ちゃん、兄・隼太郎くん

横山竜巳、小学4年生です。浪江町請戸に住んでいました。津波で家は流されてしまい、浪江町は避難区域なので、新潟県へ避難した後にゴールデンウィークごろから茨城県北茨城市のアパートに家族5人で住んでいます。

いるおばあちゃんやと遊びました。カードゲームやDSで遊んでいます。お兄ちゃんや妹と僕でお風呂掃除のお手伝いもしています。今、お父さんは広野に、お母さんはいわき市に勤めに行っています。遠いのでちょっと大変そうです。浪江の友だちの連絡先をお母さんが知っているので、連絡をとって行き来もしました。また、みんなで遊びたいです。



## 横山 竜巳くん(請戸)

取材者：茨城NPOセンター・コモンズ  
天井  
取材日：8月12日 「平成23年9月 広報なみえ掲載」

また、みんなで遊びたい



福島県

## 伊丹 希偉さん(赤宇木)

取材者：特定非営利活動法人 市民公益活動パートナーズ 古山  
取材日：8月6日 「平成23年9月 広報なみえ掲載」

### 一番遠くの避難先から今、福島市に。 ようやくふるさとへ“半分の距離”

津島の自宅で震災に遭い、入院中の母親の搬送とともに、ご夫妻と息子さん夫婦の家族4人で原発事故直前に福島市へ避難。福島市から二本松市の避難所、親戚を頼って新潟県新潟市西区へ。さらに、4月半ばから耶麻郡磐梯町での二次避難を経て、7月末に福島市に転居した。



▲転居間もない福島市の自宅で、奥さまとご一緒に。

浪江町でも川俣町に近い津島で酒屋を営み、我が家で食べるお米や野菜を作りながら、空気も水も本当にきれいなこのふるさとで、心豊かに老後を送るつもりでした。

20年間、村おこしにも関わってきました。春から夏にかけては植樹やスポーツ大会、ビアガーデンなどを催し、11月には今年で21回を迎えるはずだった「いきいき夢まつり」を開いていました。予算は少なかったけれども、婦人会や交通安全協会、地元の会社、青年団など地域のさまざまな団体がそれぞれの得意なことを生かし、毎年、自慢のキノコの季節に手作りの祭りを行ってきました。この間、中ノ沢温泉（猪苗代町）にこの祭りのメンバーが集まることができ、1～2年くらいで戻れるならば再び祭りを興したいなどとふるさとの話をしてきました。

この福島市では、埼玉の私の妹のところに避難している母親もまもなく一緒に住むことになります。祖母、私たちと息子夫婦の5人が再び一緒になり、浪江に帰れる日を待ち望んでいます。

浪江での生活を思い出してみると、本当に温かい人、思いやりのあるやさしき人が多かったなと思います。結婚を機に住み始めましたが、地域のさまざまな役、婦人消防隊長、保護司、結婚相談所所長なども担当させていただき、私の楽しみになりました。特に「十日市」は印象的。3日間のイベントの司会を担当させていただきました。震災が無ければ、今も浪江でいろんな役を楽しく担当させていただいていたはず…と思うと残念でなりません。帰ったらま

たボランティアや行政のサポート、地域の方のお世話をしたりと相談のりたいたいですね。国や行政機関にお願いしたいのは、方針を明示してほしいという情報を出して欲しいということ。これらが分からないから自分がどうすべきか決められません。ぜひお願いします。現在はこのような状況ですが、空白の期間にしてはだめだと思えます。自分なりの仕事や楽しみを持ち、自分の人生の今を大切に生きていきたいと思います。



宮城県

## 木幡 豊子さん(立野)

取材者：地域社会デザイン・ラボ 遠藤  
取材日：8月11日 「平成23年9月 広報なみえ掲載」

### 一番の財産はボランティア活動で築いた絆。だから今の私がある。



▲仕事帰りに仙台駅前で撮影

震災後、相馬の避難所、川俣町の親戚宅を経て、現在は以前に住んだことがある仙台市で夫、長男夫婦とともに4人で暮らす。今は市内でフルタイムの仕事を始め忙しい日々。休日は、浪江町在住時の知人や友人と会ったり、担当する役職の会合で出かけていることが多い。



## 叶谷 勇郎さん・タケ子さん(北幾世橋)

取材者：特定非営利活動法人山形の公益活動を応援する会・アミル  
齋藤・柴田

取材日：8月13日 「平成23年9月 広報なみえ掲載」

### お互いに苦しい不安な状況を乗り越えましょう また浪江町で会いたいです

3月17日にご家族10人で親戚を頼り山形県最上町へ避難。叶谷さん親子は請戸漁港の漁師。父勇郎さんの船「万寿丸」が津波に流されまだ見つからない。船の写真を大切にし、見つかることを願っている。息子の貴徳さんは浪江町野球チームの監督を務め、9月に行われる「福島県市町村対抗野球大会」に出場する予定。「こんなときだからこそ自分たちが野球を頑張る町の人みんなに元気になってもらいたい。」と話す。



▲5月の一時帰宅の際に持ち帰った『漁船「万寿丸」』の船出写真と、夫婦一緒に。

3月11日の地震の後、息子の貴徳は請戸港にある船を係留するためにすぐに請戸港に向かったが、道で偶然会った漁師仲間「津波だからだめだ。」と言われすぐに引き返し難を逃れることができた。12日の朝に防災無線で避難指示があり、川俣小学校まで家族10人で避難し、親戚を頼って山形県最上町に来た。2、3日経って落ち着いたら自宅へ帰れると思っていたので、こんなことになるとは思ってもしみなかった。今不安なのは、先が見えないということ。故郷へ帰れるのか、それがいつごろなのか。震災から1カ月は精神的につらく、上を見ることができなかつたが、ここ数カ月は息子が重機の勉強をし大型特殊免許を取得したり、地元の漁協の会議に出たり、上を向き町の復興のためにできることを探していた。現在、息子は東京での仕事が決まり、9月から家族と離れて暮らすことになった。一度はあきらめかけた県の野球大会へ、皆さんの協力と熱い思いで参加することになり、楽しみにしている。

自分はやはり、また船長として海に戻り、浪江で暮らしたい。海から昇る朝日が懐かしい。これまで浪江で漁師として生活を築いてきて、息子に船を任せて頑張るべというときの震災だった。放射能さえおさまればまた漁に出られるとも思うが、漁業を再開して安心安全な魚を捕ることができると不安でいる。4歳と8歳の孫は、ときどき「おうちにかえりたい」「もうおわりにしよう」と言うが、2人とも避難先で小学校に通い友だちもできた。子どもながらたくさん我慢していると思う。最上町の皆さんはいい人ばかりで、散歩に行けばお茶飲んでいけと声をかけてくれたり、多く取れた野菜を持ってきてくださったたり、町役場の人もよくしてくれ、とても感謝している。いつまでもお世話になるわけにはいかないという気持ちがあるが、どこに帰るといいのかと戸惑う。自分や息子たちにとっては人生設計ができないことが一番つらいので、放射能に関する信頼できる情報が今は一番ほしい。浪江町の皆さん、ばらばらになつてしまったがお互いに苦しい不安な状況を乗り越えて、またきつと浪江町で会いましょう。



福島県

## 鈴木 大介さん(請戸)

取材者：元気玉プロジェクト実行委員会 江川

取材日：8月15日 「平成23年9月 広報なみえ掲載」

### 自分たちの酒づくりを存分にやっていきたい

家族とともに山形県米沢市に住み、南会津の蔵元で、残された酵母から「<sup>ことぶき</sup>壽」をつくった

震災後の津波で、自宅、蔵、仕込んだ酒、記録資料すべてを失いました。あのときの光景は、自分でも忘れることのできない光景です。

地震直後、消防車で避難誘導をしていました。大津波が迫り、いよいよ危ないというときに、消防車を取り捨てて高台へ避難しました。逃げ切れなかった人たちを避難指示によって捜索できなかったことが悔いに残ります。

現在、手元にある酒蔵の写真はすべて、取引先が蔵見学時撮影したものが残っているだけです。取引先には、できるだけ蔵に足を運んで酒と風土を理解してもらっていたことが、残された写真となりました。ありがたいことに自分たちの思い出が、人さまから伝わってくるのです。

家族親戚で米沢に避難しました。すべてが流されて酒なんてつくれると思っていまいませんでした。でも、あのころ（3月）雪がふって寒かったので、「まだ酒が造れるな。」という話しはしていません。そのとき、前からおつきあいのあった南会津町の蔵元で酒を1本仕込めるこ

とになりました。米は地元請戸で契約栽培をしていた同じ品種を用い、県の試験場に残っていた蔵独自の酵母で仕込みました。水が違うので全く同じ酒というわけにはいきませんでした。が、「壽」の味は出せました。

7月上旬にできた酒は約2、000本余り。地元の方々に気持ちいいいただき、つなぐのに一杯だっただけに、「壽が飲みたかった。」といわれたときには涙が流れました。

わが家は、1830年ごろから続く造り酒屋です。ずっと地元の暮らしに寄り添ってきた自負があります。自分自身も前勤務先のある奈良県から戻ったとき、浪江の良さをすぐ実感し、酒造りを通して他の文化圏に情報を発信できる立場によるこびを感じていました。暑すぎず、寒すぎず、季節ごとに豊かな恵みあふれる風土、人々の営みが懐かしくて仕方がありません。

これから「酒づくり」を行なうてゆく上で場所の問題は欠かせません。まだ拠点探しの最中で、自分が思うような良い環境はなかなかありません。

今回の震災後、たくさんの方の支援と応援を受けたことが、私の強いよりどころになり財産となっています。私たちの新しい酒造りは存分にこの思いを發揮した酒であること、浪江の復興そして文化継続に向けた場づくり、きつかけづくりに少しでも貢献できればと願っています。



▲南会津で仕込んだ「壽」は発売後すぐに完売



# 柴 孝一さん・タケ子さん・強さん・かおるさん(請戸)

取材者：ちば市民活動・市民事業サポートクラブ 風間・鍋嶋  
取材日：8月7日 「平成23年9月 広報なみえ掲載」

## 生きていたら、きっといいことある！

震災後福島県内を転々とした後、東京の親戚に身を寄せ、6回目にしようやく現在住んでいる千葉県稲毛区のマンション5階に移って来た柴さん一家。今は息子夫婦、3人の孫とおばの8人で暮らしている。



▲左から 孝一さん、孫の孝成くん、タケ子さん、かおるさん

「震災でなにもかもが慣れない狭いマンション暮らし、周りの玄関は皆閉まっている中で、うちは浪江にいたときのように今も玄関は開け放っています。窓から玄関に抜ける風に、ふるさとの浜風の涼しさと気さくな近所の人たちとのやり取りを思い出します。これまでずっと働き詰めで、やっとなんかできると思った矢先、震災で被災しました。老後の暮らしと孫の将来を考えて建てたばかりの家も、お墓も、そして天葬を担いで行商していたころから代々受け継がれてきた水産会社の工場や大量の在庫が入った冷凍庫、会社の車、長年注文をくれていたお客さんのデータも何もかもすべてを無くしました。会社は、息子が4代目として小学5年の孫が5代目として続いていくはずでした。その孫が震災前のある日、「自分も名刺がほしい」と言うのでパソコンで作ってやりました。喜んでいて姿が思い浮かびます。今、手元にあるのは震災後、無垢の床板だけが残っている我が家の様子を映し

た何枚かの写真だけです。■久しぶりの再会 先日、子どもの小学校の卒業式があり久しぶりに福島のみんなど再会しました。みんなばらばらになったけど、子どもたちの気持ちはつながっていると感じました。会っている時間はとても短く感じ、改めて「請戸」を実感しました。そして、今は千葉で働きながら「浪江では、今頃はこんなことをしていたな。」って思います。それはふるさとでのちりめんじやこや小女子の作業やお中元やお盆の忙しさに追われながらも穏やかな日々。これから子どもたちのためにも頑張らなければと思います。■ありがたいと思う日々 震災当時は多くのお客さんや取引会社の方々が心配して電話をくださったようですが、無事でいることを伝える手だてさえありませんでした。こちらから連絡することはできませんでしたが、今は、千葉や埼玉のお客さんが心配してお米や野菜を持って来てくれたり、同業者や築地の方々がお見舞いに来てくれたり、本当にありがたいと思います。 家族が無事でいられたこと、親戚の助けがありがたく、これから先はどうなるか解らないが、「生きていたら、きっといいことがある。」と信じています。 最後に、「浪江町役場および自治体の方々も一生懸命にお仕事をされておりますが、お体を大切にして頑張ってください。」と伝えたいです。



# 半谷 秀辰さん(大堀)

取材者：NPO法人市民公益活動 パートナーズ 松田  
取材日：8月6日 「平成23年9月 広報なみえ掲載」

## 復興したら 笑って酒が飲みたい



▲避難している北塩原村のコテージ前にて

大堀地区に暮らして25代目、祖先が焼き物をはじめ15代目を数える、大堀相馬焼協同組合の組合長さん。 福島市や茨城県の親戚宅を経て、日ごろから信頼し、相談相手でもある窯元さんが避難していた北塩原村へ移りました。娘さんとこの春に大学へ進学した息子さんは東京に住み、奥さんとご両親の4人暮らしです。



# 志賀 雄一さん(樋渡)

取材者：特定非営利活動法人ピースふくしま 豊田  
取材日：8月10日 「平成23年9月 広報なみえ掲載」

## 浪江の文化活動の再開を祈って

みなさんのご支援を胸に、早く浪江に帰ってすきな歌を思いきり唄いたい

私は今、妻と92歳の母の3人で二本松の促進住宅で過ごしています。

大地震発生のおき、私たち家族は浪江町樋渡の自宅にいました。パソコンで作業をしていたところ、気がつくと落ちてきた柱時計を抱いて横になっていました。まもなく防災無線で津波の知らせを受け、かけつけた妹と4人で山の中にある野菜直売所に避難しました。その日は妹の家に泊まり、次の日は原発事故の知らせで、そのまま4人で津島に避難しました。翌日の朝早く、川俣高校体育館に避難、妹は東京へ移動。私たち3人はここで2泊、翌日甥が迎えに来て仙台に移動。物資がほとんど無い中、アパートに半月ほど生活した後、4月から二本松市にきました。財布も免許証も持たず逃げて来たのに、今は沢山の支援物資をいただきながら生活



できることに大変感謝をしています。

今、望むことは、なんと言っても早く原発事故が収束して、愛する故郷へ帰ることです。これは浪江の町民のみならず、近隣の町民のみなさんが、胸が熱くなるほど望んでいることです。そして、一刻も早く町の復興の出発点に立たねばなりません。

私にとって残念なことが一つあります。私は浪江町芸術文化団体連絡協議会の代表を務めさせていただきながら、今は何もできないことです。そんな中、私の所属している合唱団員と一人一人連絡をなんとか取り合って、「合唱団だより」を発行することができました。さらに先日、福島市で交流会を開き、団員のみなさんと再会の喜びを分かち合うことができました。

浪江町には50団体を超える芸術文化団体があります。その団体の方々もあきらめずに、浪江に帰ることを祈念して過ごして欲しいと願っています。8月に浪江町の盆踊り大会が開かれたことは、大きな励みになったことと思います。町長をはじめとして職員のみなさん、商工会のみなさんお世話さまでした。

被災され、あるいは絶望の中にいる方もおられるかも知れませんが、近い将来必ず浪江町に帰る日が来ることを信じがんばりましょう。今はそんなところではないと言われる方も多いと思いますが、私は浪江町の芸術文化活動の再開を信じ、生活に励んでいきたいと思っています。

342年もの伝統を持つ大堀相馬焼きの里には、昔からのコミュニケーションが脈々と受け継がれていた。

伝統とは、地域の文化であり、地域のつながりだと考えている。だから、震災と避難のために、その絆が壊れてしまったことは、とても残念でならない。

大堀地区は、米がおいしく、高瀬川溪谷の眺めときれいな水があり、空気は澄んで、蛍が乱舞するとても素晴らしいところで、ひとことでは言い表せない愛着がある。

平成14年に開館した「陶芸の杜おぼり」の周辺には、桜や紫陽花、さるすべりなどの木を植えて、手入れをしてきたところだっただけに、悔しい思いで仕方がない。

また、昔から船乗りの守り神とされ、請戸の港に戻る際の目印とされた「戸神山」には十二支（干支）の石像が祀られていたが、損傷が激しくなっていたので、仲間たちと干支を描いた陶板を焼いて100kgを超える自然石にはめ込んだ新たな十二支像を作成した。急な登山道沿いに力を合わせて設置したことも懐かしい思い出だ。

こうして、地元の話をしていると地域みんなの顔が浮かぶ。実際に仲間の顔を見て話しができたら、きっと元気でやり直せると信じている。

千年に一度の大災害というが、以前の大堀地区を取り戻し、いつか復興したならば、つらいことも思い出話にして、みんなであまい酒を酌み交わしたい。



## 石井 悠子さん(北幾世橋)

取材者：ちば市民活動・市民事業サポート  
クラブ 風間・鍋嶋

取材日：8月5日 「平成23年9月 広報なみえ掲載」



千葉県

### いつかまた、家族みんなと一緒に暮らしたい

震災前、4世代同居の家族10人で生活していた石井さん一家。現在は、相馬市、二本松市、ひたちなか市（茨城県）、市原市（千葉県）の4カ所に分かれて避難生活を送っている。

4月2日から夫の博和さん、7歳、4歳、3歳の子どもたちと市原市の団地で生活中。

私は、職場で震災にあい、一度も家に戻らず福島県外に避難しました。同じ浪江町に嫁いでいた妹が臨月のお腹でしたので、とにかく早く遠くへ避難したかったのです。はじめの3週間は、叔母の暮らす埼玉に全員で避難しました。妹は、3月24日草加市立病院で男の子を無事出産、これからの日本に思いを込めて大和と命名しました。

小学校2年生の長男、秀人は、1年間通った幾世橋小学校への思いからか「新しいランドセルはいや。」と言うので、浪江町の自宅に夫が一時帰宅した際にランドセルを持ち帰りました。今では友だちもでき、

サッカークラブにも入部、少しずつ千葉での生活に慣れつつあります。

蛍が飛びかい、子どもの好きなカブトムシがいっぱい採れた自然豊かな浪江町。祖母お手製のもちろみに鮭やきゅうりを漬けて、祖父が作ったお米のご飯とともに、おいしく食べたことなど思い出します。浪江町には思い出がたくさんあります。小学校、中学校、高校といっしょにソフトボールをやった仲間や近所の人たち、親戚・会いたい人は、たくさんいます。

慣れない団地住まいで、子どもたちが部屋で走り回るたびに、上下の部屋に住む方々に迷惑にならないようにと、気遣いをしています。でも、大人のふんばる姿を子どもたちに見せることが、いつか子どものためになると信じています。今回の震災での困難は、乗り越えられる試練と思っています。

いつかまた、家族みんなと一緒に暮らすことができたらと願っています。

大きな揺れに襲われたのは長女の蓮果を迎えに行く車中、ちょうど信号待ちをしているときでした。「早く迎えに行かないと…」揺れがおさまってすぐに幼稚園に向かいましたが、蓮果はいまいませんでした。車で周りを探していると、ちょうど幼稚園の先生に会って、娘が高台に避難していることがわかりました。無事だった子どもたちとともに、その日は家で寝ることにしました。翌日朝から家の片付けをしていると避難指示が出て、そのときはちょっと出かけるくらい気持ちで服などを持って逃げました。その後



▲村岡さんと長女 蓮果ちゃん(左)、次女 果音ちゃん(右)

地震発生時、幼稚園に子どもを迎えに行っていた村岡さんは、子どもの安否が第一に頭に浮かんだ。幼稚園の誘導で無事に避難していた子どもたちと夫、親族とともに避難所を転々としながら、現在は新潟県柏崎市で生活している。

津島、本宮を経て新潟県柏崎市西山に避難しました。夫とともに一時帰宅をしたとき、草木が無造作に伸びぎっている町を見て「たつた5カ月でこんなことに：何年も経ったらどうなるんだろう。」という不安を感じました。いつ戻れるかわからないし、先のこととは何もわからない。でも、今いる場所は違っても浪江のことを忘れずに生きていきたいと思っています。最後に、神戸の児童館の先生方、娘を迅速に避難誘導してくださり本当にありがとうございました。



新潟県

## 村岡 由果さん(加倉)

### 今いる場所は違うけど、浪江のことを忘れず生活したい

取材者：中越沖復興支援ネットワーク 水戸部  
取材日：8月17日 「平成23年9月 広報なみえ掲載」



新潟県

## 原中 貴弘さん・君枝さん(田尻)

取材者：(特活)新潟NPO協会 富澤

取材日：8月22日 「平成23年9月 広報なみえ掲載」

### いつかゆっくりと浪江町や実家のあった 請戸を娘と歩きたい



▲助産師さんから習った「生け花」の前で、原中さんご一家。

震災発生時、臨月だった君枝さん。新潟市内の病院にて、菜乃巴ちゃんを出産。貴弘さんと貴弘さんのご両親、君枝さんのご両親は一時、新潟市北区の避難所で過ごす。菜乃巴ちゃんのことを考え、3人で新潟市に移住を決意。

出産予定が3月だったため、妻だけ震災直後、新潟市の市民病院に入院しました。私と私の両親、それから妻の両親は、数日後、新潟市北区の避難所に行き、しばらくそこで過ごしました。今後、私の両親は、新潟市から宮城県亘理町で、妻の両親は東京から南相馬市で暮らす予定にしています。

出産時は、新潟市内のある助産師さんとの出会いがあり、体も心もサポートしてもらいました。産後、妻の体調を気遣ってもらい、その方のご自宅に一週間お世話になりました。娘の菜乃巴は、食道閉鎖症で産まれ、翌日に手術をし、退院は一カ月半後でした。その間もお見舞いに来てくれたり、お知り合いの方を紹介してくれたり、妻と娘の菜乃巴を実の娘と孫のように可愛がってもらい、現在も深い交流があります。

今不安なことと言えば、新潟の冬、雪のことでしょうか。二人とも浪江町出身なので、雪の生活には慣れてないんですね。

それから、地元の方と話したいという思いがあり、地元福島県のナンバープレートを見たりすると、つい駆け寄りたくなります。この前は、逆に声をかけてもらい、浪江出身の方にお

会いました。

新潟県は、水害、地震と度重なる災害にあった経験があるからなのでしょうか、とても素早い受入れ体制をとっていただき、大変感謝しています。子どもの出生届と一緒に、私たち夫婦は新潟市に住民票を移しましたが、市からさまざまな情報が届くので、今の暮らしに不便はないです。逆に情報が豊富で、何を選んだらいいか困ったときは、助産師さんに相談しています。

浪江町の情報は、インターネットで調べたり、福島県内にいる友人などから電話で教えてもらっています。しばらくは新潟市で暮らすことを決意しましたが、いつか娘を連れ、ゆっくりと浪江と実家のあった請戸を懐かしんで歩ける日が来ることを強く願っています。そのためにも、町の情報はこれからもずっと受け取りたいです。

今回の震災で、ふるさとのことをとても尊く感じました。県外にいる私たちの思いや提案を受け付けてもらえる機関を設けてもらい、絶えず呼びかけてほしい。もう誰一人悲しむことなく孤立することがないように。そう願ってやみません。





福島県

## 根本 昌幸さん(苅宿)

取材者：NPO法人市民公益活動パートナーズ 古山

取材日：9月4日 「平成23年10月 広報なみえ掲載」

### 孫の成長に、生きがいと希望を託して

JR富岡駅前の勤務先で地震に遭い、直後の津波から逃れながら、何とか苅宿の自宅にたどり着く。すぐに母親や妻、孫、そして愛犬とともに津島へ避難。3日後、福島市へ移動し、到着直後は友人宅に。その後、義理の弟さん宅で3月半ばからの3カ月弱を過ごし、6月初旬に相馬市の借上住宅に転居。



▲おばあちゃんと根本さんご夫妻、そして愛犬ココ、みんな一緒に。

■**ともかく、家族全員が無事に帰宅し、避難したあの日**  
強い揺れの後、職場から水平線を見つめていると、10mを超すと思われる真っ黒い波の壁が見えました。とっさに大津波の危険を確信し、近くの人に避難を呼びかけました。通称「山麓線」をたどって自宅へ戻ろうとしましたが、橋のたもとには大きな亀裂や隆起ができていて、周りの人たちが丸太を組み、助け合いながら家に戻りました。自宅にいた今年93歳になる母は歩くことが不自由でしたが、

■**仲間や同窓生、さまざまなたちに支えられて**  
私も妻も詩人としての活動が長く、作詞活動を通じた音楽関係の先輩後輩や、作り上げた歌を届けた施設の方々から、本当に多くのお心遣いや差し入れをいただきました。また、妻の出身地福島市の友人たちが消息を心配してくれたり、かつての部活の仲間たちが励ます会を開いてくれたりと、多くの人に支え

あの非常時だからだったのでしょうが、迅速に200m離れた隣家を頼り、無事でした。

また、町の体育館に向向っていた妻、洋子は、途中にある浪江高校の生徒たちに請戸地区の津波を知らせたり、避難を呼びかけたりしながら家に向かったようです。苅野小学校に通学していた孫の郁弥も無事に帰宅し、愛犬を伴って全員で津島の避難所に行きました。

愛犬が一緒だったので私は車で寝泊まりし、配られる小さなおにぎりや4人で1個のメロンパンを分け合っていました。その大変な体験と、避難先の福島での生活とを経験した孫はたくましくなったように感じます。

られて今があります。介護ベツトが必要な母のために仮設住宅より借上げ住宅をと、この相馬の家を紹介してくださったのも歌を通じて知り合った施設の方でした。

原発事故の深刻さを知らされるたびに、浪江へ戻ることは無理なのかもしれないと思っしてしまいますが、浪江町の人々が活躍されている新聞記事などを目にする時、とてもうれしいです。

避難するたびに転校することになった孫はかわいそうでしたが、今は元気に野球を頑張っています。

これから、私が作詞した「ふるさと浪江」のレコーディングをしますが、私の中ではいつまでも美しい浪江のままです。歌のイメージを壊したくないので、まだ無残な浪江は見たくありませんが、一段落したら墓参りをしに一時帰宅したいと思っています。



私は、震災3日後に親戚のおじさんが住んでいるさいたま市に避難してきました。お父さんは福島で働いていて月に1回から2回会いに来てくれます。昨日は私の誕生日だったのでお父さんも一緒にみんなでケーキを食べました。



▲お気に入りのマグカップを前に並べて。  
左から花菜ちゃん、舞ちゃん、羽海ちゃん

今は毎朝、通学班のみんなと一緒に学校へ通っています。新しい友だちもできました。学校で一番楽しいのは、友だちと話したり遊んだりしているときです。休み時間になるとみんなが遊びに誘ってくれるのがうれい

です。この間、始業式があって学校に行ったときも友だちから声をかけてくれました。浪江にいたときは、自転車にいっぱい乗ったり、ずっと外で遊んでいました。でも、ここは自動車が多いので浪江にいたときのように遊ぶけません。



埼玉県

渡部

羽海ちゃん(小4)(立野)

浪江・沢上の花火を見たい  
なみえ焼そばが食べたい

取材者：ちば市民活動・市民事業サポート  
クラブ 大内・牧野  
取材日：9月11日 「平成23年10月広報なみえ掲載」



役場から

## 金山 信一さん(立野)

取材者：地域社会デザイン・ラボ 遠藤  
宮城大学地域連携センター 高田  
取材日：9月14日「平成23年10月 広報なみえ掲載」



▲仕事帰りに福島駅前にて

## 浪江の人・海・山・川を想って…

現在は、二本松市にある浪江町役場で総務の仕事を担当。住まいは、本宮市で家族とともに暮らす。活発だった小中学校の横のつながりの会合を「これからもできれば…」と懐かしむ。浪江の自然を愛するアウトドア大好き人間。

今、浪江で思い出すのは、家族や子どもたちと出かけた川や海のことです。季節ごとに我が家の楽しみのサイクルができていて、4月はヤマメ釣り、7月はアユ釣り。また、海釣りでは夏にアジやイシモチを釣ったものです。

私の家族は震災後、何カ所か避難所を回った後、妻と子どもたちは静岡県に、母と祖母は神奈川県に、祖父は猪苗代町に分散避難し、私は役場の仕事があるので一人でした。連絡もままならない場合があり苦労しました。でも今は、やっと家族が2カ所に分かれながらも近い場所で暮らせるようになりホッとしています。

震災の後は、非常用電源を確保したり、避難物資を運んだり、炊き出しのための食糧の確保のために会社や商店、農家をお願いに出かけたり、避難所で食事を配る担当をしたり、役場の移転や出張所立ち上げの担当になり必死でした。でも「うちら職員がやらねば誰がやる。」という気持ちで、一生懸命に動く仲間たちに支えられてきました。

今後、浪江に帰ったら、自然を感じて楽しむ生活をまた送りたいですね。また、家族に任せきりだった田畑もなるべく頑張りたいと思います。



## 玉井 三千子さん(権現堂)

取材者：とちぎボランティアネットワーク 君嶋・大泉  
取材日：9月13日 「平成23年10月 広報なみえ掲載」

### また浪江で生活を

5年前、栃木県宇都宮市から浪江町へ移り住んだ玉井さん家族は、最初戸惑いはあったものの浪江町での生活に充実を覚えていた。そんな中の今回の震災。またすぐに戻れると財布と愛犬を連れ出てきたが…。

現在は、宇都宮市に家族と住んでいる。

震災のあと自宅は大丈夫だった  
ので、津波の被害にあった知  
人家族を自宅に泊めていた。

自宅を片付け、津波の被害に  
あった人もいるが、「また以前  
の生活に戻るように一緒に頑  
張らないとね。」と話していた  
矢先に避難指示が出た。すぐま  
た戻れると思い、財布と愛犬を  
連れて出たが、戻れたのは一時  
帰宅のみ。自宅は荒れた状況だっ  
た。

それでもいつになるか分から  
ないが、帰町したいと思う。戻っ  
ておいしい魚が食べたい。

こっちに来て、今までどれだ  
け新鮮な魚を食べていたか実感  
した。また、離れてより一層浪  
江の素晴らしさを実感している。  
都会のような物質的な豊かさは  
無いかもしれないが、人の温か  
さや時間の流れや風土など、心  
の豊かさと環境の豊かさが浪江  
の良さだと思う。

子どもたちの友だちの中にも  
亡くなった方もいるが、その人  
の分も一生懸命に生きようと話

している。また浪江の人たちと  
元気な姿でいつか会いたいとも。  
そして、いつになるか分から  
ないが、豊かな浪江で以前のよ  
うな暮らしがしたい。



▲玉井さんご家族



福島県

## 郡 たかと 崇斗くん(小4)(北幾世橋)

取材者：特定非営利活動法人市民公益活動パートナーズ 佐藤  
取材日：9月10日 「平成23年10月 広報なみえ掲載」

### 原発はばく発したけど、 ぼくのころはばく発しないぞ！

浪江町では幾世橋に住んでいて、今は福島市上鳥渡しのぶ台の仮設住宅に住んでいます。幾世橋小学校のみんなに会いたいな。あそびたいな。そして、桑原先生にまた怒られてみたいな。

9月12日、アメリカでテロのあった翌日が、ぼくの誕生日です。



▲崇斗くん(中央)を囲んで、  
祖父母、父母、弟、愛犬イチ

震災後は、小高工業高校、相馬市、宮城県角田市、埼玉県、あだたら体育館、土湯温泉と移って、ちょっと前に福島市上鳥渡しのぶ台の仮設住宅に引っ越してきました。すぐ南前の仮設住宅に、おじいちゃんおばあちゃんが住んでいて、犬のイチも、みんないっしょです。

学校は、荒井小学校に通っています。幾世橋小学校のときの近くの子も何人かいるのが、うれしいです。友だちもできました。9月18日が運動会です。楽しみです。

浪江町であった、初発神社の盆踊りのことやふれあいまつりでのもちつき、雑煮もちのこと、みんなでザリガニ取りをしたこと、3年生のときにビーズのストラップを作ったことなどを思い出します。

幾世橋小学校で大の仲よしだった原田勇真くん(浪江のころ通信第2号に登場)が、避難先の桑折町立醸芳小学校にいたとき、ぼくが会ったこともない勇真くんのクラスの子全員から、手書きの励ましの手紙をもらいました。ぼくの宝物です。



福島県

## 若勢 重孝さん(権現堂)

取材者：特定非営利活動法人  
ピンズふくしま 豊田  
取材日：9月12日 「平成23年10月 広報なみえ掲載」

### 絆を大切に

いました。浪江町民を多く知っており、みなさんを友人以上の関係だと思っています。毎日、新聞を読んでいて、言葉にならない思いがあります。

また、福島市や郡山市、他県へそれぞれ移った方と会う機会が減りました。なかなか顔を見て話すことが減った今、「絆」が一番大切なことだとあらためて気付きました。

私には娘が4人おり、17人の大家族です。先日のお盆のときには家族全員が集まりました。秋にはまた集まり、芋煮会などをしたと思っています。こうして家族の顔を見ることが幸せに感じます。

■今の生活  
私は今、二本松の借上げ住宅で暮らしています。浪江で菊を長年育ててきました。少しではありますが、また1から育てています。きれいな菊が咲くことを願いながら今、前向きな思いで暮らしています。

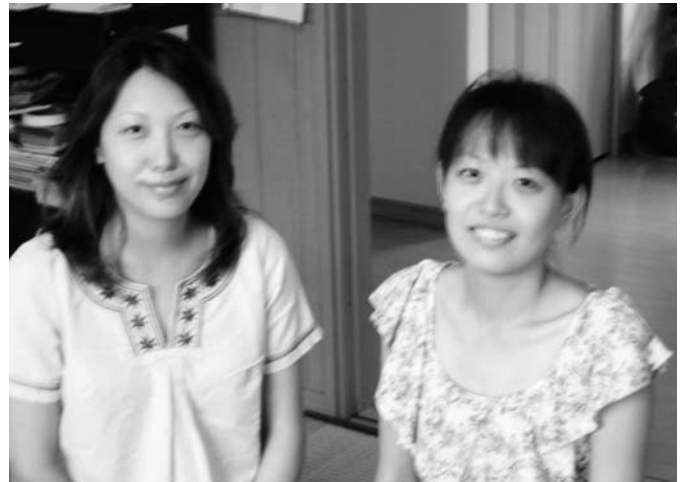
■大切に思うこと  
長年、浪江で郵政に勤めて町に帰りたいです。里帰りできる日を願っています。早くふるさと浪江で皆さんにお会いできる日を心待ちにしています。



## 朝田 麻美さん(権現堂)

取材者：くびき野NPOサポートセンター 渡辺・植木  
取材日：8月25日 「平成23年10月 広報なみえ掲載」

### いつか浪江に帰る日まで



▲朝田さん(左)と姉の星野美咲さん(右)

震災時、妊娠していた朝田さんは、9月に出産予定。親戚と一緒に避難先を転々としていたが、現在、夫の英謙さんと2人で新潟のアパートに住んでいる。偶然にも、近隣には同郷の避難者も住んでいて、助け合いながら暮らしている。

夫と冠婚葬祭の会社を営んでいました。地震発生時もお葬式の真っ最中。ものすごい揺れだったので、お葬式どころではなく、外に飛び出しました。  
祖父、父母、姉、夫のおぼの子どもら10人で避難した矢吹町では、地元の人のための避難所でしたが、特例として受け入れてもらいました。そこでのガソリンの補給は、とても助かりました。食事には、温かいおにぎりが支給され、心が少し落ち着いていたことを覚えています。  
その後、私たちは比較的福島

私が、新潟へ来てまず最初にしたこと  
は、産婦人科を探すこと。  
お腹の中に男の子を授かっていたので、心配でならなかったからです。内部被ばく検査も受け、結果、異常がなかったのホッとしています。

震災前、私は浪江町権現堂地域に住み、

から近く、放射能の心配がない新潟市にある物件を見つけました。慣れない土地で不安もありましたが、役所の方の親切な対応に感激しています。

逆に、原発問題の対応が遅いことには怒りを隠せません。避難時に置いて来た物に、ブルーシートをかけてほしいと声を上げて、2カ月後、やっと話し合いをしている状態です。東京で原発についてのデモに参加したのですが、全く報道されないことも残念。復興に向けて何もできないことが大変悔しいです。自分たちが新潟に拠点を置くかどうかは、今後の浪江の復興次第です。今は心も体もふらふらしていて幽霊のように感じます。

姉は、住民登録が東京都のまま、体調を崩し療養のために浪江に戻ってきている最中、被災しました。失業保険をもらうのに被災証明書が必要だったので、矢吹町に避難していた3月20日までの名簿を捨ててしまったと聞いて、猛抗議。名簿を捨てるなどはあってはならないことです。

また私たちには家族同様に大切な愛猫がいて、一緒に新潟に避難してきました。不安や怒りがこみ上げるときでも、猫の存在で少しその気持ちが紛れます。

人間も生活を安定させることに必死ですが、それは動物たちも同じこと。テレビのニュース等で、被災地に置き去りにされた動物たちを見ると、心が痛みます。

私は、浪江町で生まれ育ちました。浪江町への思いは人一倍強いです。今回の地震については、本当にショックが大きいのですが、浪江とつながっていたという気持ちがあるので、住民票もしばらくは動かすつもりはありません。今は浪江に帰れませんが、生まれてくる子どもがひとり立ちしたら、例えば放射線の問題が残っていたとしても、浪江に帰りたいと思います。私のふるさとには浪江しかないのですから。

妊婦という立場での避難生活。たいへんな時期もありましたが、今は35週目で安定し、定期的にプールに通ったり、ウォーキングをしたりと元気な赤ちゃんを産むためにがんばっています。この通信が完成するころには、元気な赤ちゃんが誕生しているといいなあと願っています。「広報なみえ」を見て、私たちが元氣だということを知ってもらえ、皆さんの様子が分かる、この機会を作ってもらえて本当に感謝しています。



# 大山 恵さん(川添)

取材者：一般社団法人いなかパイプ 佐々倉

取材日：9月12日 「平成23年10月 広報なみえ掲載」

## 前向きに笑顔を絶やさずに、今できることを

長女・諒子ちゃんと恵さんの故郷・高知で元気に暮らす現在ですが、郡山に暮らす親戚の近くへ暮らそうと10月に栃木県へ引っ越し、新しい生活がスタートします。

### ■家族全員無事だった

高台に家があったこともあり、津波は大丈夫でした。けれど、家の壁は崩れて、隣の部屋が見えているとか、食器が棚から出て全部割れて泥棒が入ったような状態。揺れてない時間の方が短いくらい余震もひどく「今日が私の命日か。」と思ったほど怖かったです。戦後の焼け野原のように何にもない海岸沿いを車で逃げながら、千葉で単身赴任中の主人とも携帯電話がつかまらない状態でしたが、必死で何度も連絡をとりました。幸いにも家族、親戚、友だちもみんな無事で「逃げ足の速いやつらばかりだな。」と後で主人と笑いました。

### ■なみえ焼そばが食べたくなる

高知に来てから、時折、娘が「ママ、スーパードなみえ焼そば買って来て。」と言うんです。「高知には無いから。」と答えるんですが、ときどき食べたくなります。麺がうどんくらい太くて、極太・大・中と太さも選べて、甘いソースがついていて、スーパード売っています。私が初めて食べたのは、主人の友だちが作ってくれて、ウインナー、たまねぎ、もやしが入ったもので「うわぁー焼きうどん！」って言ったなら「ソバだから。」と

言われました。

浪江は、食材が豊富で魚もおいしい。そろそろ鮭の時期になりますが、娘も大好きで、鮭のつかみどりをさせてもらって、家に持ち帰って、庭でチャンチャン焼きをしたのを思い出します。こんなどうでもいいようなたわいも無いことが、本当に幸せなんだなとつくづく思います。

### ■おかしくなくても笑っていれば楽しくなる

私は、娘が笑っている姿が見たい。「お母さん、大丈夫？」と言われるのだけは避けたい。震災直後、娘に「死ぬときは一緒だから。大丈夫だから。」と言われたことがあります。その言葉に背筋がしゃんと伸びるような気持ちになりました。娘も不安だっただろうに、私に不安な顔をしていたからだと思えます。私が不安な顔をしていると、娘も不安にさせてしまう。気持ち切り替えて、明るく、前に進めるように、おかしなくても笑っていれば楽しくなる、そう思って今できることをやっていくようになりました。

### ■何ができるか、今日できることを考えてやる

ここに来て、扇風機や自転車などいろんな方に支援していた

だいて、とても感謝しています。これに応えるためにも「私たちがやるべきことをやんなきゃ。」と思っています。前向きに笑顔を絶やさず、今できることをやって頑張るしかない。「復興」とか大きなことでなくてもいい、「家族を守る。」でも何でもいい、他の方にも新しい生活を始めていってほしいと思います。特に若い人たちには頑張ってもらいたい。新天地で、前を見て頑張ってもらいたい。



▲大山 諒子ちゃん (7才)



## 木村 郁也さん(中2)(権現堂)

取材者：特定非営利活動法人ピースふくしま 豊田

取材日：9月14日 「平成23年10月 広報なみえ掲載」

### 走り続けたい



▲「またいつか、浪江で元気に遊びましょう!!」と浪江の友達に伝えたいです。

#### ■今の生活

ぼくは今、二本松市の東和にある仮設住宅で祖母と父、母と兄、妹の6人で暮らしています。ここから東和中学校に通っています。バスの時間があるため、朝早くに登校し夜遅くに帰宅するので、少し大変なところがあります。最初は転校することで、不安な気持ちがありました。けれどクラスメイトはとても優しく、担任の先生は面白いので徐々に馴染むことができました。今はクラスの中で打ち解けて、新しい友だちができてうれしいです。

ぼくは、浪江にいたころから陸上をしていて、走ることが大好きです。走っているときが一番楽しいです。

地震の後、ぼくの家族は岳温泉に4月から8月初旬まで避難して

いました。岳温泉にいたときも同じように通学に時間がかかり、大変なことがありましたが自主練習は欠かさずに毎日走っていました。東和中学校は陸上部が盛んで、部員数も多いです。練習内容はともきびしいですけど、新しい仲間と一緒にがんばれることがとても楽しく感じています。これからも大会に向けて毎日がんばりたいです。

#### ■不安に思うこと

この仮設住宅は家族で暮らすには狭いことが不便利です。でも、ここに来てから1カ月以上たちましたので、だいぶ慣れてきました。

また、まわりには同世代の人が少なく、同じ学校の人が1人しかいないので、遊ぶ機会が少ないことに困っています。

ほかには、離れ離れになった友だちが今どうしているか、心配な気持ちがあります。

#### ■今、やりたいこと

浪江の友だちと会って思いっきり遊びたいと思っています。

また、一番やりたいことは、もっと「走ること」をしたいと思っています。通学にどうしても時間がかかるので、もっと「練習時間があれば…」と思っています。

#### ■里帰りできたら

「陸上を続けたい」とことと「友だちと遊びたい」こと2つです。



## 金井 安雄さん(請戸)

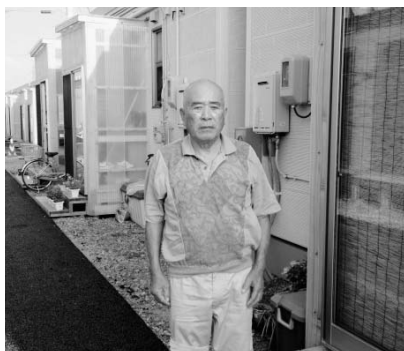
取材者：市民公益活動パートナーズ

(特定非営利活動法人ピースふくしま) 中鉢

取材日：9月15日「平成23年10月 広報なみえ掲載」

### 生きがいに

### なるものがほしい



▲北幹線第一仮設住宅前にて。ちょうど舗装工事が終わったばかりのところでした。

請戸に住んでいた金井さんは、震災後飯館の友人宅、宮城県亘理の息子さん宅、横浜の娘さん宅と移り、6月18日に北幹線第一仮設住宅に入居しました。現在は、奥さまと2人で生活しています。



## 牛来 照雄さん(川添)

取材者：NPO法人市民公益活動パートナーズ 松田

取材日：9月3日 「平成23年10月 広報なみえ掲載」

### 借上住宅にも情報が欲しい

浪江町の川添地区に住んでいる。

震災当日は、翌日に退院を予定して、南相馬市の市立総合病院に入院中だった。

知り合いの車に同乗して自宅に戻ってからは、二本松市を経て千葉県まで避難したが、なかなか浪江の情報が入ってこないで、4月になって再び二本松市に戻り、その後岳温泉の旅館にお世話になっていた。

6月下旬から、三男家族も避難している桑折町に夫婦で暮らしている。

入院していた病院から、津波が迫ってくる様子が見えたので、これは尋常ではないと感じた。病院の廊下や外にもベッドが並べられ、さながら野戦病院のようだった。

被災の後、妻とは別々に避難のための移動をしなければならなかったが、津島の避難所で再会できたことは幸いだった。それでも、避難所での寒さや食べ物の少なさ、状況が分からないことに対する精神的な苦痛など、今思い出してもつらいことが多い。

県内のあちこちに住んでいる知人や友人が、いろいろと気に掛けて支援してくれたことは、物心両面で助けられた。いろんな縁があつて桑折町にお世話になることになったが、この家も知人が探してくれたものなので、本当にありがたい。

ここ桑折町は、浪江町に住んでいるとあまり馴染みがないが、ほとんどの用事が歩いて済ませることができるほどコンパクトで便利なところだ。かつて転勤で近くに住んでいたことがあり、果物もおいしく暮らしやすい町なので、大変気に入っている。

そして、浪江でやっていたグランドゴルフを桑折町でも仲間に入れてもらってやれることがうれしい。できれば、そば打ちやパソコンなどもやってみたいと思っている。

最後に、役場へのお願いだが、避難者がまとまって住んでいる仮設住宅には、全国からの支援に関するお知らせなど多くの情報が入ってくるようだが、個別に住んでいる借上住宅にはそうした情報がなかなか入ってこないで、ぜひ情報の伝達について検討して欲しい。



▲照雄さんと奥さんの紘子さん

3月11日の地震があつたときは、病院や農協に行つた後で、地震がおさまつた後、一旦家に戻ると瓦が落ちていました。2度目の揺れが来て、危ないなと思つたので車で避難しました。6号線の如水のところにいると、後から来た人から請戸の部落が無くなつていてと聞きました。請戸には津波は来ないからと言つて残つていた方もいて、顔見知りやご近所でも亡くなつた方がいました。

1回目の帰宅のときに見てきたのですが、畑をやつていろいろな作物を作つていたり、シルバー人材で植木屋や家の解体の仕事などもやつていたり、その資材などもあつたのですが、みんな流されてしまいました。

仮設には6月16日の説明会のあと、すぐに入れたのはよかったです。仮設住宅もまだ直すところがあつて、お風呂のお湯と水の調整のcockの調整が難しいので直してもらつたりしています。

心配なのは寒くなつたときです。夜にふと目が覚めたときに将来のことも考えたりもします。気をもんでもしようがないとは思つてうにしています。

この仮設には請戸の人も多いため、集会所で集まつて、懇談したり涼んだりしています。

鮎とりをしたり、釣りをしたり、鮭がのぼつてくるのが楽しみだったり、夏は海水浴の監視員をやつたり、いろいろ楽しみもあつたのですが、今は夢の夢になってしまいました。

これからのことについては、請戸の360戸が1カ所にまとまつて住めるようなものをつくつてもらえたらと願っています。





# 泉田七海<sup>ななみ</sup>ちゃん(小2)・真美さん・利雄さん(両竹)

取材者：NPO法人ちば市民活動・市民事業サポートクラブ 風間・鍋嶋  
取材日：9月12日 「平成23年10月 広報なみえ掲載」

## 3月10日に戻って、いろいろなものを見てみたい

津波ですべて流されて何一つ持ち出せなかった泉田さん家族。数か所の避難所を経て、4月から家族6人で東京都足立区の団地に住んでいます。



▲『浪江カエル』を抱えた麻衣ちゃん、七海ちゃん、利雄さん(おじいちゃん)、真美さん(お母さん)

浪江にいたときは、お友達とマリンパークに行ったり、パークキューをしたり、たくさん楽しいことがあったよ。今、通っている小学校は5クラスもあって、お友だちの名前を覚えるのが大変。浪江の小学校は1クラスだけだったから、みんな仲良しだったよ。

■七海ちゃんの話  
地震のときは、お母さんと妹の麻衣といっしょに、車で逃げたの。車には、チョコレート1個しかなくて、お腹がぺこぺこだったよ。その日の夜は車の中で寝たの。車の中にあつたカエルのぬいぐるみはずーっと大事にしているの。だって、ほかには何も持ってなかったんだもの。もしできるなら、3月10日に戻って、いろいろなものを見てみたいなあ。海、カエル、おたまじゃくし、ザリガニ：一番に会いたいののは、猫のタロー。どうしているか、とても心配。

■利雄さんの話  
地震のときは、家内と津波に追われながら山に逃げました。避難所で息子といっしょになりましたが、孫たちは見当たりませんでした。知人の車を借りて、一晩中あちこちらの避難所を探し回り、出会えたときは、もう言葉にならないほど嬉しかったです。

あと8回寝たら私の誕生日がくるのが、今一番の楽しみ。妹の麻衣は、電車やバスが好きなので、東京でも楽しそうだけど、東京にはカエルがないねと話しているの。  
■真美さんの話  
この住人の方からは、「大丈夫ですか。困ったことはありませんか。」と声をかけていただき、理解ある方に恵まれています。ただ、子どもたちは、飛び跳ねたり、自由に元気に遊びたい時期なのにできないのが、とてもかわいそうです。4月にここにきたときは、長女の学校のことがばかり気になり、次女の幼稚園は後回しになってしまい、同じ年代の子どもと遊ばせる機会が持てないことが気がかりです。

浪江町に農場を持ち小松菜・米・養鶏を育てる農家だった渡部夫妻は、現在、寛志さんが大学時代を過ごした愛媛県に家を借り、家族4人で暮らしている。農地も借りることができ、農家としての再出発も果たしている。



▲明歩ちゃんが通う小学校の前で、左から渡部寛志さん・明理ちゃん・明歩ちゃん・直美さん

## 「みかん」で福島と愛媛をつなぎたい

取材者：一般社団法人いなかパイプ 佐々倉  
取材日：9月13日 「平成23年10月 広報なみえ掲載」



# 渡部 寛志さん・直美さん(酒田)



## 鈴木 美穂さん(川添)

取材者：茨城大学大学院人文科学研究科 川又  
取材日：9月14日 「平成23年10月 広報なみえ掲載」

### 町中のみんなが「お知り合い」

生後3カ月（当時）の次男を抱きしめて耐え抜いた地震。津波で義父（棚塩）が犠牲になった。現在、茨城県石岡市内の公営住宅に親子4人で暮らしている。

震災発生当日は、川添の実家で被災した。当時、実家には、私、次男（当時3カ月）と実母、祖母がいた。私は、地震の揺れで天井から落ちてきた照明器具が頭に当たってけがをしたが、他の3人は無事だった。

町内の歯科医院で助手として働いていた私は、夕方、仕事が終わると、町内で夕飯の買い物をして帰っていた。「子どもや夫も帰ってくる時間」そう思いながらも、つい買い物の時間が長くなってしまふ。「なんだ、バンゲの支度が？」必ず何かに声をかけられ話し込んでしまう。そして、「おばちゃん、もう痛くないですか？」昼間来院した患



▲鈴木美穂さんと次男（現在6ヶ月）

者さんの姿を見つけては声をかける。買い物を終え帰宅するころには、すっかりあたりは暗くなっていた。「お母さんお腹すいた！」子どもたちが口をとんがらがせて、脚にしがみついてくる。そんな日常だった。

石岡市在住の姉をたよってこの地で生活を始めた。南相馬市内の会社に勤務する夫は、勤務先の業務再開により、南相馬市で单身生活を送っている。仕事が忙しいため、月に一度程度、子どもたちに会いにくるのがせいぜいだ。

見知らぬ土地で最初は戸惑うことも多かったが、9月に入って長女と長男が市内にある私立幼稚園に通い始めた。

避難生活を始めて半年、一時帰宅にも参加したが、地震で傷んだ我が家の周りには、私の背丈ほどになった雑草が生い茂っている。

生まれて以来、私たち家族はみんなこの町「なみえ」で育ってきた。いつかまたこの町に戻り、友だちや親戚、日ごろ気軽に声を掛け合ってきた人たちと、震災や原発事故による避難生活の日々について「あの時は苦労したよね…」と話せる日が来ること、思い出に変わる日が来ることを信じている。そして、一日でも早く家族がそろって暮らせる「日常」が来ることを願い、しっかりと前を向いて子どもたちを育てていきたい。

南相馬市小高区で生まれ育ちましたが、農場や生活圏が浪江町にあり、市場に野菜を出したり、浪江町の人たちに自分たちがつくったものを食べてもらっています。そんな浪江町に住もうと住所を移して間もなく震災に遭いました。

愛媛に避難して地域の方によくしてもらい、家やみかん付きのみかん畑まで貸してもらうことができ、今年からみかんを出荷することができました。このみかんで福島と愛媛をつなげたいと思っています。東北でみかんをつくっている人はほとんどいない。福島の農民と競争することがない作物を送れば喜ばれるだろうし、自分たちとのつながりを保っていただけるろうと思ってみかん畑を借りました。

これまで付き合いのあった地域の人たちが、全国散りちりになっていますから、そういう人たちに届けられるようにしたいです。学校給食にでも使ってもらえたら、福島の子どもの口には入ります。そうやってできれば、全量福島に出荷したいと考えています。けれども、私も生活がかかっていますから、成り立つ仕組みを考えていきたいと思っています。また、そうすることで「自分がめげずに、農業やっているんだぞ。」という主張にもなるかなと思います。他にも避難者で、農業を再開している人がいますから、その人たちと連携して、今後このような取り組みを展開していきたいと思っています。



## 山田 洋子さん(権現堂)

取材者：茨城大学大学院人文科学研究科 川又

取材日：10月12日 「平成23年11月 広報なみえ掲載」

### いつか家族がそろう日を目指して

震災発生時、家族全員はそれぞれ仕事や学校で離れ離れの中、度重なる余震におびえながら必至に耐えた。日が暮れてから家族は再会。あれからすでに7カ月。今でも家族は離れて暮らしている。

相馬市内で開かれた会合に出席中、激しい揺れに襲われた。幸い、けがは無かったが、携帯電話もつながらず、土木業を営む夫と次男、南相馬市内の会社に勤める次男の妻と連絡が取れなかった。

「孫二人（次男の子）は大丈夫か…。」

それぞれ小学校と幼稚園に居るから大丈夫と思いつつ心配だけが心をよぎる中、自宅を目指した。普通ならば1時間程度の道のりだが、いたるところで道



▲洋子さんと夫・正昭さん  
孫・圭祐くん(左)と拓実くん(右)

路が損壊し、断続的に渋滞していた。自宅に着いたのは夕方、日が暮れた後。家族全員が再会したのは夜遅くになってからだった。自宅内は家財が散乱していたが、一部屋を片付け、家族全員が身を寄せ合って一夜を過ごした。

翌日、町内に嫁いだ娘から避難について知らされ、家族とともに南相馬市内を経て、赤宇木にある親戚宅に移動した。そして、15日未明、遠方へのさらなる移動を決断。親戚を含め合計10人、自動車4台に分乗して姪が住む茨城県結城市を目指した。

幸い、姪の自宅には離れがあり、そこに約1カ月間身を寄せた後、4月下旬、現在生活している市内の雇用促進住宅に落ち着いた。その後、勤務先の事業再開のため次男夫婦が南相馬市内へと移った。私たち夫婦と孫2人の4人、次男夫婦2人、それぞれ離れ離れの生活が始まった。

震災前まで、夫の営む土木業の事務仕事をしていた私は、毎朝、現場に出かける夫と次男、勤務先に向かう次男の妻、学校や幼稚園に向かう孫を送り出し、夕方また元気に帰宅するのを迎えるのが日課だった。日中、家事を済ませた後は、買い物物てら近所に住む友人と茶飲み話に花を咲かすもの楽しみだった。しかし、そうした当たり前としか思っていなかったことが無くなってしまったからもう半年以上経過した。その間、一時帰宅で浪江に戻ることはあったが、地震で壊れたままの自宅の中は、風雨にさらされ続けているせいか、埃とカビだらけ。変わり果てた街と自宅に呆然とした。

結婚以来、夫とともに二人三脚で歩んできた。次男が家業を継ぎ、孫も成長して、ようやくこれから思っていた。家族6人、平和な日々だった。今は、仕事のために離れて暮らす次男夫婦に代わって孫2人の面倒をみる日々。今はその孫の元気な姿をみることだけが、私と夫にとって心の支えになっている。そして、一日でも早く、家族が離れて暮らす日々が終わりを告げるときが来ると信じて、今、この時を生きていきたい。



## 鈴木 荘司さん・みよ子さん(幾世橋)

取材者：地域社会デザイン・ラボ 遠藤

取材日：10月16日 「平成23年11月 広報なみえ掲載」

### 今一番の楽しみは、浪江の知人・友人と話をすること

震災後、仙台そして秋田に避難し、その後4月中旬から仙台市太白区の集合住宅に在住。荘司さん、みよ子さん、息子さんの3人で暮らす。近くには娘さんや甥子さんが在住され、行き来して助け合いながら暮らしている。ご自宅は幾世橋芋頭。

浪江で暮らしているときは、商店を経営して



▲避難先の集合住宅のリビングにて

ました。思い出するのは、店に買い物に来てくださった方たちの顔。振り返ると感謝の気持ちでいっぱいです。故郷を離れてみて感じたのは、浪江は気候が穏やかで海・山・川があり季節ごとに楽

しい町だったなということ。悪い所は一つもありませんね。

今住んでいる集合住宅は、静かで緑も見え、そして、病院やスーパーも近くにあり、暮らすという点では申し分ありません。ですが、家にこもってばかりではダメになると思い、仙台を知るために自転車で出かけたり、近所のお店の手伝いやボランティア活動などを行っています。こんな生活の中で楽しいと思えるのは、浪江で一緒だった友人・知人と会い話をすること。先日は、仙台駅近くで浪江町出身の方が店をオープンされたので訪問しました。

今の思いは、「浪江町をルーツに持つ人たちのご恩に報いるためにも必ず帰りたい！」ですが、元の商売を再開できるかが悩みです。今はそのときに備え、自分は何ができるかを考えプランを練り、行政の力も借りながら頑張りたいです。復興には個々の力が大切だと思っています。



## 木村 敏さん(幾世橋)

取材者：(特活)新潟NPO協会 富澤

取材日：9月10日 「平成23年11月 広報なみえ掲載」

### これからもふるさとを思いながら、暮らしていきたい

町で3代続く、はんこ屋だった木村さん。一家7人で新潟市に避難し、今は2世帯にわかれて生活している。

私たちは、浪江町に住む両親と叔母の7人で、3月15日に新潟に避難してきました。新潟市出身の妻の実家に避難した後、新潟市の公営住宅に引っ越しました。その後、7人では、狭かったため両親と叔母、私たち夫婦と子ども2人の2世帯にわかれて、民間の借り上げ住宅に引っ越しました。わかれたとはいえ、両親と叔母は隣のアパートにいるので、子どもたちも毎日行き来しています。

子どもたちは友だちもでき、私も仕事が決まり、新しい生活をスタートさせていますが、時々寂しさを感じることもあります。そんなこともあり、離れ離れになってしまった仲間と電話やメールなどで互いの暮らしぶりや浪江町の情報などをやりとりしています。

両親は、先日浪江町から配布されたフォトビジョン（電子回覧板）を活用し、情報を受け取っています。県外にいる者にとって、情報が届かなくなることは不安なので、こうした広報紙や電子回覧などのしくみはありがたいです。これからもふるさとを思いながら暮らしていきたいですし、心の支えにつながるので、今後も続けてほしいです。



▲左から敏さん、陽菜ちゃん、真樹子さん、天馬くん



東京都

## 矢野 正さん(牛渡)

取材者：(特活) ちば市民活動・市民事業サポートクラブ 風間・鍋嶋

取材日：10月17日 「平成23年11月 広報なみえ掲載」

### 人情豊かで、歴史深い浪江町に帰りたい

私は、震災当日は、一人で自宅にいました。一時的に高台にある親せき宅に避難、その後、指示のあった集会所に移動し、3日間そこで過ごしました。後で、わかったことですが、そこは一番放射線量の高い場所でした。国の情報が早く公開されていれどと思えます。

自宅は、地震で半壊。足の踏み場もないくらいで、屋根が壊れ雨漏りがひどく、大事にしてきた漢文詩の自作品、自作小説、農業関係の論文などほとんど駄目になり、残念でたまりません。先日、一時帰宅をしましたが、行くたびに自宅の崩壊は進んでいて、今帰っても住めない状態です。そんな中、自作の漢詩を百編集めて編集した「磐嶺百絶」が奇跡的に雨に濡れずに一冊だけ残っていたのは、うれしいことでした。

6カ所目の避難先になる、この区民住宅には長女夫婦と3人で4月末に越してきました。南相馬や石巻から避難してきた14世帯が入居、同郷の方々が近くいてとても心強いです。家主さんからは、空き室を避難者同士がいつでも自由に使えるようにと、提供いただきました。み

んなで「とわルーム」と名付けて、月に一度、避難者の集いを開くなど、避難者家族の交流の場に使っています。

区主催の秋のコンサートに無料招待いただくなど、品川区からは、各情報を丁寧に案内していただき、区の対応には、とても感謝しています。娘には、「都会にきて、行動的になつたね。」

と言われます。歴史や古文書に興味があるので、品川の寺院などに積極的に出向いていますからね。弓道場にも道を尋ねながら行きましたが、皆さん丁寧に教えてくれます。この住宅は、来年7月までの条件で提供いただいているので、その後はどうなるのか不安もあります。

品川の人情にふれ、心地よく暮らしていますが、やはり浪江が恋しくなることもあります。いつも近くにいた兄弟ともなかなか会えないし、浪江町は「となり組」の意識の高い土地柄で、助け合いながらの生活は当たり前です。野馬追いなど、歴史ある行事も多い浪江町に、帰れるものなら帰りたいですね。

#### 矢野正さんからのメッセージ

4月末、品川区はじめ、関係機関団体の厚意により、区借上げ住宅にて生活しています。ここ、品川は江戸時代の名残りも美風を今に伝え、人情厚き良い街で、多くの方々御懇情に支えられ、予想だにできなかったここでの暮らし、人々との交流は終生忘れ得ません。



▲年齢より若く見える矢野正さん(79歳)と長女の千鶴子さん



## 遠藤 明美さん(権現堂)

取材者：高崎経済大学 櫻井研究室 櫻井

取材日：10月15日 「平成23年11月 広報なみえ掲載」

### 震災が招いた現実を受け止めて、 前向きに生きていく



▲きょうすけ 恭介君(5歳)と明美さん

数日前に、浪江の自宅に初めて一時帰宅することができました。雑草などで荒れ果てた街並みにショックを受けました。避難後はいつもテレビの中に見ていた浪江の風景が、実際に目の前に現れ、あらためてこの震災が現実なのだと思えました。そして、この現実を受け止めなければならぬ。むしろしっかりと受け止めて前向きに生きていかなければならないと思っています。

私は、浪江町児童館での仕事  
中、子どもたちの帰宅時間のた

め「さようなら」をしているときに大きな揺れに遭いました。先生方と不安になる子どもたちに声をかけ、揺れがおさまってから子どもたちを車に乗せて高台に避難しました。震災後、離ればなれになってしまった長男の恭介とは5日後ようやく会うことができ、泣きながら抱きあつたことを思い出します。津島、会津、郡山、そして茨城にある夫の実家などを転々として、いまの群馬県大泉町の公営住宅に4月上旬から住んでいます。同じ建物の中に、福島県から避難してきたご家族も何軒かあり、浪江の方とも親しくさせていただいています。震災後まもなくは、津波の夢を見たりして眠れないことがあり、精神的に不安定な日が続きました。保育所に通う恭介もなかなか新しい雰囲気慣れずに苦勞しました。今は、恭介にもお友だちができて楽しく通い、運動会では自転車に乗りスラロームを披露しました。知らない土地に来て、仕事もまだ見つかっていないこともあつて、いまは同郷の皆さんとお話することが私の支えです。

11月は浪江の十日市です。こ

ちらでコスモスの花を見かけると、浪江でもコスモスがきれいだったことを思い出します。町民の皆さんは、どこでどんな思いで生活されているのでしょうか。それがまったく分からないことが不安を増しているように思います。勤めていた浪江町児童館の子どもたちやご家族の皆さんにもお会いしたいです。8月末に二本松市で開催された児童館の修了式に、恭介の体調が悪く出席できなかったことがとても残念です。浪江町児童館に通っていた子どもたちには、新しい環境で慣れるのに時間がかかると思いますが、たくさん食べて、遊んで、楽しく過ごしてほしいです。

最初のころは、すぐにでも浪江町に帰りたいと思っていましたが、時間の経過とともに子どもの安全のことを思うとそうも言えないと考えてしまいます。ただ、以前は毎日のように孫の恭介と会っていた私の両親とも離れたままですし、何よりも私は生れてからずっと浪江町で生活してきました。いつか必ず皆さんと浪江町で再会できる日が来ると信じて、その日まで頑張っていきたいと思っています。



## 原田 徳郎さん(立野)

取材者：(特活) ピーンズふくしま 中鉢

取材日：10月16日 「平成23年11月 広報なみえ掲載」

### つながりを取り戻して、 浪江に帰ることのできる見通しが持きたい

原田さんは、定年退職後に家業の梨づくりを継いで5年になり、まさにこれからというときの震災・原発事故だったそうです。3月12日に避難の指示があり、家族で福島市の福島高校の避難所へ避難。その後土湯温泉の2次避難所へ移り、5月末から家族5人で福島市町庭坂の借上住宅で生活しています。

地震のときは梨畑で仕事をしていたときでした。ひどい揺れで梨の木にしがみついています。2回目の揺れも来て、これはひどいと感じました。家に戻ったら、中はガチャガチャになっていて、おさまってから片づけをしました。電話も通じず、夜はろうそくの生活で、双葉町の作業所に勤めていた家内も一晩帰ってこれませんでした。3月12日、家内が作業所のメンバー2人を連れて戻ってきたので、その家族の消息を探して富岡・川内とまわりましたが、見つか



▲左から  
徳郎さん、妻の知恵子さん、母の喜代さん、父の繁雄さん

らず12日の夜には再び家に戻ってきました。夜、防災無線で20km圏内避難の指示が出たので、父・母・私・家内・息子の5人と作業所のメンバー2人と犬を連れて、車2台で着の身着のまま避難しました。津島、川俣と避難して行きましたが、どこもいっぱい、夜中の1時半すぎに福島高校の避難所にたどり着きました。街中の避難所だったので医療的な面などではよかったです。避難者同士お互いの顔が見えたのは心強かったです。ただ、まだ寒い時期での体育館の生活はこたえました。4月7日まで避難所で生活し、次に2次避難で土湯温泉の旅館に移りました。少しは落ち着いたものの、家族5人で1部屋の狭さです。旅館にいる間に家探しをしましたが、家を決めてから入居までには手続きなどもあつて1カ月かかりました。土湯温泉には5月27日までいたのですが、借上げ住宅に移ったのは早い方だと思います。

借上げ住宅なので、まったく近所に知り合いがない状態でした。携帯電話で連絡先がわかっている知り合いのところや親戚のところには行ってみたいと思っています。同じ地区の方でもバラバラになっています。友だちや同級生の消息、お互いの様子も知りたいです。

家や畑が警戒区域になってしまった後、2回の一時帰宅がありました。畑はすっかり草に覆われて、動物が寝そべった跡があつたり、人が住まない状態になるとこんなに荒れてしまうものかと思いました。

家の中のものはいくら倒れたり、壊れたりしたものがあつましたが、建物や屋根は無事でした。ただ、電気や水道も通じていないし、警戒区域で許可なく入ると罰せられる。すぐに帰れないというのが残念です。

生活はなるようにしかならなけれど、家ならできるといかなかなか自分の思うようにならないと感じます。横のつながりが切れてしまったので、どういう形で取り戻していったらいいのか。鉄道や道路も南北に分断されている状況なので地域的には相当なダメージです。

今は、いつ帰れるのか誰もわからない状態です。役場も皆も大変だとは思いますが、情報や見通しがほしいです。



## 紺野 堅吉さん(南津島)

取材者：(特活) ビーンズふくしま 豊田

取材日：10月6日 「平成23年11月 広報なみえ掲載」

### 郡山市熱海から皆さんへ

現在、福島県の郡山市熱海町で借り上げ住宅に暮らしている紺野さん。父と妻、娘の4人で暮らしています。故郷をはなれて、環境に馴染むのに時間がかかりましたが落ち着き始めた様子です。浪江への思いが強いことが感じられました。

#### ■懐かしく思う風景

震災の後、私たち家族9人は3月13日に郡山市大槻町に避難しました。その後、娘夫婦と孫は茨城県のつくば市へと移りました。私と妻、父、娘の4人は3月20日に、ここ熱海町の借り上げ住宅へと越してきて仕事に着きました。熱海町は温泉地として有名で、時折利用して心と体を癒しています。

この生活にも当初より慣れてきましたが、やはり津島の風景が懐かしく思い、心寂しく思うときはあります。

先日の帰宅で、震災の後を見返してきましたが、復興に時間がかかることを実感しました。私の自宅も住むことが難しい状況を知りました。帰宅したことで、故郷にとっても愛着があることをあらためて実感した機会でもありました。

地元の毎年ある伝統の祭り、自宅近くでよくいていたパークゴルフ場など、思い出深い景色が鮮明に浮かんできます。

なにより、一番は浪江の方々、仕事をしてきた仲間、近隣の方々、

長年の友人など、たくさんの方にお会いしたい気持ちがあります。人と人との絆がとても大切なものだと、あらためて気付きました。

今は、周りに知っている方が少ないのが現状です。熱海には浪江の方がもう一人いらつしゃいますが、近くに知人・友人がいないことでお会いできないことが不憫に感じます。父も同じように感じていて、家族が不安に思っています。

#### ■またお会いできる日を

緑豊かな故郷に帰れる日を待ち望んでいます。町に戻れる日が来たら、落ち着いて生活したいです。行きつけだった居酒屋で友人たちと飲みたいと思います。いつかまた会える日が来ると思いますが、気を落とさないでほしいと願っています。



▲またお会いできるのを楽しみに





## 天野 慶子さん(権現堂)

取材者：(特活) 市民公益活動パートナーズ 佐藤

取材日：10月7日 「平成23年11月 広報なみえ掲載」

### 「そろそろ、『こうだったら』という思いを、言葉にしてもいいかな?」と思っています

浪江町権現堂に住んでいました。今は、福島市笹谷の笹谷東部仮設住宅に落ち着きました。仮設住宅に入居とともに、浪江町同様に福島市内の郵便局で働きはじめました。浪江町では、浪江のこころ通信第3号に登場した婦人消防隊長木幡豊子さんの元で、副隊長をしていました。



▲すてきな笑顔って、結構難しいかな? (いえいえ、すてきです!取材者)

3月11日は、浪江郵便局で勤務中でした。すぐにお客さまの安全避難誘導に務め、最後のお客さまをお見送りした後、主人と小野田に住む実母と連絡を取り合い、高台へ向かいました。高瀬球場、浪江中学校、そして再び小野田へ。

12日早朝、「津島へ避難を」の防災無線の呼びかけに、浪江高校津島分校へ向かいました。いつもだったらそんな時間に、かからずに着けるところなのに、車がまったく動かず、着いたときはもう10時をまわっていました。

3月11日は、浪江郵便局で勤務中でした。すぐにお客さまの安全避難誘導に務め、最後のお客さまをお見送りした後、主人と小野田に住む実母と連絡を取り合い、高台へ向かいました。高瀬球場、浪江中学校、そして再び小野田へ。

た。やっこの思いで着いた津島分校は、大きな揺れで校内はメチャクチャな上、原発が深刻な事態に尋常でない数の人が押し寄せ、非情な様相になっていました。大勢の人々の中に法被を着た消防団員の姿を目にした時、私は車の中に常に法被を入れていたことを思い出し、すぐに着て消防団員の方々と教頭先生はじめ先生方と、寒さのなか消防車をフル稼働させ、食糧の調達・配給・簡易お手洗いの設置などに走りまわりました。忘れもしません、そうやって走り回った最初の食糧配給は、8枚切の食パンが一人1枚でした。

13日には、人々の数は600、700人に加え、最大では1,000人の人々が、教室や廊下にあふれました。思いもよらないことが次々と持ち上がり、校内のポットやストーブをかき集めるなど、赤ちゃんや高齢者の方、お体の不自由な方への対応、と皆さんと知恵を出し合い、婦人消防隊員としても無我夢中でした。その後、寒さの避難生活に高齢の母の体調が気にかかり、妹の住む福島市へ避難しました。



福島県

## 木幡 <sup>かざ</sup> <sup>ね</sup> 風音さん(苅宿)

取材者：(特活) ビーンズふくしま 豊田

取材日：10月11日 「平成23年11月 広報なみえ掲載」

### いちょうの木がまた見たい

寒さに凍える中、スパイクを持って避難した風音さん。地震の翌日は、とても楽しみに待ち望んでいたステージで走れることを願って、スパイクを持っています。今もなお陸上を続け、大会にむけて日々努力しています。

地震があつて避難したのは12日の夜でした。父と母と私は、原町の馬事公苑へ車で行き、14日まで居ました。15日の早朝に、自宅にガソリンを取りに行つてから、新潟経由で石川県の実家へと行き、5月の連休明けに郡山市へと来ました。新潟のパーキングエリアで初めて温かい食事をしたことが、心に残っています。

今は、郡山市の貸家で父と母と3人で暮らしています。ここから郡山北高校に通っています。郡山北高校の中に、サテライト高として小高工業高校内にクラスがあります。学校では、少しずつクラスメイトが転校していきませんが、たくさんの友だちができました。親身な先生がいまので安心していきます。

学校だけでなくいろんな人と知り合えて、友だちになれることが楽しく感じています。そしてなにより、陸上を続けられることがとてもうれしいです。

陸上につつと打ち込んで、小高工業高校に入ってから大好きな先輩とリレーをすることが夢のひとつでした。その夢は叶

いませんでしたが、次の新しい夢をもって部活に励んでいます。

石川県の実家にいたときに、両親から石川の星稜高校へ入ることを勧められました。「福島に帰りたい。」との気持ちが強く、こちらに来ることになりました。やっぱり、福島にいると落ち着きます。

浪江町の風景、自分の家が懐かしく思います。一番好きなのは、自分の部屋から見える大きないちょうの木です。この季節は紅葉してとてもきれいで、見ているだけで癒されます。

毎年、元旦は初日の出を見に請戸海岸まで行って行きました。早朝に1時間かけて行って、体がかじかむほど寒かったですが、その景色を友だちと一緒に見るのがとても好きでした。

学校の近くの「いどがわ商店」も思い出深いです。よく帰りに、友だちと一緒に立ち寄っていました。

思い出す度に「町に帰りたい」と感じます。

今は、地元に戻れなくてつらいですけど、いつか帰れる日に向けてがんばりましょう。



▲ふるさとを思い出すたびに帰りたいと思います



京都府

## 吉田 忠春さん・輝子さん(室原)

取材者：きょうとNPOセンター 田口

取材日：10月19日 「平成23年12月 広報なみえ掲載」

### 「あの時(3月11日)を想う!! 笑顔と希望を忘れずに」

<吉田輝子さんの手記より>

吉田さんは、ご家族とご親戚総勢23人で、2日をかけて義姉の旦那さまの弟さんを頼りに、京都に避難して来られました。寝たきりの84才の母(以下「おばあちゃん」)と5カ月のお孫さんも一緒でした。現在、京都のアパートで、息子さんご家族と一緒に生活されています。



▲吉田忠春さんと輝子さん

3月15日、家族・兄弟みんなが集まる中、決断をしました。「親戚のいる京都へ、一緒に行こう」。

吹雪の中、新潟まわりで北陸道を通り、5台の車で移動。ひどい渋滞でした。ガソリンはすぐ無くなり、少しずつみんなに分け合って補給しました。おばあちゃんは、酸素ボンベの充電が切れると、命がつかない…。電気補給にも必死でした。

京都に来てからは、親戚のみならず、自治会長さんをはじめ、周りの方にとってもよくしてもらっています。

おばあちゃん介護(病院での付き添い)を中心に、毎日を送っています。おばあちゃんと孫たちの存在が私たち家族をつなげてくれていると感謝しています。

私は百姓だから体を動かして仕事をしたいです。草刈りでもなんでもしたいと思っていますが、今は事情があつて仕事ができず、家族のために網戸をつくつたりもしています。

室原の自然クラブのメンバーと一緒に、休耕地が荒れないようにとひまわりやコスモスを植えていたことも懐かしい。お酒を酌み交わした仲間たちのことをよく思い出します。遠く離れていても連絡を取り合える仲間がいることは心強い。一方で、家族以外の人とゆっくり話ができない今、寂しい気持ちにもなります。やっぱり浪江へ帰りたい。帰ることは難しいこともわかってはいます。でも、いざれ福島県内には戻ることができたらと思っています。



▲休耕地に咲くコスモス

あきらめてはいけません。命ある限り、生きていきます。お世話になった恩返しをしながら。優しくされたら、優しく返すもの。私たちは、たくさんありがとうございます。私たちが、たくさんありがとうございます。家族が離れず一緒にいられたことが本当にありがたい。出会えた方々、友だちに「ありがとう!」を伝えたい。

みんな、身体に気をつけて。元気な姿で会いましょう!



## 荒川 勝己さん(請戸)

取材者：(特活)岩崎NPO 高橋

取材日：11月9日「平成23年12月 広報なみえ掲載」

### 帰りたいくても、帰れない

地震があって、津波が来て、逃げて。その翌々日の13日、荒川さんは妻と一人娘と3人で、妻の実家である秋田県湯沢市岩崎地区へ“緊急避難”し、現在、妻と2人で近くのスーパーストアで“接客サービス”をこなしている。

最初のうちは、妻と娘をこちらに預けて、自分は災害復興で戻ろうかという気持ちだった。しかし、原発の放射能で入ることができなかった。そんなこんなうちに、こちらで仕事が見つかったので…。今のところ仕事があって、収入もあるし、お父さんの所で一緒に住む場所もある。現在困っていることは特別にない。一番の時に戻れば、人命救助なり災害復興なりで入りたかったけど…。

もともと米とお花の専業農家だった。それだけでは食えないので、コンビニや電気屋でバイトしていた。だから、接客ということに関してはそん



▲職場の休憩時間での荒川さん

なに困ることはない。農業はひとりでの作業だが、接客の仕事はみんなとできるので、むしろ楽しいくらい。

田んぼは9割方小作だが、去年の作付けが6町5反。花は300坪ぐらい。津波で家、田んぼ、花畑、何もかも全部やられて、何も残っていない。

線量の少ないところから帰してくれるという話が今出ているようだ。原発の場所は家から4キロあるが、私の所は線量が非常に少なく、こちら辺と大した変わらない。が、帰れと言われても帰れないです。町の基盤も、家も、仕事もないから。

浪江の仲間、みんなが元気でまた会えればいいなあといつも思っています。



福島県内からの投稿

## 原田 富子さん(高瀬)

「平成23年12月 広報なみえ掲載」

### あの日 あの時 そして今

現在原田さんは、福島市内の借上げ住宅で避難生活を送っています。

平成23年3月11日、12日、この世の出来事とは思えない惨事があった。3月12日早朝、菅首相の命令で即刻避難するように…着の身着のまま、急いで家族5人車に乗った。指定された避難場所津島の体育館へと向かい、10分ほど走ると道路という道路は車、車、車…。いつ目的地に着けるやら。普段なら30分で行ける場所へ5時間余りかかってようやく着いた体育館の中は、人であふれていた。やっとのことで片隅に座ることができホットするとそれもつかの間、同日午後3時半、原発で水素爆発があり、一斉に車に飛び乗り体育館を後にした。

私たちは幸いにも福島市の庭坂に二男が住んでいたのそこへ避難した。その夜は、親戚等が次々避難してきて、20人ほどで一夜を過ごした。13日

の朝になって親戚の人たちもそれぞれの知人を頼って、庭坂を後にした。私たちは、二男の家で1カ月ほど世話になり、その後指定された宿へ行き、4回ほど引っ越して、今は借上げ住宅で暮らしている。

知らない土地、知らない人たち…。でも、みんな、みんな親切に声をかけてくださって、本当にありがたい。

それでも、80年浜通りに生きてきた私たちには、気候をはじめ、あれもこれも数え上げればきりが無い不自由なことばかり。

でも、仕方がない。あれこれ気に病んでも解決できない問題なのだから。

せめて、これから残された人生、ほんのひとときでもいいから、安らぎの時間がもてたらと、毎晩祈っています。



## 大内 善一さん・ひとみさん(権現堂)

取材者：地域社会デザイン・ラボ 遠藤

取材日：11月19日 「平成23年12月 広報なみえ掲載」

### 浪江町のコミュニティを仙台で

5月6日に仙台駅近くで「仙台中央接骨院・大内鍼灸院」を開業された大内夫妻。

現在は、地域になじめるように、そしてお客さまが気持ちよく訪れていただけるように、一人ひとりとのコミュニケーションを大切にしながら暮らしている。



▲接骨院の正面入り口にて。ブログも見てね！

<http://blogs.yahoo.co.jp/ouzen3914>

震災時は、ちょうど午後の診察中でした。患者さんにご自宅へお帰りいただきたいたと思っただけで、骨折された方が来院。素早く患部を固定し松葉杖をお渡しして「津波が来るだろうから逃げよう。」とその場を後にしました。その日の夜は、高台に住む親戚の農家のビニールハウスで過ごしました。その後は、津島中学校、さらには福島市の姉の家に避難。その後、息子が4月から学校に通うため契約して

いたアパートがある名取市に移動。働きたいという気持ちと腕をなまらせたくないという思いで、名取市文化会館でマツサージのボランティア活動を4月まで続けました。

その後は、接骨院の恩師に仙台市若林区の現在の物件を紹介され、迷う間もなく開業を決断しました。引っ越しは5月1日。私たちがらしい素敵な雰囲気になるように部屋の模様替えをしたり、忙しかったですね。そして何とか6日には開業することができました。その後は、近隣のお店や住宅約300件を訪問し引っ越しのあいさつ。顔を覚えていただくために、ちよつとした声かけを心がける毎日でした。少しづつ応援してくれる仙台の方が増えたり、テレビで取り上げていただいたお陰で今は忙しくさせていただいています。

接骨院が休みの日は、夫婦で自転車に乗り仙台市内各地に出かけます。「まち歩き」ですね。仙台は知らない場所ばかり。患者さんがいらっしやるエリアが分からないと、接骨院までの道案内もできません。だからこそ、

勧めていただいた場所はなるべく訪れるようにしています。そうすると、その後会話が深まり楽しいです。

これから取り組みたいと思っているのは「浪江町仙台支部」を作ること。浪江町出身者やゆかりのある人が仙台近郊にいらっしやるのが分かりました。今後は、この皆さんと食事会や交流会を開催して交流を深めたいですね。そして、通信やかわら版のようなものを作成して皆さんに配布したり。できたら全国各地に「浪江町〇〇支部」ができるというふうに考えているところです。これからも今ある環境や人々とうまくやれるように努力し、患者さんに元気になってもらえるように自分も前向きで元気にありたいと思っています。



## 今野 昇さん(津島)

取材者：高崎経済大学櫻井研究室 櫻井・山本・小根山

取材日：11月19日 「平成23年12月 広報なみえ掲載」

### 遠くにも浪江の復興を心から支えていきたい

津島でガソリンスタンドを営んでいた今野さん。地震後は、浪江の避難所でボランティアとして1カ月ほど頑張っていたが、4月上旬に現在の東京都町田市に妻、長男（小学5年生）と3人で移り住み、新たな生活を送っている。



震災直後は、すぐに事業を再開できると考えていました。しかし、原発事故が甚大だと知り、町民の皆さんと一緒に二本松市の東和に避難しました。何かの役に立てればと3週間余り、避難所のボランティアに協力させていただきました。しかし、生活の糧と息子の今後を考え、町田市に移りました。幸いにして友人が仕事を紹介してくれましたが、現在は来年春までの契約社員です。これまでとはまったく異なる業種ですが、幸いにして今までの趣味が役立つ何か頑張っています。こちらでは被災者ではあっても、それに甘えることなく、自分たちの力で乗り越えなくてはいけないことを

実感しています。日々の生活の中で被災者優遇など、何もないのですから。

浪江を離れて暮らしていると、同じ福島県からの避難者であるのに、市町村によって対応が異なることが気になっています。甲状腺の検査などでも連絡をいただきますが、正直、そのために福島まで戻るとは負担にもなります。新しい土地になかなか馴染めず、仕事が見つからないだけでなく、話し相手もいない方がいるようです。例えば、県外それぞれの避難先で、福島県からの避難者のまとまった窓口をつくり、生活の課題を把握したり、福島県避難者のための働く場の確保を行うなどの工夫

があってもいいと思います。避難生活の長期化の中で、ぜひ考えていただきたいです。

一時帰宅で荒れ果てた津島の風景を見るたび、以前の津島を取り戻すことは並みの努力ではできないと痛感しています。むしろ、あきらめる方が多いのではないかと絶望感に駆られます。

でも、テレビで商工会青年部が頑張っている様子を見るたびに勇気をもらいます。同時に、皆さんがこんなにも頑張っているのに、自分たちが何も協力できないことにもどかしさを感じます。祖父の代から地域の皆さんに支えられ給油所を経営してきたのにもかかわらず、何も皆さんにあいさつもできずに浪江を去ったことに、むしろ仲間たちを裏切ったような罪悪感と悲しさを覚えることもあります。でも、決してそうではない。私も浪江に帰って、昔の連中と頑張りたい。そんな苦しい思いを妻とよく話しています。いつか浪江の皆さんと会える日が来ることを信じて、遠くからではあります。浪江町の復興を支えていきたいと思っています。



## 山田 拓司さん・乃里恵さん(加倉)

取材者：ピースバンクいしかわ 谷内

取材日：10月23日 「平成23年12月 広報なみえ掲載」

### もう一度みんなで集まってバレーでもやりたい

系列工場への転勤の形で避難をしてきて、石川県金沢市の市営住宅で暮らし始めて8カ月が経つ、山田さんご夫妻と3人のお子さんたちのご様子を伺いました。

#### ■拓司さん

福島で勤めていた系列の工場がこちらにもあり、震災から1週間位で会社から社員全員転勤の辞令が出たと連絡がありました。転勤と言っても状況が状況なので家族と話し合っただけで決めた。転勤と言ったことでした。私は双葉町の工業団地に勤めていて工場の復旧は困難と思い、妻とも相談しこちらに来ることにしました。

会社に行けば福島から来た同僚がいるので少しだけ福島の雰囲気があります。子どもたちもすっかりこちらの生活に慣れただちもできました。妻が勤めていた会社は原発事故により規模を縮小したため解雇されましたので、今は金沢での仕事を探しています。

今会いたいのは、芸能保存会の仲間です。神社の祭りの際、神楽を奉納したり盆踊りのときに太鼓を叩いたり、すごく懐かしいですね。その中でもすごくお世話になった人に今、会いたいです。その方に「このままでいい収入もないし、こういうわけで石川県に行こうと思う。」

とメールしたんです。そしたら「寂しくなるけどきつとまた会えるよ。」ってその一文だけの返信メールが返ってきて……。なんかそのときはすごく抑えきれないものがありました。本当なら今ごろの時期は、お正月に奉納する神楽の練習をしているところなんですけど。みんなに会える日を楽しみにしています。

それから、地元のバレークラブの仲間にも会いたいです。試合の勝ち負けは別として、とても楽しいチームでした。その中でも、ひとつ下の後輩がいて、いろいろと自分のサポートをしてくれてすごく助けられました。震災があつてから、連絡はとれたんですけど、まだ一度も会えていないんです。仕事が忙しいらしく、この前、帰ったときも時間が合わずに会えませんでした。もう一度みんなで集まってバレーでもやりたいですね。

#### ■乃里恵さん

やっぱり帰れたら、今まで通りの生活をしたいですよね。おじいちゃん、おばあちゃんもいて、子どもたちも寂しくないだ

ろうし。以前は一緒に住んでいたの、一番上の子は幼稚園に行つて、下の子2人はおじいちゃん、おばあちゃんに見てもらっていたんです。今でもおじいちゃん、おばあちゃんに会いたいです。おばあちゃんに会いたいですね。



▲(右から) 山田拓司さん、湮世くん(4歳)、乃里恵さん、玄琉くん(1歳)、真生くん(3歳)



福島県

## 長岡 新一さん・仁子さん(苧宿)

取材者：(特活) 市民公益活動パートナーズ 佐藤

取材日：11月10日 「平成23年12月 広報なみえ掲載」

### 今、一番の思いは 「浪江に帰りたい。必ず浪江に帰る。」

浪江町苧宿で農業を営んでいました。今は、福島市大森の借上げ住宅の息子家族が住む上階に住んでいます。



▲金婚式を迎えた、笑顔がすてきな長岡さんご夫妻

と、言うに言われぬ感慨があります。田に苗を植え稲を刈り米を作り、畑を耕し種を蒔いて野菜を作り……。浪江という土に生きて、土から恵みを得て、今思うと自然の厳しさと豊かさに育まれて、夫婦つつがなくよく生きてきたものだと思います。生まれ育った土地だから、代々受け継いできた土地だからと作物を作ってきました。今の一番の思いは「浪江に帰りたい。必ず浪江に帰る。」です。自身を奮い立たせるように、強く思っています。

震災時、私は自分の田んぼでトラクターを運転中でした。妻は棚塩公民館で、「武扇会」結成30周年記念発表会に向け、踊

先ごろ、地

元県内新聞に「金婚式を迎えた夫婦」として、大きな写真入りで取り上げていただきました。家族の無事をかみしめつつ、これまでの50年と震災後の8カ月を思う

りを教えていました。妻は津波の情報も知ることなく、練習を切り上げ何とか帰宅、その後棚塩公民館が津波で変わり果てた姿となったのを見たときは、背筋が凍る思いでした。県内外の避難所や親戚宅を転々として、土湯温泉の旅館を後に、ここ福島市大森の借上げ住宅に落ち着きました。仮設住宅に比べると情報が入りにくく、孤立感を感じることもありますが、この借上げ住宅の上下階で、前後して息子家族も住むようになり、心強く思っています。

あれから8カ月、どうにか心も体も落ち着いてきました。今後は、私は近くに畑を借りて作物を作ってみたいと思っています。できれば農業をやっていた苧宿地区の仲間と、協同でまたった畑が借りられたらと思っています。自分で作った野菜を食べたり、浪江町の友人知人に食べさせたいと思います。

妻は、各地に散らばったお弟子さんたちと福島市芸能祭で相馬流れ山を踊るなど、津波で流されてしまった衣装のやりくりをしながら、浪江町相馬流れ山踊り保存会再興のため、そして武扇会結成30周年記念発表会を

実現すべく、今は絆づくり、健康づくりとして定期的に集まって踊ろうと思っています。

例年なら、今ごろは鮭が上がってくるころ、緑豊かな浪江町。一時帰宅で、雑草で覆われた自宅を見ると、荒れ果てた町を目にすると、心折れそうになりますが、3年後には「浪江に帰りたい。必ず浪江に帰る。」の思いで、次のエメラルド婚式(結婚55年目)は浪江町で迎えたいと、前を向いていきたいと思っています。



▲踊り「武扇会」師匠である仁子さん。「相馬流れ山」を福島市芸能祭で各避難先から駆け付けたお弟子さんたちと披露





## 原中 正義さん(田尻)

取材者：元気玉プロジェクト実行委員会 江川

取材日：11月19日 「平成23年12月 広報なみえ掲載」

### 出口はまだ見えないが、助け合って やっていく以外、方法はない

田尻地区区長である原中さんは、地域でともに暮らしてきた皆さんに「伝えたいこと」を抱えていました。田尻地区としての今後の行政について。田尻の地で再び力を結集できることを願って、今できることから活動に取り組まれています。



震災直後は伊達市の親戚宅にお世話になっていましたが、3号機の爆発後、喜多方市へ避難し、現在は家族で市内の借上げ住宅に入居しています。避難直後のストレスから体調を崩した母も、ようやく生活のペースをつかみかけてきたようです。とはいえ、地元の方から「会津の冬は経験してみたいと、わがんながらなし」といった言葉を耳にするなど、いまだ先行きの不安は消えません。それとともに、温暖で穏やかな浪江での生活がつくづく懐かしく思い出されま

す。  
田尻地区は、3月に期末監査

と総会を控えていましたが、直前の11日に思ってもみなかった大震災に見舞われ、以来、業務はストップしてしまいました。役員の皆さんに集まっていたことができず、生活がようやく落ち着いてきた8月末。27日に二本松市の男女共生センターで平成22年度の期末監査を行い、次いで第1回役員会も開きました。その協議の結果、当面の方向性が決定したので報告させていただきます。

第一、田尻行政区の「役員」は、平成22年度末をもって改選時期だったが、行政区住民を招集して総会を開催することは現状困難であるため、全役員が引き続きその職にとどまり、行政区財産の管理および必要な事項を処理することとする。

第二、「大字費」については徴収しない。

第三、「役員その他の報酬」については支給しない。

第四、浪江町で計画する復興計画等に要請があった場合は全面的に協力する。

第五、事故収束後の早期帰宅を目指し、田尻地区民の現状把

握に努める。以上です。

一時帰宅で目にした故郷の荒れた姿は、何とも情けなく、もどかしさを感じました。自宅復帰を果たすには原発事故の早期収束が前提になりますが、避難解除になれば、この先、地域としてやるべきことは山のように出てくるはず。

一方で、今現在、借上げ住宅や仮設住宅に入居していても、生活上の問題はひっきりなしに発生し、どこまでいっても出口はなかなか見えてきません。当面、助け合ってやっていく以外方法はないのだと思います。

これまで田尻地区の皆さんと連絡を取る方法がなく、困ってしまいました。今回、このように「広報なみえ」「浪江のこころ通信」を通じて、田尻行政区の情報もお伝えできたこと、感謝しています。皆さん、今どのように過ごされているのでしょうか。この難局を乗り越え、田尻の地で、また皆さんと元気に会いたいです。その日がくることを切望しています。



福島県

## 石井あかねさん(小5)(棚塩)

取材者：(特活) 市民公益活動パートナーズ 松田

取材日：11月14日 「平成23年12月 広報なみえ掲載」

### 「うちでのんびりしたいなあ」

仮設住宅の向かいにある佐原小学校は定員一杯になっているので、毎日スクールバスで少し離れた荒井小学校まで通っている小学5年生。

初めは浪江町の津島に避難し、二本松市や福島市土湯温泉町を経て7月末に福島市佐原の仮設住宅に引っ越ししてきました。

お父さんとお母さん、弟の京輔<sup>けいすけ</sup>くん(小3)と妹のあゆみちゃん(小1)の5人暮らしで、おばあちゃんたちも同じ仮設住宅の別棟に避難しているので、いつでも会いに行けるそうです。

#### ■みんな元気にしてるかな？

学校は弟と妹も一緒に、毎日12人でバスに乗ります。しのぶ台からも同じくらいの人数が乗って、みんなで通っています。バスの中では、トランプなどのゲームをしたり、本を読んだりしているから、けっこう楽しいですよ。友だちもたくさんできて学校も楽しいけど、女子のチームがないので浪江でやっていたソフトボールができないのがちょっと残念かなあ。

走るの、どっちかという短距離よりも長距離の方が好きで、練習のときには6年生と一緒に走って4位だったので、学校の記録会でどんな記録が出せるか楽しみです。

最近、算数が好きになってきました。それから国語とかも好きです。将来は、お医者さんのような人を助ける仕事につければ良いなあと思っています。

3月の地震のときは、ちょうど5校時目が終わるところで、4月から幾世橋小学校の1年生になる妹にあげるプレゼントを作っていました。

最初は、「小さな地震かな？」と思っただけで、けっこう大きな地震だったので驚きました。自  
まわりでは泣く子もいて、自

分は泣かなかったけどボウゼンとしていました。

みんなで校庭に避難して家からの迎えを待っているときに、寒くてジャンパーを取りに教室に戻って、また校庭で待っていました。

浪江の友だちにも会いたいけど、近くに避難している人もあんまり連絡できないし、遠く県外に行っちゃった人もいるから、なかなか会えないですよ。友だちと「サンプラザ」で、鉛筆のかわいいものやいろんなアクセサリーを買うのが楽しかったですけど、こんなじゃちよつと難しいなあ…。

#### ■寒いのは苦手だけど、仮設で元気にしているよ

9月からは放射線の線量計が渡されたので毎日つけています。体育のとき以外はちゃんと遊んでいますよ。でも休みの日に遊びに出かけるときは、ときどき忘れることもありそうですよね。これから冬になると、寒くなるのが苦手。

スキーとかは全然やったことがありません。浪江ではあまり雪が降らないので、どうしようかなあと考えているところ。学校に行くときは、寒くない

ようにジャンパーも持って行っているけど、雪が降ったら雪合戦をしたり雪だるまがつくれるかな。

仮設住宅では、弟や妹と仲良くしていますよ。ちよつとケンカもするけど、妹には優しくするようがんばっています。

でも、部屋が狭くて、近所の迷惑にもなるから大きな声が出せないの、早く浪江のうちに帰りたいなあ。

うちに帰ったら、地震ですごくいいことになってるので片づけをして、ゆつくりしたいです。



▲仮設住宅の部屋で  
(仲よし3姉弟 (右:あかねさん、中:あゆみちゃん、左:京輔くん))



神奈川県

## 金澤 <sup>れな</sup>麗奈さん(請戸)

取材者：高崎経済大学櫻井研究室 櫻井・山本・小根山

取材日：11月19日 「平成23年12月 広報なみえ掲載」

### 津波で亡くなった祖父、友人の思いを胸に頑張っていきたい

麗奈さんは、震災後、親戚何人かで福島県内から埼玉、神奈川へと転々と移動し、5月初めに現在の川崎市宮前区にお母さんとおばあちゃんと3人で暮らしている。現在は、家族と支え合いながら、転校した中学校で元気に頑張っている。

私は、友だちの家で遊んでいたときに、あの地震にありました。中学校のグラウンドに逃げたあと、役場に無事避難することができました。友人の大浦清華ちゃんが、この地震で亡くなったことが本当に悲しいです。あの日、もし一緒に遊んでいたら無事でいられたのではないかと悔やまれて仕方ありません。私のおじいちゃんは、地震のとき、親戚の初七日で双葉町郡山に出かけていました。慌てておばあちゃんと一緒に請戸の自宅に戻



▲(左から) 麗奈さんと祖母のナカさん

ると地域の皆さんは避難していたようで、すぐに津波が来ました。おじいちゃんは、私が部屋にいたと思って2階にあがったようです。玄関口にいたおばあちゃんは押し寄せてくる津波を見て、通りがかりの車に助けられました。おじいちゃんを残したまま逃げたことを悔やんでいるおばあちゃんを見てると、どんなにかつらい気持ちかとかわいそうでなりません。話し相手もなくマンションの中に一人でいるおばあちゃんは、浪江の皆さんと請戸のなまり言葉で話したいといつも言っています。家では私に元気に話しかけてくれるおばあちゃんですが、一人で寂しそうにしていることが気がかりで、以前のように請戸の人たちが周りにいたら、もっと元気でいられるのと思います。お母さんは、避難生活の中で体調を崩し入院したり、今もときどきため息をつきながら私に話しかけることが多いです。毎日の生活や仕事の中でストレスを抱えているのではないかと心配です。

私は今の中学校で、仲のよい

友だちもできて楽しく通っています。8月には、私も所属している浪江のよさこい踊りのチーム「Wonderなみえ」が、高知のサマースクールに招待され、1週間本場のよさこいに参加しながらみんなと過ごしました。やっぱり浪江の友だちに会うことは何よりもうれしいです。私は、なみえ焼そばを応援するユニット「N.Y.T.S」にも所属していて、イベントなどでみんなと活動していたことが懐かしいです。亡くなったおじいちゃんは、短歌や川柳、民謡を歌うことが好きで、郷土を思い請戸の民謡を作ってCDにしたり、仲間と「民謡バンド」を組んで活動していました。私もおじいちゃんに似たのか、音楽や人前で歌うことが大好きです。

将来はアニメの声優をめざして頑張りたいです。いつか必ず浪江町に戻りたい。仲の良かった友だちと一緒に遊んで、前のように暮らせる日がくることを待っています。



福島県

## 小山 恒雄さん(高瀬)

取材者：ビーンズふくしま 味川

取材日：11月11日 「平成23年12月 広報なみえ掲載」

### 再び会える日を心待ちにして

二本松市の借上げ住宅で避難生活を送っている小山さん。「故郷を離れて8カ月。浪江にまた帰りたいたいという気持ちは強くなります。」

今は、二本松の借り上げ住宅に住んでいます。8畳2間。前の生活と違って不便・不自由もありますが、それも言っていない。昔は学校とか町の活動がありました。今は何もなく、人との交流もありません。役場に行けば人に会うことができますが、普段の暮らしの中で交流がないのが寂しいです。退職後、ゴルフが唯一の趣味でした。地震にあったのもその帰り道。あと10分、その道を通るのがずれていたら、津波にあっていたかもしれないと言われませんでした。

浪江町は、自然がいっぱい美しいふるさとです。緑が多く海あり山ありで、町をはさんで二つの川が流れ、鮭が遡上していきます。大堀相馬焼とか昔ながらの伝統工芸も盛んで、落ち着いた雰囲気誇れる町です。

先日、「ふるさとに戻りたい73%」「戻らない27%」という双葉郡住民の調査結果が報道されました。原子力発電所の廃炉まで30年と言いますが、私たちは10年がいいところですよ(笑)。放射能は怖いけど、浪江町に帰

りたいという気持ちの方が強いんです。

浪江町にもどることができたら、まず今までおつきあいのあったたくさんの方々一人一人に会いたい。そして、ゴルフもしたいです。元々親睦のあった方とは現在も月に一度会って親睦を深めています。数人の親戚とは電話のみで、震災後まだ一度も会っていません。早く浪江に戻れる日が来てほしいです。

今一番期待しているのは、科学の力。除染の方向にもっと進歩してほしいと思っています。散布すると放射能が消えてしまう。というようなものをつくってほしいです。そういうことには、いくらお金を使ってもいい。これから30年は長すぎます。ラジウムの発見から110年。放射能を消去するような新しい物質の発見を期待します。

今後の要望は：風評被害をなんとかしてほしいと思います。気持ちは分かりますが、そういったもののほとんどは、無知からくるものだと思います。地域で開催される懇談会でも参加者の怒りの声がよく聞かれます。

でも、役場の人も頑張っています。私は今できることから、そして皆で力を合わせ前向きにやってほしいと思っています。



▲(左から) 恒雄さんと奥さまのセツ子さん



広島県

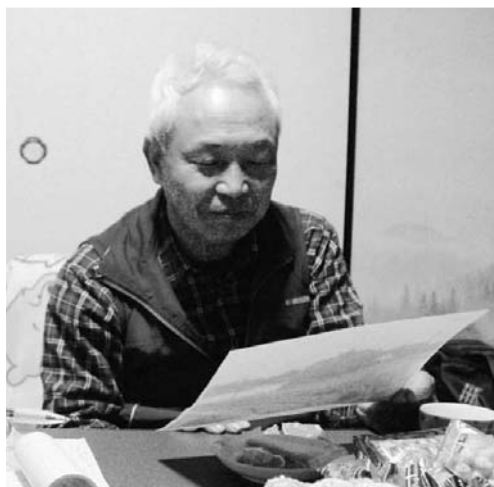
## 高田 秀光さん(室原)

取材者：ひろしま市民活動ネットワーク HEART to HEART 竹内・小川

取材日：11月23日 「平成24年1月 広報なみえ掲載」

### 離れて暮らせど、心はいつも浪江にあり

浪江町室原に7人家族でお住まいだった高田さんご夫婦は、現在、東広島市志和町在住。息子さん夫婦と孫2人は広島市内、おばあちゃんは東京と離れて暮らす。志和町では田畑を借り、来春からの農業再開を目指して、働きながら有機栽培による野菜作りを学んでいる。



▲一時帰宅時の自宅写真を見入る高田さん

#### ■7人家族は県外避難

震災当日、仕事をしていたら地震がきました。すぐに高台の墓地へ避難しました。幸い自宅は海から8km離れていて、津波からは逃れることができました。その後は体育館へ避難し、当日の夜は電気もない体育館で家族みんな過ごしました。「地震が収まれば、1〜2日間ぐらいですぐに自宅に戻る。」と軽い気持ちでいました。ところが、息子の友人が東電に勤めていて、電話で（原発が）危ないっていうんです。体育館にはテレビもラジオもなかったから、周りの誰もそんな話を信じませんでしたし

た。12日午後3時半過ぎに原発が（水素）爆発したとの話を聞いて、息子夫婦は2人の子どもの健康を考えて、先に福島を離れました。嫁いだ娘のいる広島へ。私たち夫婦もその後広島へ、ばあちゃんは私の兄弟が住む東京へ行きました。でも今度、ばあちゃんもこちらで一緒に暮らそうと思っています。息子は広島市内で就職し、ときどき孫たちの顔も見えています。

#### ■広島でも白ネギを！

広島へ来てからは、田畑のある家を探しました。浪江では、早期退職後、専業で白ネギやインドキュウリなどいろんな野菜を栽培していました。特に白ネギは人気があつたし、これからいうときに震災に遭つたというときもあつて、広島でも野菜を作ろうと思つたんです。いろいろな方から田畑を紹介いただきながら、あちこち探し回って見つけたのが、ここ志和町。なだらかな山の景色や川との風景がとても良く、米と水もおいしくて、とてもいい所です。今は、東広島市内にある農業法人で働きながら、来春からの野菜

作りに備えています。機械も手に入りしました。福島県人会の集いに参加したことで、野菜の有機栽培の情報が入手できたので、有機栽培でやってみようと思っています。

#### ■今、思うこと

震災後のこの8カ月は長かったです。これまでに2度の一時帰宅をしましたが、2度目に戻ったときには、茎の太くなった雑草が生い茂っていました。広島では（広島市の）社協さんが被災者交流会を開催してくれて、被災者同士で顔を合わせて話もでき、連絡も取れるようになりましたが、最近はおかけできません。支援はありがたいけど、支援ばかり受けていても自立できないから。自立するためにも何とか野菜づくりを軌道に乗せたいと思います。野菜づくりは少しずつできていくと思うけど、ずっと居ると部落民の名前を忘れそうになります。でも、浪江のことは頭から離れません。共助会のみんな、毎年の新年会、そして2年毎の花見はみんなできやります。ぜひやりましよう！



山形県

# 今野 <sup>せな</sup>瀬楠さん(小6)・<sup>しゅうや</sup>秀哉くん(小4)(川添)

取材者：NPO法人山形の公益活動を応援する会・アミル 柴田  
取材日：12月6日 「平成24年1月 広報なみえ掲載」

## 今度会うときは元気で会おうね

今野さんご一家は4人家族。現在、お父さんは二本松市に単身赴任中。お母さん、瀬楠さん、秀哉くんはお母さんの実家のある山形県大江町でおじいちゃんおばあちゃんと一緒に暮らしています。

### ■瀬楠さんの話

今は、本郷東小学校という学校にバスで通っています。前の学校よりもクラスの人数が少ないですが、先生も友だちのように接してくれて楽しく通っています。友だちのお家へもバスで遊びにいくのですが、バスが2時間に1本しかないので乗り遅れると大変です。浪江では「サンプラザ」に友だちや家族と買い物に行つて遊んでいたのですが、今は近くにお店が全然ないので不便です。

お父さんは、二本松市で仕事をしていて月2回くらいしか会えないのですが、お母さん、おじいちゃんおばあちゃんが近くに来てくれて、いとも遊びにくるので寂しくありません。お父さんとはときどき電話で話しています。帰ってきたときは、オセロを一緒にしたり、買い物や遊びに行くのが楽しみです。

地震の後、仲の良かった友だちとばらばらになっちゃったけど、この前福島市と二本松市の仮設住宅で暮らしている友だちに久しぶりに会えてとてもうれしかったです。浪江小学校の先

生も手紙やスキー合宿のときの写真を送ってくれました。先生、ありがとうございました。浪江に戻ったら前のように、一緒にゲームをしたり、みんなで買い物に行ったり、また友だちと遊びたいし、浪江のおいしいくらやお寿司も食べたいです。今度会ったときは、みんな元気で会いたいです。

### ■秀哉くんの話

地震が起きたとき、小学校にいて帰りの会をしました。すぐにグラウンドに避難しました。泣いている子もいたり怖がっている子もいたりしたけど、お母さんがすぐに迎えにきてくれて安心しました。

今一番楽しいのは、友だちと遊んでいるときやお父さんが帰ってきたときに家族で出かけることです。今は近所の友だちのお家から自転車で行って遊んだり、外で遊んだりすることがおもしろいです。これから山形は雪が積もるので大変だけど、雪だるまが作ればうれしいです。友だちと冬休みは雪で遊ぼうって約束しています。最近、山形

の方言にも慣れて自分も話せるようになりました。

浪江町のお祭りといえばたくさんのお屋台が出る「十日市祭」が懐かしいです。なみえ焼きそばもまた食べたいなあ。あと、請戸港の鮭をとるところを見学に行つたことも思い出です。この前、仙台にいる友だちに会うことができて、とても元気になりました。まだ会ってない友だちもいるので元気かどうか知りたい。また一緒に遊びたいです。



▲大江町のお母さんの実家にて (左：瀬楠さん 右：秀哉くん)



秋田県

## 阿久津雅信さん(権現堂)

取材者：NPO法人あきたパートナーシップ 高杉

取材日：11月24日 「平成24年1月 広報なみえ掲載」

### みんなであた一緒に暮らしたい

大地震が起きたときはばらばらになっていた家族も、なんとか中央公園などに一時避難することができ、その後、なかなか見えない状況に不安感を抱きながらも、とにかく家族一緒に北へ北へと避難。今は、阿久津さんも奥さんも職を得て希望を持って暮らしています。



▲新しい職場での阿久津さん

地震は、この世の終わりかと思うぐらい揺れたよ。自分は西台の現場でエアコンの仕事をしてたし、妻と息子は自宅、娘は友人宅とばらばらでした。中央公園に避難したということを確認はできたけれど、父は店の確認などでんやわんや。そうこうするうちに大津波警報がでて、とにかく山のほうに避難するようにということだったので、高台グラウンドに行き、そこで夜までいて、それから浪江中学校の体育館に移動しました。朝方、

警察が来て総理大臣の命令により「原発から20km以内は、避難してください。」と言われ、今度は津島地区の活性化センターに避難したんです。そこには新潟からの救援物資が届いていて、その素早さには感激でした。私も交通整理などを手伝いしていると午後3時くらいかな？原発の爆発による煙らしきものを見つければ、テレビのニュースを確認すると原発が爆発していました。

「放射能は大丈夫なのか？」知識がほとんどない自分は、とにかく家族を連れさらに遠くに逃げるしかないよ、とりあえず福島を目指しました。ガソリン不足、スーパーは物不足とあって、どこに行くあてがあつたわけではないので福島の駅裏で一泊、競馬場で一泊、さらに山形県の米沢のホテルに3泊と転々しました。

聞いてください！こんな大変な状況の中でも肘折温泉（山形県）で5日間いたときにね、当時1歳の息子がはじめて歩いたんですよ。本当にうれしかったです。

山形に避難中に由利本荘市の同業者から連絡があり、その方

の紹介で由利本荘市の「ぼぼろっこ」というところに滞在しました。ここには由利本荘市のおかげで無料で滞在できました。その後、住む場所も確保できたので、家族7人で暮らしています。

浪江町は、いいところですよ。山も海も川もあり、コンパクトで生活するにはちょうどいい大きさの町で、気候的にも暮らしやすいです。

由利本荘市では皆さん良くてくださるし、食に関する活動のつながりの知人もいるので楽しく暮らすことができます。だからといって、町を捨てたわけじゃない。今まで一緒に暮らしてきた町の人と一緒に暮らすところがあれば、最高ですね。同窓生たちもどうしているのか気になっていますしね。



新潟県

## 栃本 信重さん(立野)

取材者：中越沖復興支援ネットワーク 水戸部

取材日：12月6日 「平成24年1月 広報なみえ掲載」

### 戻れるものなら明日にでも 戻りたい気持ちです

浪江町でガス屋さん勤務していた栃本さんは、被災直後から町内のボンベの点検等に奔走した。12日には南相馬市小高区にある金房小学校に避難をはじめ、その後各地の避難所を転々としたのち、新潟県に避難した。

11日の夜、倒れたガスボンベの確認等の仕事を終えて家に着いたのは午後8時ごろでした。家には富岡町に住む次男と、妻と孫がいました。被災時に浪江町にいた次男が家にいてくれたことは、今考えると非常に助かりましたし、安心できました。電気は使えませんが、ガスが使えたので次の日の朝はご飯を食べることもできました。その後すぐに避難指示の放送が



▲現在は妻と孫の3人で暮らしています。  
(左から信重さん、楓ちゃん、操さん)

流れ、家族で南相馬市小高区の小房小学校に避難をしました。小学校は多くの避難者であふれかえっていたことを思い出し、その後、原町区の石神中学校に移り、17日には新潟県に向かっていた。次男が先に柏崎市に避難していたので、避難所の情報なども聞くことができ、柏崎市の中央コミュニティセンターに避難することになりました。私の妹が柏崎市に住んでいることもあり、布団や毛布を集めてもらったり色々とお助けしました。その後、市内の総合体育館、民宿を経由して、現在は市内のアパートに妻の操と孫の楓と3人で暮らしています。楓は、通うことになった半田小学校にも慣れてきて、友だちも少しずつ増えているようで、一安心です。

私自身は、6月から9月まで柏崎市の非常勤職員として、働かせていただきました。草刈りや遊歩道の整備などをする傍ら、子どもたちに竹工作を教えたりもしていました。これは、勤務先が自然体験交流施設「ゆうぎ」という所で、その体験メニューを指導できるようにと、習ったものです。そうした経験を活かして、8月に福島市内で開催されたアスナロ幼稚園の集まりでは、子どもたちに竹工作でつくったトンボをプレゼントしました。私はそのバスの送迎などもしていたため、卒園式もできていないままの子どもたちに何かしてあげたいと感じたからです。子どもたちは非常に喜んでくれて、一生懸命作ったかいがありません。非常勤職員の仕事が終わった今でも、体験教室があればインストラクターとして参加したりもしています。

少しづつ柏崎市での生活にも慣れてきて、落ち着いてきた印象はありますが、やはり浪江町のことを常に考えている自分があります。この先どうなるかは全然分かりませんが、帰れるものなら明日にでも帰りたいぐらい、自分のふるさとに愛着があります。いつか帰れる日が来ることを願っています。

最後に、自分たちも被災者でありながら復興に尽力されている行政職員の皆さんには、本当に感謝しています。





千葉県

## 山本江利子さん(樋渡)

取材者：NPO法人ちば市民活動・市民事業サポートクラブ 風間・鍋嶋

取材日：12月2日 「平成24年1月 広報なみえ掲載」

### 「十日市」で友だちに会えてうれしかった

4月3日から3人の娘たちと千葉県市原市五井のアパートで生活しています。夫は福島に単身赴任中です。長女の花音は小学4年生、次女の花奏は幼稚園の年長組、三女の響花は3歳です。夫が音楽好きで、三人とも音楽にちなんだ名前をつけました。

震災後、福島県内の避難所を転々としました。パンとおにぎりだけの食事の繰り返しとお風呂に入れなかったこと、末娘の夜泣きがひどく、私と母とで交代で抱っこしていたことなど思い出されます。3月半ばに、東京の義妹のマンションに避難、半月間暮らししました。おかげで暮らす大変さはありましたが、蛇口から水が出る暮らしは、ありがたかったです。

ここでの生活は、車がなくて買い物など不便を感じています。長女に妹たちの世話を頼んで留守番してもらい、私一人で急いで買い物に行くこともあります。次女の幼稚園の送迎も、三女と私の3人で路線バスを利用して行きます。でも、長女が妹たちの面倒をよく見てくれるので、

とても心強いです。夫は月に2回は帰ってきます。夫の負担を考えると、今はそれ以上のことは望みません。できるなら浪江に帰って、家族一緒に暮らしたいですね。

子どもたちは、浪江の小学校や保育園の先生や友だち、おじいちゃん、おばあちゃんに会いたいと言います。長女は、浪江のお友だちと文通をしています。学校のことなどを書いていっています。私も、浪江の職場の方々には良くしていただいたので会いたいですね。11月に二本松で開催された「十日市」では、友だちや職場の人たちと会うことができ、とてもうれしかったです。

子どもが小さいので大変なこともあります。でも、おかげいの人たちに支えられて何とかできています。全国に散らばっている学生時代の友人たちとは、mixi(ミクシー)で連絡を取り合っていて、必要な物を伝えると集めて送ってくれます。当初、千葉では避難者の受け入れ体制ができておらず、民間の住宅を探して、すべて自費での

準備でした。つい最近、市原市でも借り上げ住宅の提供が決まり、12月8日に引越すことになっていきます。しばらく、ここで頑張りたいと思いますが、早くまた浪江のみんなに会いたいですね。



▲左から奏ちゃん、響花ちゃん、江利子さん、花音ちゃん



福島県

## 近藤 公孝<sup>きみ よし</sup>さん(大堀)

取材者：NPO法人市民公益活動パートナーズ 佐藤

取材日：12月9日(京月窯再興初の火入れの日)「平成24年1月 広報なみえ掲載」

### 妻、京子さんの京月窯再興にこぎつけ、次は自身の今後も

大堀に住んでいた「福島いこいの村なみえ」の支配人の近藤さんは、原発事故後転々とした後、12月から妻京子さんの大堀相馬焼京月窯兼自宅として、福島市飯坂町平野の古民家に京子さんと義父母と暮らし始めました。「福島いこいの村なみえ」の今後に奔走しつつ、京子さんの京月窯再興をアシスト。「ここを窯元の間でもあるけど大堀同様人々のコミュニティの間にもしたいんだ。」と語ってくださいました。



▲妻京子さんの作品の前で。

#### ■京月窯の火を福島で再び

実は今日は、朝からここに作った窯に初めて火を入れました、女房は窯から離れられないんです。新しい窯の加減を知るため、時間を追って窯の温度を記録したり、窯の状態を逐一観察してらるんです。あれから9カ月、やっとここまでこぎつけました。先の見えない避難生活を続ける中、女房が「このままでは居られない。」と言いつつ出しまして、不安もありましたが、私もどこかで「このままで居るのは違う。」と思うようになり、福島でまた窯が持てないか、あれこれ探しました。そんなとき、この地の古民家を紹介され、一目で気が

入りました。大堀でも築150年の家に住んでいましたから、大堀の家をほうふつとさせるこのたたずまいに、ここしかないと思いました。

#### ■「福島いこいの村なみえ」のこれまでを仕上げる

私の今は、「福島いこいの村なみえ」の止まってしまった時を、仕上げる日々です。震災直後は、「福島いこいの村なみえ」で避難してきた方々へ炊き出しをしました。原発事故後は取る物も取らずの避難で、当初は書類簿も何もない中、散り散りになった「福島いこいの村なみえ」のスタッフの今後に、慣れぬ役所回りに奔走しました。そんなスタッフとは今も交流があり、ホツとするひとときです。また、ふと、遠方から「福島いこいの村なみえ」を常宿として幾度となくご利用いただいたお客さまを思い出します。「どうぞされていくかな。お会いしたいな。」と思います。無我夢中でしたが、落ち着いたら、喪失感に襲われました。今までの暮らしが変わってしまったこと。人生設計が狂ってしまったこと。すべてに禁じ得ない虚しさを感じます。これから「福島いこいの村なみえ」

の仕上げに区切りがついたら、今度は私の今後を、そして業を定めねばと思っています。

#### ■福島の京月窯も大堀同様、人の集まる場に

窯主である女房も言ってるんですが、ここを窯元としてだけでなく、大堀でもそうであったように、お客さまや近隣の人がふらつとやって来て、女房の作品の茶碗や茶器で、コーヒーの香りやおしゃべりを楽しむ場にしたかなと思っています。浪江の人たちがやってきて、浪江を語る場になったらいいなと思っています。「福島いこいの村なみえ」の癒しが、ここでもかたちを変えて、かもしだせたらと思います。「浪江」に会いたくなったら、みなさんぜひ足を運んでください。



▲福島市飯坂町平野の京月窯 (看板も移設)



## 叶谷ヨシ子さん(請戸)

取材者：NPO法人市民公益活動パートナーズ 古山

取材日：12月8日 「平成24年1月 広報なみえ掲載」

### ここ笹谷は本当にいいところ 人情の厚さが身に染みます

津波で流されてしまった請戸の家は、大工をしている息子さんが建てた広い家で、息子さん夫婦や孫とともに暮らしていらっしゃるいました。畑仕事をする一方、絵手紙や老人会、筋力トレーニングなどを大いに楽しんでいました。



▲福島市笹谷東部のご自宅にて、たくさんの絵手紙とともに。

あの震災のときは、お友だちの家でお茶のみをしていました。津波警報の中、自転車で帰宅し、仕事が出来なくなった息子と孫の3人で車に飛び乗り、「福島いいの村なみえ」に向かいました。翌日12日には浪江高校津島校に移りましたが、断水のためトイレも使えず、配給されたのはおにぎり1つ。寝泊まりするにも通路が狭く、大変でした。3日目には川俣町の公民館に移動し、病院勤めのため患者さんとともに避難していた嫁とやつと合流

できました。

その後すぐに家族4人で茨城県の子孫の家で1カ月ほど世話になり、4月下旬からは北塩原村のペンション「木になる家」で避難生活を送りました。そして6月2日に、この福島市笹谷東部仮設住宅に入居しました。

とてもうれしい出来事がありました。兵庫県西宮市の方から激励の絵手紙をいただいたんです。その方は、阪神淡路大震災で被害を受け、娘さんの家で半年間の避難生活をされた経験をお持ちで、家族や住む家のあるありがたさを伝えてくださいました。見知らぬ方にこんなにも気遣っていただいたことに、感謝で涙が止まりませんでした。私も絵手紙を描いているのでお返しを出したところ、段ボールで心尽くしの品と丁寧なお見舞いを送ってくださいました。今でも絵手紙でやり取りをさせていただいています。

折、帰り際に雨が降り出し、震災後は外出時に手押し車が手放せないのですが、それをわざわざ車に乗せ、私を送ってくださいる途中、お食事まで一緒に頂きました。別の方にはお茶飲みにとお家に誘われ、私の大好きな柿をたくさん頂いたりもしました。この笹谷には人情が厚い方が多いのでしょうか。本当にご近所の方々には親切にいただいています。

時折、住宅には福島大学の学生さんが足湯とマツサージのボランティアに来てくださいます。若い男子学生さんに昔の言葉を教えながら楽しく過ごしたり、集会所で開かれる毎週水曜日のリハビリテーションや、健康チェックを兼ねたお茶飲み会も重宝しています。

本当に感謝していますが、先ごろ作られたという「ふるさと浪江の歌」を聞かされたときに、やはり浪江に帰りたいと思います。ですが、息子たち若い人たちの考えも大事にしなければならぬと自分に言い聞かせているところです。



埼玉県

## 堀 喜久子さん(請戸)

取材者：高崎経済大学櫻井研究室 櫻井・竹内

取材日：1月15日 「平成24年2月 広報なみえ掲載」

### 浪江・請戸のきれいな星空、 そして隣近所とのつながりがなつかしい

堀さんは、震災後、親戚を頼って大熊、船引、本宮、そして埼玉県蕨市などを転々とし、昨年3月末から狭山市の借り上げ住宅で、夫の浩喜さんと娘の真理子さんと3人暮らし。請戸で一緒に暮らしていた8人の家族は離ればなれとなっています。



▲真理子さん(左)と喜久子さん

浪江では権現堂で「源喜」という居酒屋をやっていました。夫が8年前に開いたお店で、息子や娘たちに支えてもらいながら、家族で力を合わせ頑張っていたところでした。請戸の自宅は津波で流され、お店も食器などは、震災後、一時帰宅も含め、一度も浪江には戻っていません。変わり果てたまちを見ることで、逆につらくなるのではないかとも思っています。今は、こ

れから先のことも考えられずにいます。ふり返ってみると、これまで家族でもほとんど話し合っではきませんでした。板前としてお店を頑張ってきた夫のことを思うと、これからの話に踏み込むことにも心が痛みます。できれば、以前のように家族みんなが同じ屋根の下で暮らせる日が来てほしいです。

こちらでは、地域の民生委員さんや近所のお店の方からよく声をかけていただきます。また、狭山市では月に1回、このまちに住む被災者を集めた「まごころ昼食会」を開催してくれます。毎回80名の方が集まりますが、唯一、話ができる場所です。ですが、それ以外は福島の方とも、まして浪江町の方々と話す機会はなく今日まで過ごしてきました。もっと話ができる場が欲しいですね。

震災後、娘は町民の皆さんと津島に3月15日まで避難していました。報道にもあるように線量が高い所にしばらくいたことが気がかりです。ホールボディカウンター検査は、福島ではなく、もっと身近なところででき

ないものでしょうか。できるだけ早く受けさせたいです。借り上げ住宅の期間が延長になるのかどうかも気がかりです。

いま住んでいるところは周囲に畑などがあるので、浪江を思い出して少し安心できます。浪江では、仕事が終わると必ず見上げていたきれいな星空に、いつもホッとすることがなつかしいです。人情に厚く、温暖な気候で自然も食べ物も豊かだった浪江の暮らしがどんなに大切なものだったかを思い出します。そして、あらためて浪江では周囲の方々に支えられて生きてきたことを実感します。隣近所の皆さんに心からお会いしたい。それまで家族で支え合って頑張ってください。



ソフトボールチーム「浪江大吉SSB」

# 松崎 光平さん(権現堂)・小桧山 司さん(田尻)

取材者：NPO法人市民公益活動パートナーズ 古山  
NPO法人ビーンズふくしま 中鉢

取材日：1月8日

「平成24年2月 広報なみえ掲載」

## 「<sup>たかはた</sup>ありがとう高畠」僕たちは、前を向いて進む

松崎さんの避難先だった山形県東置賜郡高畠町で行われた昨年秋の第47回総合体育祭・ソフトボール大会に浪江町チームとして出場し、見事、準優勝。

散り散りとなって避難生活を送る浪江の仲間たちとともに、再びスポーツができた幸せを噛みしめると同時に、「仲間との再会と高畠町との交流の場、時間を与えてくださった町に、心からお礼が言いたい。」と開口一番、話していただきました。そして、「チームとして記事になったこの『浪江のこころ通信』を、お世話になった高畠町のみなさんに届けに行きたい。」とのことでした。



▲チームを代表してお話ししてくださった松崎さん(右)、小桧山さん(左)

■まず、代表である松崎光平さんにお聞きしました

チーム名である『浪江大吉SSB』は、高畠町の大会に出場するために結成した合同チームの名前ですが、「大吉」には訳があります。昨年10月2日に行われた体育祭に出場するきっかけを作ってくくださったのが「やきとり大吉」のご主人、伊藤健彦さんなのです。各避難所を転々とし、たどり着いた高畠町武道館で途方に暮れていたころ、明かりが灯る店があり、温かい食事とお酒をいただいたことが親しくなるきっかけでした。町の体育祭に出場させていただけるなどは、思いもよみませんでした。「何とかしますから！」の声に励まされ、東京・群馬・福島・宮城など各地で暮らす仲間たちに連絡を取り、11人の仲間が集まりました。実はこの避難中、チームの仲間の1人を亡くし、悲しみのどん底にいたメンバー

に、希望の光を与えてくれた出来事となり「今しかない！」という思いが余計に強かったと思います。

浪江町で町の大会に毎年出場していたSSBと、小桧山さんの「パイ山社中」との合同チームを結成し、試合に出場することになったものの、球技用具もなく、練習もゼロでした。それでも大会当日は和気あいあい、珍プレー好プレー満載の楽しいひとときを過ごせました。

私たちには「大きな野望」があります。各地に避難している仲間たちの地域でソフトボール大会に参加させていただくことです。そのために仲間には「この現状を理解し、今ある生活を最大限生き抜こう。」と仰っています。さまざまな場所での暮らしがあると思いますが、楽しいことを一つでも探して、前へ進むことができます。僕たちには必要だと思っています。



◀山形県置賜郡高畠町第47回総合体育祭・ソフトボール大会の賞状をチームに授与する協会会長 高橋英助さん



◀トロフィーを受け取るチーム代表

■「こういう支援もあるのだと気づかされました。」と、小松山司キャプテン

二本松の体育館と裏磐梯、そして今の仮設住宅では、多くの方々から義援金や生活支援物資をたくさんいただき、本当にありがたいことだと思っています。

しかし高島町の支援は少し違いました。大吉の伊藤さんや高島町ソフトボール協会会長の高橋英助さんをはじめ多くの人たちが、私たちに集まれる場所と時間を提供することで応援をいただきました。他の地域のチームを町の大会に参加させるなど、なかなかできないことです。山形新聞も地元ケーブルテレビ局も大きな話題として取り上げてくださいました。

原発事故によって避難を余儀なくされているけれど、今住んでいる地域でアンテナを高くして前向きに暮らしています。



『浪江大吉SSB』のメンバーたち

後列右から

伊藤健彦さん(やきとり大吉)、松崎智恵さん(マネージャー)、木幡健一さん、熊谷 徹さん、島田有紀さん、本田隼也さん、小荒井雅治さん

前列右から

平田邦之さん、栴谷拓郎さん、山崎 徹さん、松崎光平さん、小松山 司さん

『浪江大吉SSB』メンバーからのコメント

(選手は五十音順、カッコ内は現在の居住地)

- 熊谷 徹さん(福島県相馬市)  
一日一日を大切に歩いていきましょう!がんばって浪江町!!
- 小荒井雅治さん(福島県郡山市)  
ソフトと避難生活、どちらもホームに帰ることが大事だ。座布団一枚!
- 小松山 司さん(福島県二本松市)  
まほろばの スウィングガールズ巡らせて 高島ワイン 母を誘ふ
- 木幡 健一さん(福島県南相馬市)  
あの苦しいときに出会えた高島の人たちの温もりと、仲間との絆を胸にこれからも頑張っていきたいです。
- 島田 有紀さん(福島県二本松市)  
SSBは、こういうときこそみんなの絆で優勝を目指し新たな未来を作っていきたいです
- 平田 邦之さん(群馬県館林市)  
高島町の皆々さま、お世話になりました。頑張っぺSSB 頑張っぺ浪江町 やっちゃうべ×2
- 本田 隼也さん(福島県南相馬市)  
浪江SSBの絆は一生の宝物です!
- 栴谷 拓郎さん(福島県南相馬市)  
高島最高!SSB最高!!  
メンバー100人目指して頑張ります。そして株式会社SSB設立!
- 松崎 光平さん(宮城県仙台市)  
喜びも悲しみも明日への力に変えて。俺は貴方の分まで笑って生きる!
- 松崎 智恵さん(マネージャー)(宮城県仙台市)  
みんなと久々に会えて安心しました。
- 山崎 徹さん(宮城県仙台市)  
SSBは絆の強いチーム。その仲間の一員にすることは誇りです。



## 山田 義行さん(牛渡)

取材者：とちぎボランティアネットワーク 徳山

取材日：1月16日 「平成24年2月 広報なみえ掲載」

### 「一陽来復」を心の支えに

浪江町牛渡から那須塩原市に避難生活を送っている山田義行さん。

震災前に同居していた息子さん夫婦とは仕事の関係で離なれ、奥さんと2人暮らしを送っています。

3月11日の震災の翌日、朝食を食べていたら防災無線から避難指示の放送が流れました。すぐに帰れると思って位牌だけ持って着替えも持たずに避難しました。最初の避難先で事の深刻を感じ東京方面に避難しようとしたのですが、途中で親切な埜町の人たちと出会い3月末までその公民館に避難しました。4月から親類のいる静岡県で9月ま



▲お孫さんの写真をバックに夫婦で撮影

私たちが住んでいた地域はもとと漁業と農業しか産業と呼べるものがなく、若いころ農閑期は出稼ぎなどをしていました。原子力発電所を一般企業の工場と同じように誘致することで、仕事場が増え地元が潤うと思っていました。今回の震災の結果を見ると私がかにかに原子力発電所や放射能というものに対して無知であったかを痛感してい

で避難生活を送りました。いずれの避難先においても地元の人たちから至れり尽くせりの待遇で、お世話になった皆さんに対して非常に感謝しております。最終的には浪江町に近く、車などで帰るのに都合の良い栃木県の那須塩原市で10月から避難生活を送ることにしました。今住んでいるところは団地のような土地なので、私が以前住んでいたところより近所づきあいが少ないので積極的に外出しているいろいろな人に声をかけて、この土地の人たちと関係を築こうと行動しています。

若いころから人生の計画を立てて震災前までは何とか順調に達成することができていました。それが70歳を過ぎて今まで築き上げたものの多くを無くしてしまつたことについては、非常に残念でならないです。いつの日か帰れる日が来れば震災前の生活のリズムを取り戻したいです。そして、軌道に乗っていたブチトマトを育て、賃貸物件のアパートを修復し住んでもらいたいです。そして息子夫婦の家族とともに6人の家族で生活を取り戻したい。そのためには若い人たちが安心して暮らせるまちづくりを実現しなければなりません。今年いただいた年賀状に「一陽来復」という字を書いたものがありました。悪いことがあつた後に幸運が来るという意味で良い言葉だと思いました。この言葉を胸に抱いて浪江町へ帰る日を夢見て生きていきたいです。



## 清水 昭子さん(酒田)

取材者：とちぎボランティアネットワーク 徳山

取材日：1月15日 「平成24年2月 広報なみえ掲載」

### 震災前の仲間たちと元のように暮らしたい

浪江町酒田から両親の出身地の栃木県に避難した清水さん。昨年末に同県那須塩原市に7回目の転居を経て、父親のライフワークともいえる趣味の家庭農園ができる家が見つかり、やっと腰を落ち着けて生活できる場所にたどり着きました。

震災時と避難については、地震発生時建物の被害はほとんどありませんでしたが、防災無線で原子力発電所の事故による避難指示が出ました。そのときはすぐ帰れると思って、着の身着のまま避難しました。

避難地域が拡大したことで最初に避難した場所もまた避難しなくてはならない状況になり、両親の出身地でもあり親類もいる栃木県に避難場所を決めて避難生活をする事に決めました。

栃木県に避難してしばらく大田原市に身を寄せていましたが、昨年12月に父の趣味である家庭農園ができる住宅が見つかりそこへ移り住むことができました。

避難先では地元の人たちの温かい支援を受けることができましたので本当に感謝しています。

私たちが住んでいたのは、酒田川原というところで海が見えるところでありませんが、近くに鮭が遡上する川があり、山並みの風景があり、白鳥が飛来してくる湖など自然が豊かな場所です。しかも生活するうえでも

とても便利な場所でした。それに比べると今住んでいる場所は少々不便な場所に感じてしまいます。

困っていることは、自由に自宅に帰ることができないので、今の家の状態が良くわからないし、庭の植木のこともどうなっているのか心配です。

福島県民だと栃木県で暮らすにはちょっとしたことでも不便に感じるものがあつたりします。積極的に情報を得ようとする

と、パソコンが必要になります。今現在パソコンを持ってないので情報入手については不便を感じています。

今現在なんとか仕事に就くことができ、家族が落ち着いて暮らせる場所を見つけたことができました。

いつ浪江に帰れる状態になるのかは今の段階ではわかりませんが、震災前の仲間たちと以前のように暮らすことができたらしんい生活しています。



▲父正一さんの開墾中の家庭農園をバックに3人で





## 泉田 沙織さん(権現堂)

取材者：地域社会デザイン・ラボ 遠藤

取材日：1月15日 「平成24年2月 広報なみえ掲載」

### 子どもたちが戻れる浪江町になって欲しいと願っています

震災後、新潟県の妙高高原の国立青少年自然の家で避難。その後、6月末に仙台市青葉区中山に移りました。現在は、子ども2人と3人暮らし。夫と義母は福島市在住のため別居生活を送っています。



▲右から、沙織さん、百合香ちゃん、圭一くん、征慶さん  
仙台市内のアパートにて

仙台での暮らしは、近くにスーパーや医院、郵便局などがあり便利ですが、家が密集しているので窮屈さを感じます。また、浪江では季節に1〜2回しか降らなかつた雪も、仙台では降る日も多く、積雪は多くないので道路や階段が凍るのでひやひやしながら歩いています。子どもたちには、底にスパイクがついている靴を準備したところで

はじめのころは、仙台で子育て情報を収集するのに苦労しました。幼稚園の送り迎えで知り合つた近所のママ友に聞いたり、自分から病院など各所に問い合わせしたり、同じ幼稚園が縁で浪江町から避難してきている方と知り合つて聞いたり。浪江町役場からのメール情報も助かっています。住民票を仙台市に移していない避難者に対しても、避難先の自治体から暮らしの情報が得られると大変助かるのですが・・・。今後は、子どもたちが戻れる浪江町になって欲しいなど願っています。

#### ■圭一くん

浪江小学校では3年2組でした。学校が終わると友だちと鬼ごっこやケードロ（警察と泥棒）をしたり、ゲームをしたり、プラモデルを作ったり、自転車であちこち走りまわって遊ぶのが好きでした。今住んでいるところは坂や家、車が多いので自転車には乗っていません。あとサンプラザに行っておばあちゃんが買っている間にゲームセンターで遊ぶのも好きでした。

ぼくは、おばあちゃんが大好きなので、今は離れて暮らしているのがさみしいです。早く浪江のお家に帰って、友だちと一緒に遊びまわりたいです。

#### ■征慶さん

私は今、平日は福島市で母と住んでいます。週末になると仙台の妻と子どもたちの元に向かっています。浪江では建設会社を経営していました。現在は、会社事務所を南相馬市原町区に移し営業しています。常磐自動車道が早く開通してもらえれば、暮らしと仕事をもっと工夫できるのではないかと考えています。震災後は仕事で行方不明者の捜索や仮設住宅の建設にも携わりました。今後は浪江の復興、基盤整備に関わられたらうれしいです。

今思うのは、早く浪江の街で飲み会、乾杯がしたい！ということですね。つまみはもちろん浪江の美味しい魚介類。離れてみて浪江の良さをいくつも実感しています。



## 澤田 裕美さん(川添)

取材者：NPO法人ピースふくしま 佐藤

取材日：1月13日 「平成24年2月 広報なみえ掲載」

### 希望の光をみつけるまで

川添に住んでいた澤田さん。現在、福島県郡山市熱海町の借り上げ住宅で、裕美さんの母、裕美さんご夫婦、2人の娘さん、愛犬とともに暮らしています。数カ所の避難場所を経て、熱海町で日常の落ち着きをとりもどしつつあります。

87歳の祖父、5カ月の子どもを含め、私たち家族、いとこ家族、叔父、叔母で津島小学校、親戚宅、体育館、アパートを14人で時には離れ離れになりながら、転々となりました。そんな中、室内犬を連れてきた母は、犬と一緒に車で寝泊りし、寒さをしのぐため体中にカイロを貼り、犬を抱きかかえて過ごしていました。犬の体重は7kgも減り、私たち同様、動物にもストレスがかかっているのだと感じています。避難生活から10カ月、ようやく1kg戻ってきたんですよ。

印象深かったのは、福島市に避難していたとき、見ず知らずのご高齢の女性が声をかけてくれて、大きい紙袋に衣類などの生活用品を入れて私にくださったのです。袋の下には「年金暮らしのしがないお金ですが。」というメモとともに1万円が入っていました。避難してる間、たくさんの方に優しい言葉をかけていただきました。名前も知らない方々ですが、本当に感謝しています。

先の見えない不安がつらいですね。「どうせ移動しなくちゃ

ならない。」という感覚があるんです。今後の生活が定まらないと、生涯の計画をたてられませんが、子どもが「保育園のみんなに会いたい。」と言うんですが、なかなか会わせられないのもつらいです。

最初は震災の不安で気の許せる人に会って話すと涙が出てしまつて。でも涙を見せると子どもが不安がってしまうから見せないようにしていました。夜中にハッと目を覚まして「何でここにいるんだろう。」と思ったり、暮らしの目標がなかなか見えてこず、つらい時期もありました。

けれど、あるときからふつ切れました。悩んでも泣いてても状況は一緒。笑顔でいられるなら、そのほうがうまくいく。笑顔で前を向こう。今できることをしよう…。そう思えるようになって。

震災後、転々と居を移す間はずが過ぎるのがとても早く感じました。ここにきてやっと落ち着いて自分の好きなことをやるようになってきました。新しい環境に子どもが慣れてくれるのか

私たちはとても不安でしたが、あつという間に幼稚園で友だちができました。大人が思っているよりも子どもはたくましく、安心しました。

避難してる方で目標がもてない時期というのはつらいと思うのですが、自分の中に希望の光がみつければ楽になるんじゃないかなと思います。



▲りりなちゃん(左)と裕美さん



## 森岡 哲郎さん(大堀)

取材者：NPO法人市民公益活動パートナーズ 古山

取材日：1月12日 「平成24年2月 広報なみえ掲載」

### 今年暮れまでは、私も桑折町自治会も 正念場になりそうです

大堀地区の役員をしていた森岡さんは、地震・津波災害発生当初から地区住民のお世話をされたそうです。原発事故による避難のため、一時福島を離れ、埼玉県狭山市に移住しましたが、現在は伊達郡桑折町の仮設住宅に、家族3人で暮らしています。



▲防犯協力の委嘱を受けた際、福島県福島北警察署長さんらとの記念写真をお持ちになって

私は、井手にある宿泊施設を備えた農業や里山暮らし体験事業を行う会社に勤務し、3月11日は東京から20名の体験者を受け入れてじゃがいも畑作りを行っていました。体験の方々は施設で一夜を明かし、翌12日朝に急ぎよバスで東京に戻っていたのですが、なんと到着は13日になったそうです。

一方、私は役員をしている約120戸の地区住民に老人福祉施設「やすらぎ荘」へ避難してもらい、炊き出しを行ったり、

伊達郡桑折町に移ったのは6月下旬です。浪江町役場がある二本松を希望していましたが、桑折は比較的早く完成した割には入居率が低く、申し込みやすそうだと決めました。住んでみると、浪江にも比較的近く、山や自然に恵まれており、よかったですと思っています。

持ち寄った発電機でテレビや温風ヒーターを動かしました。12日夕方には避難指示が20km圏内に広がり、私たち家族8人は津島に向かいましたが、避難所は満杯だったため、結局、郡山の義姉の家にお世話になりました。その後、埼玉に移り、会社を通じて狭山市の民間マンションに入居しましたが、その間に借上げ住宅申請の手続きを行い、母と私たち夫婦の3人家族と、息子たち5人家族の2軒を借りました。



# 大島 信司さん(権現堂)

取材者：NPO法人市民公益活動パートナーズ 佐藤

取材日：1月14日 「平成24年2月 広報なみえ掲載」

## 「町のしっかりとした方向性をきちんと決める」 …難しいことはわかってるけど、 やっぱり今一番考えたいことです

JR浪江駅前で美容室「ビューティサロンちどり」と「ヘアデザイン クリエーション」を運営していた大島さんは、原発事故後転々とした後、福島市内の借り上げ住宅に落ち着き、昨年11月3日に美容組合4店舗共同で「なみえ美容」を二本松市と福島市の仮設住宅内にオープンさせ、1月8日の成人式には浪江の新成人の「一生の思い出」を心熱く支えました。

■浪江の新成人は浪江の美容師が支えたい

昨年11月3日に、美容組合4店舗（美容室ローズ、ビューティーサロン中里、ふたば美容室、ビューティサロンちどり）共同で、安達運動場仮設住宅（二本松市）と北幹線第一仮設住宅（福島市）内に、「なみえ美容」をオープンさせ、交代で運営しています。原発事故後転々としながら、何もしない生活には耐えられませんでした。仕事をして、生活にメリハリをつけたいと思いました。何よりお客さんのその後が気になって、リサーチのためにも、早く再開したいと思いました。昨年の5月ごろから、町役場と仮設住宅内で美容室を再開したいと交渉をはじめ、やっとオープンすることができました。成人式に間に合ってよかったです。「浪江の新成人の『一生の思い出』は、やっぱり浪江の美容師が支えなきゃ。」と思いましたが、十分な環境とは言えませんでしたが、新成人やその家族の皆さんのたくさんの笑顔を見ることができました。「若い人たちの明るさは町の活気だ。」

とつくづく思いました。

■お客さまの喜びは私の喜び

お客さまが「きれいになった!」と喜んでくださる、そのヘアスタイルのお顔に笑みがこぼれた瞬間が、私の喜びです。お客さまがきれいになって、重くなったり口から少しでも思いの端が言葉になって出る、そんな場に「なみえ美容」がなれたらと思っています。（取材者：ゆつたりとしたソファの傍らに、お茶やお菓子がありません。）

今まで通りとはいきませんが、浪江の美容師たちがそんな場を提供したいと営業再開したことを、多くのおみなさんに知ってほしい、来てほしい、来て心身ともにリフレッシュしてほしいと願っています。

■「町のしっかりとした方向性をきちんと決める」

難しいことはわかっています。やっぱり今一番思うことです。震災前は、まちづくり会社東遊記の専務をするなど、商工会の場などでまちづくりに関わっていました。不安な思いを抱え

たままの今の状況から、現実的な除染とともに、骨太な大義がほしいと思っています。何とか希望を見出したい。ニュータウン構想はどうだろうか？などとあれこれ思いをめぐらせています。



◀「なみえ美容」二本松店（二本松市安達運動場仮設住宅内）で、妻昭子さんと  
(☎090-8924-1801)



静岡県

# 根岸 淑子さん(立野)

「平成24年3月 広報なみえ掲載」

家族で静岡県磐田市に避難する根岸さんからお手紙が届きました。



▲立野の風景 (平成20年8月撮影)

浪江町の皆さん元気で過ごして  
しようか。

遠くふるさとを想いながら机に向  
かいました。現在、私は静岡県磐田  
市に住んでいます。福島からはとて  
も遠いので、ふるさとを思う気持ち、  
皆さんと会いたい気持ちはひとしお  
です。

避難所を転々とされた方、仮設住  
宅に入居された方、そして私のよう  
に県外に避難せざるを得なかった方、  
同じ住民であるにもかかわらず、全  
国に散らばってしまいました。皆  
さんも同じ思いだと思っています。  
苦しき、悲しき、悔しき、胸の痛み、  
それらを共有しているからわかちあ  
えるのだと思います。

今日は震災後に作られた唄を紹介  
したくて筆を持ちました。『ふるさと  
なみえ』というタイトルです。私た

ちの思いをそのまま詩にしてあります。  
この唄の作詩、作曲、歌手ともに浪  
江町生まれの方々です。

●作詩 根本昌幸さん (荇野出身)  
●作曲 民謡歌手の原田直之さん  
(高瀬出身)

●歌手 沢田貞夫さん (荇野出身)

詩を読んでは涙し、曲を聞いては  
涙しております。とても良い唄です。  
浪江町の皆さんもぜひ聞いてみて、歌っ  
てみてください。

この時期にと思われるかもしれま  
せんが、だからこそ必要なこともあ  
ります。唄は、人のこころを動かし  
ます。生きる術の原動力にもなります。

私も精神的にまだまだ立ち直れる  
状況ではありませんが、皆さまにも、  
自分にもふるさと浪江町の風景を忘  
れず、胸にとどめて頑張つてほしい  
と思ひ紹介するに至りました。

テレビで繰り返し放映される津波  
の映像を見ながら、犠牲になれられ  
た方々がたくさんいらつしやる、そ  
のご家族の苦しき、悲しきを思った  
ときに、「私たちは頭を垂れているば  
かりではいけない！生き残つた者の  
使命として、地に足を踏ん張つて生  
き抜かなければ。」と、少しづつそう  
思えるようになりました。

皆さまのために何ができるか。「こ  
んなに遠い静岡にいて、手も届かず、  
せめて文字を書くことで皆さんと通  
じ合いたい。」そう思いました。  
皆さまにお会いしたいです。

今も福島第一原発で命をかけて働  
いている方々に、あらためて敬意を  
表します。

寒い中、風邪などひかぬよう、ご  
自愛ください。

\*追伸

この4月から主人と2人で南相馬  
市原町区に住むことになりました。  
あせらず前向きに少しずつ目標を見  
つけていこうと思っています。

TEL 090-6781-6003

「ふるさと なみえ」

1 ふるさと離れ 遠くへきたよ

ふるさとはいい けれど帰れない  
帰りたいなあ わがふるさとへ  
みどり豊かな あの町へ

ああ夢にみるよ ふるさと浪江

2 鮭のぼりくる 泉田川よ

にぎわいをみた 請戸の浜よ  
帰りたいなあ わがふるさとへ  
桜花咲く 丈六へ

ああ夢にみるよ ふるさと浪江

3 秋は紅葉の 高瀬の溪谷よ

美しかった あの一の宮  
帰りたいなあ わがふるさとへ  
とどろきわたる 不動滝

ああ夢にみるよ ふるさと浪江



## 稲垣颯一郎さん(小4)(権現堂)

取材者：(特活) 秋田県南NPOセンター 八嶋

取材日：2月12日 「平成24年3月 広報なみえ掲載」

### 「家族一緒に暮らしたいな」

颯一郎くんのご家族は、震災直後、福島県内のおばあちゃんの家へ逃げた後、3月15日におばさんのいる秋田県横手市増田町に避難しました。現在お父さんは埼玉県内、お母さんは福島県内で仕事をしているために離れていますが、おばあちゃん、お姉さんと一緒に住んでいます。



▲これから“かまくら”になる予定の雪の山の前で撮りました。  
左から、真於さん(中1)、颯一郎さん、おばあちゃんの前馬由利恵さん

#### ■元気で頑張ってるよ

浪江小学校は歩いて3分ぐらいで着いたけど、増田小学校は徒歩で1時間くらいかかるかな。でも、お友だちといっぱい話しながら行くから楽しいし、大変じゃないです。冬になつてからは車で送ってもらっているけど、帰りはスクールバスです。今住んでいるおばさんの家は温泉宿で、地震の後には他にも避難してきた人たちが大広間にたくさんいました。宿は1000年位の歴史があるみたいです。

周りは山で囲まれていて、近くにはりんご畑があります。ここで遊んだり、登校で鍛えられたのか分らないけど、「けっこ

う跳べるんじゃないの!？」とお姉ちゃんも言っていたから、陸上部で走り幅跳びをやっています。2週間くらい前に肺炎になっちゃったんだけど、休み時間には友だちとドッジボールで遊ぶほど元気になったし、体を動かすのが好き。浪江のときも放課後に児童クラブで友だちと遊ぶのがすつごく楽しかった。

一番好きなものはゲームで、攻略本を読んで、クリアしていくのが楽しい!将来はゲームのプログラマーになりたいです。

#### ■遊びに来てくれるといいな

増田には今まで何度も遊びに来てたけど、去年も今年も雪が多いし、寒いのでびっくりして

ます。おじさんが毎日雪寄せしてくれた雪が山のようになつて、それを“かまくら”にしようとして手伝ってます。「少しずつ踏み固めて作るんだよ。」とおじさんが言っていました。でき上が

たら、けいけい君やみつき君に見せてあげたいなあ。雪はまだまだ解けないから、遊びに来てくれるといいな。

浪江では冬にはお祭りは無くて、11月に“十日市”という大きなお祭りがあつて、にぎやかです。店街に屋台がたくさん並んでおいしいものがいっぱい。なみえ焼そばはもちろん大好きで、カツプ麺になったなみえ焼そばを1個食わずに持つてる。おみこしをみんな担いで回つて、最後に大声コンテストで、「わっしょい!わっしょい!」大きな声を出して競い合ったところが楽しかったです。

週末にお父さん、お母さんが来るのが楽しみです。お父さんは8時間位、お母さんは5時間近くかけて冬の道を運転して来るのが心配だけど。

浪江の家の中を掃除して、きれいに家族と一緒に暮らせるようになるといいなと思います。



千葉県

## 豊田久美子さん(高瀬)

取材者：(特活) ちば市民活動・市民事業サポートクラブ 鍋嶋・長澤

取材日：2月14日 「平成24年3月 広報なみえ掲載」

### 子どもたちの笑顔が一番

震災の当日は子どもを連れてスリゾートハワイアンズに出かけていたので、偶然にも津波の被害を免れることができました。帰り道の国道は走れない状態で、山道を6時間かけて帰宅しました。偶然が重なり、一家全員津波の被害を免れて無事でした。3月14日には千葉市に住んでいる叔母を頼りに、親族10人で避難してきました。今は千葉市内の賃貸住宅に夫の両親、私と子どもたち3人の家族6人で住んでいます。震災から1年、避難生活をしながら子どもの成長を見守っていてあつというまに時が過ぎたように感じます。夫は原子力発電所関連企業に勤めていて、4月から福島県内で一人暮らしをしています。週末が休みのときは戻ってきてくれますが、身体のこと心配です。

昨年(2012年)の3月18日が長男の卒園式でしたが、震災で中止に。夏には卒園者の親子で再会を果たして、数カ月遅れの卒園式で手作りの卒園証書をもらうことができました。千葉では、入学した小学校でできたたくさんの友だちとサッカーをしたり毎日元気よく遊んでいます。私は子どもの入園・入学をきっかけにママ友ができました。実家の両親は二本松の仮設住宅に移ったため、震災で離ればなれになったのが残念でなりません。携帯電話を使ったことになかった両親でしたが、今では電話を通して連絡を取り合っています。移り住んではじめて、親戚の心強さを感じ、何より子どもたちの笑顔が一番だと実感しました。広報なみえの「浪江のこころ通信」を通して、知人の近況や元気な声、前向きな姿勢を知ることができ、元気づけられています。また、基本的な暮らし方が変わって戸惑うこともあります。それは、子どもに家です。大きな物音を立てるとはいけないうことだと厳しく言ったり、ご近所さんの顔が見えなかったり、自由で私的な憩いの場である庭が少ないことです。とはいえ、周りの人がよく助けてくれるので、大きな困りごとはありません。帰れるものなら帰りたいとい

うのが本音です。浪江で昨年6月に家を新築予定だっただけに、家を建てた後の夢や未来が見えなくなってしまう心残りです。また、福島で一人暮らししている夫、離散した親族、浪江での友人…できることならみんなでいたいですが、ですが、これから先いつ帰れるかもわからない現状では、今を楽しんで生きる姿勢を大事にしています。



▲左から萌絵ちゃん(5歳)、久美子さん、悠人くん(1歳)、大貴くん(7歳)



静岡県

## 堀川 文夫さん(権現堂)

取材者：高崎経済大学櫻井研究室 櫻井

取材日：2月11日 「平成24年3月 広報なみえ掲載」

### 「この震災がもたらした真実とは何か」 子どもたち、そして社会に向けて発信していきたい

堀川文夫さんは、妻の貴子さん、そして愛犬ももと愛猫みかんとともに静岡県富士市で生活する。震災後も、浪江で経営していた学習塾の子どもたちを励まし、交流をくり返してきた。震災の経験と教訓をふまえ、新たな土地での歩みを始めようとしている。

私は震災前から、自分の塾に通う子どもたちに原発の危険性や避難方法などを伝えていました。まさか本当にこんなことが起こるとは思いませんでしたが、現在の線量でも危険性は否定できないはずで。そこに人々が暮らし続けることには違和感があります。浪江町として集団でどこか別の土地に移転するなども選択肢の一つでしょう。しかしそれどころか、これだけの災害に直面したにもかかわらず、わずか1年足らずで国内の原発も再稼働を容認するなど、何だか元の日本に戻ってしまうような危惧があります。あの大地震と原発事故が私たちの社会にもたらしたものは何か。私たちはどんな社会をめざすべきなのか。子どもも大人も真剣に議論すべきときではないでしょうか。あまりにも東北、福島、そして浪江町から声が上がらないことが残念です。できれば福島・浪江の皆さんと意見を交わしながらつながりをつくることのできる機会が欲しいですね。

県内避難者に比べ、県外避難者への対応の足りなさを実感しています。また、「自主避難」

という言葉でくくられた、東電と国の責任逃れの犠牲者たちへの対応の足りなさには腹立たしさを通り越して悲しくなります。実は私たちが夫婦も、県外での暮らしについて昨年末までは気持ちの整理がつきませんでした。今はこの静岡の地で頑張っていると思うています。ただ、たとえばどこに暮らしていても浪江町民という気持ちに変わりはありません。

こちらでは、昨年10月に富士市近郊に避難している福島県民の交流会を主催しました。富士市内での防災シンポジウムや大学の講義への出演、そして富士市産業支援センターのサポートもあり、被災体験や防災教育、そして私自身がこだわってきた子どもの教育について話す機会を得ています。ようやくそのような心境になってきたということでしょうか。浪江では子どもを中心に語りかけてきましたが、これからは自分の経験や思いを積極的に社会に向けて発信して行こうと思っています。60歳を迎える自分にもまだ社会に果たす役割があるのだと感じています。



▲左から貴子さんと文夫さん





## 岡本 亜矢さん(酒田)

取材者：高崎経済大学櫻井研究室 櫻井

取材日：2月11日 「平成24年3月 広報なみえ掲載」

### 震災で直面したさまざまな経験を 子どもたちの人生の糧にしてほしいと願う

岡本亜矢さんは現在、夫の宗広さん、長女の梨瑚さん(中1)、次女のちりさん(小4)、そして愛犬のとん平と東京・町田市で生活する。震災後の4カ月間は、山形市内の総合体育館などの避難所で長く暮らした。



▲左からちりさん、梨瑚さん、亜矢さん、とん平、宗広さん

震災後、原発の影響を心配して、親戚がまとまって山形市の総合体育館に避難しました。避難所の生活環境は少しずつ変化しつつ、結局、子どもたちの夏休みまでの4カ月間をそこで過ごすことになりました。その間、近隣の方からお風呂を提供していただいたり、物資を提供していただいたり、地域の皆さんには本当に温かい手を差し伸べていただきました。人のつながりの尊さを実感した4カ月間でした。

その後、夫の仕事の関係で現在の東京・町田市に移りました。子どもたちも私たちも生活環境は浪江のときとは変わり、浪江のときの1学年1クラスの規模から、8クラスもある大規模校への転校。浪江では、夫の親・兄夫婦も身近な所にいましたが、今は福井県やいわき市などにバラバラに暮らしており、支え合っ

て暮らしてきた以前のように、すぐに会える距離ではなくなりました。それが残念です。

姉の梨瑚はバトミントン部に所属して毎日頑張っていて、妹のちりも浪江のときに頑張っていた陸上をこちらでも続けています。浪江の陸上の監督が、震災後も合宿や大会があるたびに声をかけてくださり、クラブが存続していることに感謝しています。浪江とのつながりはこれからも大切です。今年の3月には、ふるさと学校として浪江の小中学生が1泊で福島に集まる予定されていて、とても楽しみです。これからは浪江町主催の交流の場には積極的に参加したいと思っています。

夫とも子どものことはよく話

し合います。何よりも放射線量が心配です。子どもたちが独立するまでは県外で頑張ってくださいますが、そのあとは浪江に帰りたいと思っています。行政の皆さんには、「帰りたい」という思いはあっても帰れない」という県外避難者の思いをぜひ考慮してほしいです。

子どもたちは私たちに震災のことや浪江のことはあまり話してきませんが、きくと考えていることはあると思います。せめて震災があったから何かができなくなったではなく、震災によってこんな経験ができたのだと前向きにとらえ、人生の糧にしてほしいと親として願っています。



宮城県

## 渡邊 正見さん(加倉)

取材者：地域社会デザイン・ラボ 遠藤

取材日：2月13日 「平成24年3月 広報なみえ掲載」

### お店をオープンしました 常連さんも増えていますよ！

浪江町ではローソンのオーナーとして店舗を経営していた渡邊さん。被災後は、福島市や仙台市のホテルに移り住みながら、現在は家族3人で仙台市太白区に暮らしている。新たに仕事をはじめ忙しい毎日を送っている。

浪江町では、ローソン店舗のオーナーとして無我夢中で働き、ようやく12年目を迎えたところでした。地域の皆さんにお店を愛していただいたことを思い出します。ようやく経営に慣れて、これからはスタッフに仕事を任せて浪江をもっと楽しんだり交流したり、あちこちに出かけた。とても残念です。

震災直後は、ローソン本部か



▲ローソン名取関上店（宮城県名取市）のオーナーとなり、仕事が始まった。「ぜひお立ち寄りください！」  
左から、正見さん、茂之さん、京子さん

ら支援がありホテルを福島市や仙台市に確保してもらえたのでそこに避難をしました。これからの居住地として、山形や秋田の物件も探しましたが、福島から遠いこともあり宮城に居を構えることにし、現在は仙台市太白区のマンションに家族3人で住んでいます。

そんなときにローソン本部から「働いてみませんか」というお誘いがありました。その際に紹介されたのが名取市の「関上店」です。この閑上地区も津波のために多くの家屋が流された地域です。夜は真っ暗で、住む人も少なく条件としてはあまり良くはありません。また、見知らぬ土地での出店でもあり悩みましたが、出店を決意し1カ月間の準備を経て昨年12月1日、オープンにこぎつけました。

開店当時の来店者は工事関係者ばかりでしたが、現在では、近くに住んでいる住民の方ともコミュニケーションがとれるようになり、常連さんになっていただけるようになりました。地域の方からは「お店のお陰で地域が明るくなって良かった！」

「閑上の中心にあるお店だから頑張っってね！」と応援していただいています。

これからについては不安がありません。原発の補償が今後どうなるのか、みんなに福島・浪江・震災のことが忘れられてしまうのではないかと「ふるさと浪江」を大切にしながらも、町にはもう戻れないかもしれないとも思っています。だからこそ、何かをあとにするより、自分でしっかりと生計を立てていくために仕事に取り組んで行こうと日々暮らしています。

先日仙台で開催された浪江町民のみなさんの交流会には、仕事の都合で参加できませんでしたが、今後はぜひ参加してみたいです。浪江の人に会うとホッとしますから。



## 渡邊 幸さん(権現堂)

取材者：高崎経済大学櫻井研究室 櫻井

取材日：2月10日 「平成24年3月 広報なみえ掲載」

### ‘浪江は私たちのたった一つのふるさと’ 娘の言葉に思いを新たに

震災後、津島から福島市、新潟・三条市などを転々とし、現在は埼玉県所沢市に夫の良一さん、次女の喜沙羅さん(小6)、長男の魁杜君(中1)、そして愛犬のクレヨンと暮らしている。ご両親は福島市に、大学生の長女・未佳里さんは仙台におり、家族は離れたままである。

今生活している所沢市は、夫の出身地であり、仕事の関係もありやってきました。現在の住まいに移る際には、所沢市役所の職員の方に誠意ある熱心な対応をいただきました。あらためて、人のつながりやご縁が大切であることをこの震災を通して実感しています。こちらの学校に通う2人の子どもも、学校に慣れ親しんでいることにホッとしています。ただ、夫の仕事の先行きが不安なこと、そして何よりも浪江町のこれから見えないため、先のことを何も決められないことが悩みです。この春に政府が決定する新たな避難区域がどのようになるのかも心配です。

私たちは、父の代から長年、権現堂でガソリンスタンドを経営していたこともあり、お店に来られる浪江町の皆さんや、地域のつながりは本当になつかしいです。子どもたちは、権現堂の商店街の夏祭りや太鼓をしたり、ママさんバレーをしていたり、ママさんバレーをしていたり、行政区対抗のスポーツ大会などを楽しんでいたことを思い出します。原発事故によって、こうした地域のつながりが失われたことが寂しく悲しいです。ですが、今も商店街の皆さんが声をかけてくださり、時折、十日市などが開かれるたびに二本松に行っています。ありがたいことだと思っています。

私たちの避難先は、どちらかと言えば浪江町よりも都会であったり便利であったりもします。長女がいる仙台もそう。ややもすると、知らず知らずのうちにその便利さに安住してしまうのではないかと気になっていました。そんなとき、長女から「仙台や福島もいけれど、浪江はやっぱ私たちのふるさと」との言葉を投げかけられ、ハッとしました。遠くに暮らしていても、帰ろうと思えば帰ることのできる心の支えこそがふるさと。これからどんなことがあっても、ふるさと浪江を子どもたちに残さなければなりません。そんな思いを新たにしています。今は子どもの安全を優先して県外にいますが、これからは浪江町の皆さんとのつながりは大切にしていきたいです。数日後、埼玉で開催される町民交流会、なみえのしやべり場、にももちろん参加します。それぞれつらいことが多くあっても、私たちのふるさと浪江を心の支えに前に進んで行きましょう。



▲左から魁杜君、良一さん、喜沙羅さん、幸さん



福島県

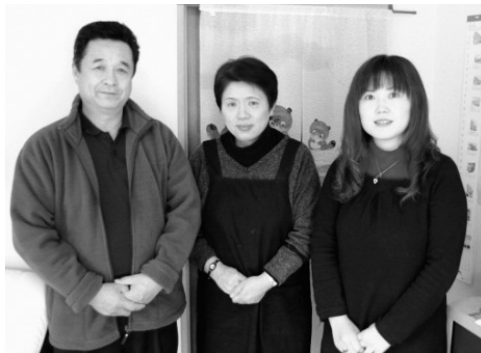
## 高木真智子さん(室原)

取材者：NPO法人市民公益活動パートナーズ 古山

取材日：2月12日 「平成24年3月 広報なみえ掲載」

### みんな、元気にしていますか？

南相馬市小高区の祖母の家から郡山の親戚宅、県境に隣接する白河郡西郷村の国立那須甲子青少年自然の家、そして猪苗代リゾートホテルでの避難を経て、昨年7月過ぎから福島市のシンボル、信夫山の麓の借り上げ住宅に、祖父、ご両親との4人で暮らしています。



▲ご両親と一緒に。

■子どもたちは全員無事でした  
震災当日、あの時刻は、私が勤めていたコスモス保育園では、ちょうど午睡の時間帯でした。子どもたちを慌てて園庭に避難させているうちに、町からバスが手配され、その中に避難しました。私の担当は2歳児で、訳が分からずきよんとしていましたが、年長の子どもたちは余震や尋常ではない周りの様子に、怖さで泣く子どもも多かったようです。次々に子どもたちのお迎えがあり、請戸で津波があったこともそのときに知りました。以前、請戸の児童館に勤務したことがあり、そのときの子どもたち

ちの安否がとても気がかりでした。

私自身は午後8時ごろには帰ることができたものですから、仕事でいわきに出かけて渋滞に巻き込まれた保護者の方が午後10時によく園に到着できたことや、隣りのふれあいセンターに避難した人が溢れ、園内のホールなどを開放して5、6人の先生方が翌日まで対応したことなど、後から大変だったことをいろいろ聞きました。

#### ■私も家族も、健やかです

私たち家族は、一時、祖父が親戚を頼って離れ離れになりましたが、すぐに4人が一緒に2次避難所で過ごし、縁あって、この十分な広さのある福島の家を借りることもできました。こは信夫山の裾にあるためか、放射線量が高いことだけが心配です。

まもなく1年を迎えますが、避難所などを移動している間は、「いつになったら？」という切羽詰まった気持ちでしたが、福島の家に着いてからは、心に余裕ができたのでしょうか、

あつという間です。

現在、私は休業中ということもあり、この4月までは長い充電期間だと思って、短大時代を過ごしたいわきや須賀川の甥の面倒を見に出かけたり、趣味である手芸や工作などをし、時には作ったものをお世話になった方々へプレゼントしたりしています。また、親しい友人とは互いの住まいの中間点で会ったり、メールで連絡をしたりしていますが、最近、手紙をよく書くようになってきました。

#### ■一度は浪江の家を見たいです

祖父や私の身体を気遣って、一時帰宅はいつも両親だけで、大事なものを福島に持ち帰ってくれています。いつになるかわかりませんが、見に帰りたいと思っています。

昨年8月に約半年遅れの卒園式が二本松で開かれました。年長さんだけの式でしたが、本当に久しぶりに保育園の先生方や父兄の方々にお会いできました。時折、なみえ焼そばを見かけた、知り合いの顔を見るたびに、浪江を思い出しています。



福島県

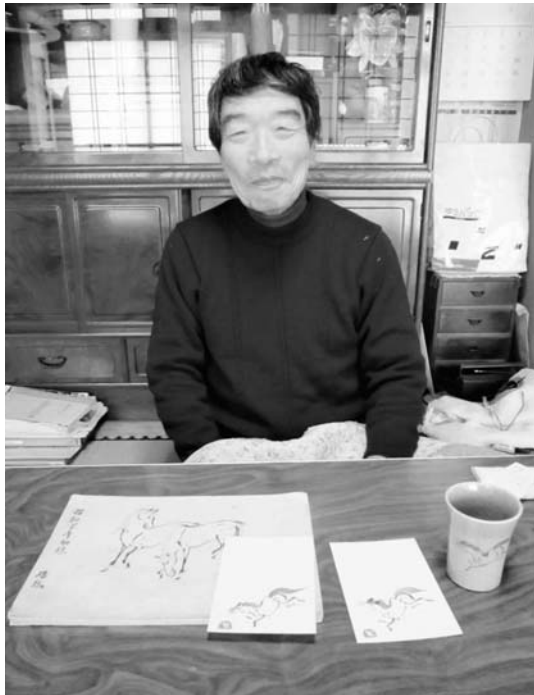
## 陶 俊明さん(小野田)

取材者：一般社団法人ふくしま連携復興センター郡山事務所 岩崎

取材日：2月15日 「平成24年3月 広報なみえ掲載」

### 窯を始めて100年目を二本松で再スタート！

大玉村で妻の絹子さんと二人暮らし。今年はおじいさんが大陶窯を始めてからちょうど100年。今は土に触れない生活を送っていますが、大堀相馬焼への思いと向上心は衰えていません。大堀相馬焼協同組合が今度二本松につくる共同窯で、新しい焼物に挑戦していきたいと思っているそうです。



小野田の区長をしていたので、震災当日はまず地区内のお年寄りの安否確認に回りました。家内と娘は先に津島に避難しました。津島で息子、娘とは分かれて、川俣、飯坂、北塩原と転々と避難生活をしました。当初はおにぎりが家族1個のときもありましたが、避難先の住民の方々も大変な状況の中、ほんとうに感謝しています。周囲にも人を傷つけるようなことをする人がいかなかったのが、たいしたものだと思います。10月になって、家内の昔の恩師の紹介で大玉村の空き民家に落ち着くこと

ができました。現在、娘はいわき市に住んでおり、息子は愛知県瀬戸市で焼物の修業をしています。今年私の祖父が大陶窯を始めてちょうど100年になりました。100年目の年をどうしようか、考えだした矢先の震災でした。避難生活では土に触れないうかが、大堀相馬焼をもっと盛り上げたい、もっと良い焼物をつくりたい、という気持ちは衰えていません。腕がなまらなように、祖父の描いた手本を見ながら絵付けの練習をする毎日です。

今度大堀相馬焼協同組合で二本松市内に仮の共同窯をつくるそうなので、私も窯を使わせてもらい、今の人たちにも使ってもらえる新しいジャンルの焼物づくりにも挑戦するつもりです。土も釉薬もいままでと同じのものを使うのは難しくなりましたが、300年の伝統がある大堀相馬焼のおもむきは再現して守っていききたいです。

震災の直後も近所のひとり暮らしのお年寄りが気がかりでしたが、戦後苦労して、やっと安心した暮らしができるようになってくれた上の世代の方々が手厚くされるべきだと思います。そして浪江の皆さんには、とにかく、「くさらないで希望だけは無くしてくれな。」と言いたいです。

冬の次は春が来ます。必ずこれからいいことがあると信じて、できることをしていきます。



福島県

## ヨガ&エアロピクス 「UP-BEAT」 長山のり子さん(権現堂)

取材者：浪江町役場 長沼・嶋原

取材日：1月20日 「平成24年3月 広報なみえ掲載」

### 初心に帰って始めてみよう

結婚と同時に浪江町に住んで30年。平成8年に開いたエアロピクスと整体ヨガのスタジオは、100人を超える受講者と6人のスタッフで運営し地元を根を下ろしていました。震災後の出会いから後押しされて、昨年6月に福島市大森でアットホームな雰囲気の「UP-BEAT」を再開されました。4月からは新たな挑戦も始まる予定で、福島の人が元気になるように活動していきたいと明るい笑顔を見せてくれました。

震災後、家族と津島活性化センターから元東和小学校体育館に避難しました。避難所に行く途中、場所を聞くために立ち寄った商店で出会った方に道を案内してもらいました。それが縁で、空き家を紹介され3月17日から福島市に住み始めました。

主人の仕事先が郡山市だったことや子どもが新たに通い始めた小学校に楽しんでいること、家族は一緒に大切だと思いい、放射能は心配だけど福島市で頑張っていこうと決めました。1カ月ぐらいはぼーっとして、今までの仕事はやめようかとも思いましたが、同じように郡山でスタジオを経営している友人から週1回のレッスンの手伝いを頼まれました。スタジオに行くうちに、震災に負けずに一人で一生懸命やっている友人の姿に、私も負けられない。一から始めてみよう、という勇気がわきました。借上げの条件に合う住まいが見つかるより先に子どもの学区内にスタジオが見つかり、6月に「UP-BEAT」を再開しました。浪江町のと看同じように、「らしくくエアロ」「整体ヨガ」「キツ

ズエアロ」をやっています。「キツズエアロ」は、外で自由に遊べない子どもたちのストレス解消にもなっています。スタジオには、福島市の方だけでなく浪江町の方も通ってくれていて、幼児から高齢者まで20名ほどが和気あいあいと楽しく受講しています。

福島市に来たことも、スタジオが見つかったのもたまたま出会った人からの紹介で、人との縁が繋がって今があるように感じます。初心に帰り、規模は小さくてもアットホームな感じで、長くゆつくり地道に続けていきたいと思っています。整体ヨガは珍しいらしく、カルチャーセンターから声を掛けてもらっ

て、4月から講座を開くことになりました。指ヨガの資格も取ったので、今を維持しながら新しいことにもチャレンジしていきたいですね。これからも福島の人が元気になれるように頑張っていきます。



▲長山さんと生徒の皆さん。  
後列左から藤田さん、横山寛子さん、高倉澄江さん、福島郁子さん  
前列左から藤田はなちゃん、長山さん、福島光結ちゃん、福島琉生くん